

普通教育研究會編

〔非賣〕

227

72

女子國語讀本備考

（自卷一至卷五）

東京 水野書店發行

女子教科 國語讀本備考卷の一

普通教育研究會編

明治 27 1 21

内交

一家の和合

●あざやか 漢字には、鮮を充つ。明及び新の意。  
●戸主 コシニ、いへぬし。一家の主人。  
●家族 カツク、人のやから、或る一家の家の内に、共に住居して其の家の主人の権力の下にある人の事。●主の父母妻子等をも含む。  
●未成年者 未成年者についていふ。未成年者の戸主たる場合には、必ず後見人を要す。

(二) 好き生徒

●品行 ヒンカウ、みもち。●無邪氣 ムジャキ、わるぎのなき、真に子供らしきこゝろ。●快活 ショイクツ、こゝろもちよく、さばくしてをること、又は親しみ易き氣象。●等閑に トウカン、なほざりに。支那唐時代の俗語。●あれほどまでにはと 前の、感心して居りますといふ語に、返り續かしめて見るべし。(ち)との抜目もありませぬ。宅の母なども、どんな大人の方でも、あれほどまで

にはと、感心して居ります。●幸福』ユウフク、しあはせ。●名譽』メイヨ、ほまれ、ほまれとすべきであるといふべきを、單に名譽といふ。

### (三) 花と鳥

これは、花と鳥とに、同情を寄せて、それをわが精神の上に、心の友として、歌ひたるものなり。●たのしみあらじ』「あらじは、あるまいなり、じは未來の打消の詞なり。●しらべ』とゝのはりたる音調。●聞かす』「聞かしむ」といふと同じ、すは使役の助動詞。

### (四) 自然の音楽

●琴』一面の長さ板に絃を張り直して、弾き鳴らす。樂器、多くは桐板にて相合せ、中を空しく作りて、絃の響をなさしむ。大和琴(あづまこと)とも、琴のこと、箏(そう)の琴、須磨琴、八雲琴、筑紫琴など、製作種々あり。●笛』竹或は木管にて作り、數孔を穿ち、口にて吹きて、曲節をなすもの、横なるもあり、豎なるもあり、横笛(ヨウテケン、ソウテケン)の笛、簫(セウ)の笛、箏(ソウ)尺八等を總稱す。今は専ら横笛のみを笛と稱す。●三味線』サミゼン、俗曲に用ふる樂器、胴と竿とありて、三線の糸を張る。故に三絃ともいふ。●ピアノ』Piano 大風琴と譯す。●オルガン』Organ 風琴と譯す。●人爲』シンキ、人のしはざ。以上の樂器どもは皆人の手によりて奏せられ、人のしはざによりて音楽となるものなり。

なり。これに對して、人の手を借らずに、調子よくて一定の節のある音を、自然の音楽といふ。即ち本文にいへる、虫鳥などの音の如きものをいふ也。●鶯』鳥の名、めじろに似て肥え、背は緑褐にして、腹は灰白なり。眼細く、嘴細く尖り、脚、掌共に灰黒なり。眉に三毛ありて灰白なり。吻に三嘴髭あり、藪などに棲みて、小蟲を食とし、早春より鳴き出す。家に畜ひて其の聲を愛す、蓋其の聲よりして名を得たるか。●雲雀』ひばり、雀に似てそれよりも少し大きく、頭背黒くして暗斑あり。眼傍、額は白く、胸、腹は灰白、脚細長く、爪も長く、尾も長し。原野の地上に巢くひ、春たけてより、晴明の日に、雲表に直上高飛し、且つ上り且つ鳴き、聲、連綿して息まず。故に告天子或は天鸞(てんらん)の名あり。●松蟲』蟲の名、野草或は松杉の籬に多し。こぼろぎの屬、褐色にして、髭長く、腹黄なり。秋の夜、羽を振ひて鳴く。籠に養ひて聲を賞す。又金鐘兒ともいふ。古ばす、むしといひき、ちんちろりん』と鳴く。今のす、むしは、古の松蟲にて、りんりん』と聞ゆるものなり。●山がら』山雀とかく、やまがらめといふ。山に産し、秋に至りて來る。形はほ、じろに似、頭黄白にして赤みあり。眼、額の邊に黒條あり。背、灰赤にして、嘴、胸、翅、尾共に黒く、腹は薄赤し。性、慧巧にして能く轉り、又教ふれば種々の戯をなす。人畜ひて玩とす。●百鳥』いろく多くの鳥といふことなり。鳥の名にあらず、ももとり』とよむ。●鳩』鳥の名、山野に

棲むを野鴿ノトリといふ。頂背、緑にして、頬邊黄に、胸に緑斑あり。腹白くして、緑文あり。翼尾黒く、嘴青く、脚赤し。又家に飼ふを家鴿、飼鴿堂鳩などいふ。大さ八九寸、頸短く、胸高く、尾短く、羽色種々あれども、藍紫なるを普通とす。又あをばと、山鳩、數珠掛鳩などあり。歐洲にては、白鴿を愛す。その清淨に見ゆるを、神の使なりといふ。迷信あるを以てなり。又これによりて、清き愛を表出すればなり。●胡弓コキウ』コキウ、古くはラベイカといふ。ホルトガル國より渡來せる樂器なり。三絃に似て小さし。初め三絃なりき。後にはその第三の絃のみを二線とす。ばちなく、別に小弓の絃を以て、その絃を鼓ヒきて音を發す。鼓弓とも提琴ともいふ。●鈴蟲スズムシ』前の松蟲の處を見よ。●機織ハタオリこほろぎ』はたおりはきりぎりすのことなり。古の名はこほろぎ。原野に多し。形はいなごに似たり。夏の半より鳴く。その聲がいすちよと聞えて、機織の聲の如しといふによりて名を得たり。雌は鳴かず。綠色なるものは、竹林藪などに居て、聲低く、褐色のものは、岡に居て、聲高し。きす、きつち、などの名あり。馬追ともいふ。漢名は蠡斯。こほろぎ、古名きりぎりす、長さ六七分、幅三四分、兩鬚六足にて、足と身とは油色なり。雄は背に黒く、薄き翅あり。長さ身に同しくして、紋脈あり。飛ふことは能はず。只後の長脚にて跳る。後に二尾あり。瓦石の間の土中に棲み、立秋より夜鳴く。聲高くしてリウ〜といふが如し。雌は翅短くして鳴か

ず。二尾の間に褐色なる一針あり。或はイトイともいふ。即ち蟋蟀なり。又一種、こほろぎ又は、えんまこほろぎといふあり。形は大きく、雄にも三尾あり、全身深油色にして、原野にありて晝鳴く。聲高く抑揚ありて、聞くに堪へたり。これをも或はギギといふ。きり〜すとはろぎとは、古今の名、正に相反すること。鈴蟲、松蟲と同じ。なほこれにつきては、諸説あれど、煩しければ省く。●金の板キノイタ』さんのいた。●笙シヤウ』シヤウ。さうのふゆ。又は、しやうのふゆともいふ。雅樂に用ふる樂器の名。筒の上に、十三又は十九の管を植ねならべ、筒の横より吹きならすもの。●ひちりきヒチリキ』筆葉、亦雅樂の樂器。笛に似て、豎に吹く。歌口にシシといふものを挿す。●尺八シヤクハチ』シヤクハチ。又は、ササハチともいふ。笛の一種なり。竹にて造る。長さ一尺八寸を制とするが故に名を得たり。面に四孔あり。背に一孔あり。筒の上端を歌口とし、豎にして吹くものなり。●琵琶ヒハ』音はヒハなれども、ピピとよむ。樂器なり。木製楕圓にして二尺餘あり。棹頭轉手のあるところ背に折れたり。四弦四柱、膝に載せて、ハハにて彈す。又は之を、よよつのをともいふ。字彙曰、琵琶胡琴、長三尺五寸、象三才五行、四弦象四時、推手前曰琵琶、却手後曰琵琶、取鼓時以爲名也。又自下逆鼓曰琵琶、自上順鼓曰琵琶。●月琴グヰン』グヰン。支那の樂器。琵琶に似たり。胴は正圓にして薄し。四弦十二柱あり。●豆太鼓マメダイコ』マメダイコ。小なる大鼓をいふ。小兒の玩ぶ

ものなり。

(五) 萩山直女 (一)

●岩村藩 美濃國惠那郡岩村町松平氏の舊領地。 ●下婢「カヒ下ケ。 ●そばえつき」たはむる、される、などの意。 ●破れぬ」われぬ。 ●我れにもわらず。 正氣を失ふばかりに、無宙になつて。 ●主婦」一家の戸主の妻をいふ妻は家庭の主なればなり。 ●部屋」へヤ、自分の居室。 ●新參」シンザン、新しく來れるもの。 ●ほとり」傍、或は邊、そばのこと。 ●日常」ふだん。 ●そそっかし」輕卒、粗忽。 ●不調法」ブテウハウ、あやまち、失策。 ●阿爺」アヤ、おとうさま。父のこととを爺といふは支那の俗語、阿は親む意にて之に添ふ。 ●お詫」オワビ、謝罪、あやまること。

(六) 萩山直女 (二)

●町噺」テイネイ、ねんごろ。或は丁寧とも書く。 ●眞面目」まじめ。 狎れ戯などせぬこと。 ●青磁」セイヨ、陶器の名なり。無地にて、うすあゐ、又は、うす緑のくすりをかけたもの。 ●さづかふ」配慮。 ●そいろ」又は、すゝる。何となく、何故となくの意。 ●荒っぽい」あらくしき。 ●再生の恩人」命の親といふが如し。無き命とまで思へるものを助けられたるは、再び命を興へられたる如く

嬉しといふよりいふなり。 ●圓滑」エンクツ、おだやか。 ●局を結ぶ」くゝりをつ

けること。その事をしおへたること。 ●あつぱれ」或は天晴ともかく、賞美感嘆の詞

「あはれ」より轉し來りて、形容詞、副詞、又は名詞狀となり、物の善美を言表すに用ふ。 ●

鑑」かゝみ、般鑑、龜鑑などいふ。手本といふほどの意。

(七) 名取彦兵衛の製糸業

●甲府」山梨縣甲府市。 ●なり

はひ」生業。 ●おもへらく」思へるの「る」が延音となれたるなり。 ●聲價」名聲評

價。 ●家産を傾く」身代を失ふなり。 ●比隣」近所近邊といふこと。 ●迂拙」ウ

セツ、迂愚拙劣。 ●撓さず」たゆまさず、途中にて止めるやうのことなく。 ●粹」わ

く●提糸」さげいと。即ち仕上げたる糸をいふ。 ●勸奨」クンシヤウ、勸はす、むる。

勸諭なり、奨はす、むる、奨勵なり。 ●おはやけ」官府、政府をさしていふ。

(八) 價高き衣服

●解すべき語なし。

(九) 皇后陛下御誕辰祝宴を通知す

●御誕辰」ゴ

タンシン、誕は誕生のこと、辰は時とも日ともいふ。誕辰は誕生日といふことなり。御は尊敬を表する時に、或る語の上にそへていふ。御誕辰は嘉永三年庚戌四月十七日、陽

曆にては五月廿八日に當る。毎年の日を以て地久節とす。各女學校は、課業を休み、式を  
 擧ぐる事、何處も同じ。 ●若葉の梢』わかばのこずゑ。五月の末には、凡ての木みな  
 新しき芽を出す。これを若葉といふ。その若葉の出でたる木の枝などを、若葉の梢とい  
 ふ。若葉せし木々の意。 かげ。ありさま、なつかし、いとしい。忘れがたき意。 ●め  
 でたく』殊に好しとの意。 ●はた』將、且、又などの意。 ●あらまほし。ありたし、あ  
 らんことを欲するといふ意。 ●更へし袂』昔、衣替の節といふことあり。陰曆四月朔  
 日と十月一日となり。厚き衣を脱ぎすて、薄くかろらかなる衣の袂さへいとかるきが  
 うへに、朝風の心地よく吹きたらんいかに快かるべき。 ●御第』第は邸と同じ。ダイ  
 ともテイともよむ。おんやしきとよむ方然るべきか。 ●げに』まことの意。 ●大御  
 惠のつゆにうるほふ我れ我れ民草。皇室の御仁惠深くましますことを、露によそへ  
 て、そのおほきみめぐみのつゆに潤ひそだつ、我々民草といひて、民を草にたとへ、民草  
 は偏に君の惠みのつゆによりて生ひ育つものなるをいふ。 ●かたじけなし』嬉し、  
 勿體なし。 ●申さんすべ』いふべきでだてすべはでだてなり。 ●三大節』元始祭、  
 紀元節、天長節といふ。元始祭は、一月三日陛下親ら皇祖皇宗を拜し、年の始を祝ひ祭  
 り給ふ日なり。紀元節は、神武天皇御即位の日にして、今より二千五百六十三年以前

に、國の基礎始めて立ちたる日の記念なり。もとは正月一日なりしを陽曆に改めてよ  
 り、二月十一日となる。天長節は、陛下の御誕辰なり。御誕辰は、嘉永五年壬子九月廿二  
 日なるを、陽曆に改めて、十一月三日となれり。 ●さりぬべき御事』然あるべき御事、  
 又は、もつとももの御事。

(二〇) 椅子取り遊戯

●間斷』カンマン、たえま。 ●旋り』めぐ  
 り。 ●板敷』イタツキ、いたのま。 ●芝生』庭の芝の生ねてある處。

(二一) 奇異なる植物

●印度』インドは、南部アシアにありて、印  
 度洋に突出せる大半島なり。此の國は、世界文明の母とも稱せらるゝものなれども、今  
 は大部英國の管轄に歸せり。人口、凡そ三億、人種はヒンヅー種、宗教は婆羅門教、階級の  
 制度嚴にして、階級異なるものは、互に交通せず。その言語亦通せされは、國の統一望むべ  
 からず。されど天産は甚た豊にして、綿、米、黃麻、茶、阿片、藍等あり、虎、獅子、毒蛇の害、年々少  
 からず。 ●布哇』西經百五十六度、北緯二十度にある大島の名にして、其附近の諸島  
 を合して、布哇(サンドウィッチ)諸島といふ。横濱より米國の桑港に至る航路の中央に  
 方る。我米國行の船は、必ずこゝに寄港す。大さ我四國位なり。 ●パンヤン』Panyan 榕

樹の一種。琉球臺灣等にもあり。●**憩はしむる**』いこはしむる。●**月見草**』つきみさう。磧又は砂地に多し。高きものは五尺に至ることあり。花は鬱金にして、一基に五六十をつく、叢生なり。●**向日葵**』ひまはり。夏花を開き、高さ六七尺に至る。菊の一種なり。葉は圓く、末尖りて、鋸齒あり。其の頂に、徑五六寸許りの菊花に似たる黄色の花を開く。その花常に日脚の方に向ふ。故にひまはり、ひぐるま、日輪草などの名あり。●**ねむり草**』おじぎ草ともいふ。原野に自生す。熱帯地方に産するものは、其莖甚しく刺多く、葉を垂下する時は、その刺多き基のみ露出するを以て、動物の餌食となることを免る。又有害蟲來れる時、其葉忽然下垂すれば、蟲類は足を踏み外して、驚き去るといふ。又その垂下するは、大に雨水を防く効ありといふ。●**ねむの木**』合歡木と書く。高きものは、二三丈に至る。枝茂く生ふ。葉は細小なるもの、相對生して一葉をなす。夏の中頃花を開く。本白く末紅き細糸を束ねたるが如きものなり。長さ一寸餘、後莢を結ぶ。實は米粒の如し。ねぶのき、ねぶりのき、ねむねぶ、などの名あり。●**カロリナ**』北亞米利加合衆國の一州にて、東は大西洋に臨み、南、フロリダ州に接す。北米合衆國は、四十五州六領區より成る。合衆共和國にして、統治權を行政、立法、司法の三權に分つ。大統領は内閣の高官、各省の屬僚を率ゐて、行政を司り、元老院と代議院とより成れる合衆議會は、法律

制定し、司法權は高等法院、覆審法院、地方法院等に屬せり。我國との貿易交通は、嘉永六年ペルリの來りしを以て始まり、今は互に重大なる關係を有す。●**蠅地獄**』はへぢこく、はへとりぐさの一種。●**扁平**』へんぺい、びらたきこと。●**葉柄**』エウヘイ、木の葉の枝に付く所の莖を葉柄といふ。●**中肋**』葉の中央の線を、中肋脈といひ、その線より兩邊に向ひて、走れるが如き線を支脈といひ、總して葉脈といふ。此葉には、中肋脈と葉縁との間に三個の硬毛あり、相平行す。●**硬毛**』カウモウ、こはき毛。●**葉縁**』エウエン、葉のへり、ふち、葉端のキザくの所。●**刺毛**』シモウ、はりの如き毛。●**交錯**』カウサク、いりみだれあふ、いれちがひくみちがひになること。●**閉鎖**』ヘイサ、とぢこめること。●**分泌**』ブンピツ、じくく出す。●**うつぼかつら**』今小石川植物園に培養す。マダカスカル島にては、旅人山中に迷ふ時、渴を醫するため、往々之を用ふといふ。チベンテスの一種なり。此の書の二の十四を參照すべし。●**食蟲植物**』肉食植物ともいふ。葉の作用によりて、よく蟲を捕捉するが故に名く。●**狸藻**』たぬきも、水中に生ずる藻の一種、枝の先きに小さき壺の如きものを備ふ。●**毛氈苔**』もうせんぞけ、山野の水苔中に生し、夏時小白花を開く。葉は杓子狀をなし、表面には細毛密生し、その毛頭より、露の如く粘液を分泌す。之を粘毛といふ。小蟲來りて觸るゝ時は

忽ち粘着せられて飛ぶことを得ず。同時に、毛茸は漸く内方に巻き、他の毛茸も、亦徐々に屈曲して、全く蟲を包む。この際毛端より、一種の酸性液を分泌し、以て蟲の身體を溶解し、其の消化し易き部分は吸収し、固き部分はそのまま、残留す。消化作用了れば、毛茸は再び伸張して、前の如くなる。毛氈苔の下には蟲の屍體残れり。

(注意) (植物の運動には種々あり、睡眠運動とは、ねぶおじき草の如きをいひ、觸接運動とはおじき草また食蟲植物の如きをいひ、自發運動とは、日まはり、天神草などをいひ、成長運動は、麥、筍の如きをいひ、點頭作用とは、藤、朝顔の類をいふ。又全體ともに運動する植物あり。これは往々にして動物と誤認せらるる。)

## (一一) 飲料水

●老廢分 人の身體中にありて、何の用をもなさぬ部分。

●排泄 ハイセツプツ、おしだし、すてること。人の身體には、常に血液の循環ありて、それと共に、新鮮なるもの、吸収と、老廢分の排泄と、此の二作用行はる。老廢分は、汗等となりて排泄せらる。兩便も亦排泄物なり。此等の作用不完全なる時は、終に病氣となる。

●軟水 ナンスイ、石灰質を含まざる水。たとひ石灰質を含むことありとする、その量の極めて少きもの。

●硬水 カウスイ、無水炭酸を含める天然水は、石灰質に觸るれ

ば、之を溶解する性あり。而してその多量の炭酸、及び石灰、若しくは他の石灰化合物を合む水を硬水といふ。硬水は人の皮膚を粗糙にし、石鹼に觸るれば、其の成分中より、水に溶解さる石灰石鹼を取りて、石鹼の功を減却す。

●礦物質 凡ての無生物を礦物といふ。金屬、岩石、其他無生物を形成するものは、即ち礦物質なり。

●珈琲 コーヒー Coffee 珈琲樹は、もと、アビシニアの産にして、十五世紀の頃より、アラビヤに移植せられ、ジャワ、及びスマトラ等にも栽培せらる。常緑の灌木にして、櫻の如き果實を結ぶ。此の果實には、二個の核あり。之を珈琲豆といふ。此の豆を焙焼し、粉としたるものは、即ち吾人の煎して飲用する、所謂コーヒーなり。

●調理 テウリ、料理に同じ。

●石鹼 セキケン、シャボン。

●爽快 ソウクワイ、こゝろもちよきこと。

●凝結 ギヤウケツ、こりかたまる、かまりあふ意。

●汚物 ナブツ、けがれたるもの、塵埃などの如き。

●僻遠 ヘキエン、遠く都會を離れたる田舎といふ意。

●不消化病 食物のこなれざる病。

●有機物 往時にありては、動植物質の生成は、生物の機關作用によりて生ずるものにして、人工を以て、到底製出すべからずと信せられたり。故にその生物機關を有する動植物より得たるものを、有機物といへり。これに對して、無生物なる礦物より得たるものを無機物といふ。然れども其後醫術の進むに従ひ、總ての物質は、皆同一の



化學的規則に支配せらるゝことを確認せり。是に於いて、學術上、此の二門に分つ必要なきに至れり。されど、久しく慣用し來れるものなるが故に、尙之を廢せず。只今日にては、其の主成分をして炭素、水素、其他二三の元素を含有するものを、一括して有機物といふ。本文にては舊來の意味にて、はたらしきのある、生命のある物の意。●コレラ●にコレラ、アシアナカ Colera Asiatica 即亞細亞虎列刺病と稱す。もと専ら亞細亞特に印度に流行し、その地方的傳染病たりしものなればなり。十九世紀に及ひて、歐洲及び我國を席卷し、遂に到る處に激毒を逞しうするに至れり。千八百八十四年、微菌學の泰斗、ロベルト、コッポ氏、危険を顧みず、コレラ激甚地印度に至り、終に一穗のパナルスを發見せり。これ即ち亞細亞コレラパナルスにして、遂に諸大家の賞讃を得て、同病の原因と認定せり。コレラ菌は胃中の鹽酸のために、よく撲滅せらるゝを以て、健康なる人の胃をば無事に通過すること能はざるべしといふ。胃の健康を要すべきこと明なり。コレラ病にかゝる時は、吐腹雷鳴して、米の精き汁の如きものを下痢するを常とす。霍亂もコレラの一つにてコレラノストラスと稱す。

(注意) 傳染病菌及び其發見者  
病原菌

(發見年月)

回歸熱菌	オリベルマイエル	一八七三
麻疹菌	ナイセル	一八七九
腸チフス菌	ウエーベルト及ピコツボ	一八八〇
癩病菌	ハンセン	一八八一
丹毒菌	コッポ	一八八一
結核菌	コッポ	一八八二
コレラ菌	コッポ	一八八四
破傷風菌	北里	一八八九
チフテリア菌	ロエフレル及クレープス	
化膿諸症菌	オグストン	
微毒菌	エルザン	一八九三
ペスト菌	エルザン	一八九四
學校傳染病		

第一類 主に空氣を経て呼吸機より傳染するもの。

甲 痘瘡及び假痘、窒扶里亞、猩紅熱、發疹窒扶斯

乙 百日咳、流行性感冒、流行性耳下腺炎、風疹、水痘、肺結核、癩病  
 第二類 主に食物と共に消化機より傳染するもの  
 赤痢、虎列刺、腸窒扶斯

第三類 主に觸接傳染するもの

傳染性皮膚病、傳染性眼炎

●下痢』ゲリ、くだりはら。 ●赤痢』セキリ、痢病の激しきもの、病原菌明ならず、原生動物のアミーバの一種といひ、又はバクテリアなりともいふ。 ●寄生蟲』キセイナ、人の體内にやどりて生活する蟲、さなだむし、蛔虫などはこれなり。

(二三) わかがへり ●嫗』おうな、オイナ(老女)の義。 ●心もとなく』

不安心、おぼつかなく思ふ意。 ●などて』何故にて。 ●夜半』よは、とかきてよわとよむ、夜間といふに同じ、或は夜なかの意にも用ふ、但しこゝにては漢字の半夜、又は中宵の意なるべし。 ●鳥と共に起きて』鳥は朝早くより飛出すものなれば、早起したるをいはんとて、かくはいひかざりたるなり。 ●ゆくへ』行方、又は行邊とかく、行きしあたりの意。 ●心もとなき』覺束なき、氣にかゝるなどの意、氣が氣でないとい口

語にはいふ。 ●せまし』「せむといふ詞とまし」といふ詞の結合せるもの、共に未來を表す。 ●うごめく』蠢爾、むごく、うごく、少し動く。

(二四) 富士山 ●富士山、富士は我邦内地に於ける高山として三尺の童

兒もなほこれを知り、外人も亦之を稱す、古來我邦の人、詩歌に詠せるもの數多し、その形状の面白さを以つて、或はその變はらざるを以て、これをたゞ、わてやます、稱して以て靈山とし、又神州精靈の氣の鍾る所とし、又以て我邦の鎮なりとせり、駿河の駿東富士兩郡、甲斐の南都留東西八代の三郡に跨る。 ●富士山の最高點は一萬二千三百七十尺なり、頂上は夏季と雖も非常に寒き故、綿入をきて登るを常とす、山頂に噴火口あり。 ●富士山には八葉峰、芙蓉峰など種々の異名あり、傳へいふ、此の山、孝靈天皇の第五年(紀元三百七十五年)に涌出すと、往時は頂上常に烟を噴きたりしが、東山天皇の寶永四年十一月(紀元二千三百六十七年)の噴火に寶永山を生してより後は、噴烟なく、今は間歇性の火山となれりと云ふ。 ●最も古く文學に現はれたるは、萬葉集なるべし、いはく。 ●山部宿禰、赤人望不盡山歌一首并短歌 ●天地の分れし時、神さびて、たかく貴き、駿河なる富士の高嶺を、天の原、ふりさけ見れば、度る日の、かげもかくる

ひ、照る月の光も見えず、白雲も、いゆきは、いかり、時じくぞ、雪はふりける、語りつぎ、いひつきゆかむ、不盡の高嶺は。田兒の浦に、打出で、見れば、眞白にぞ、富士の高嶺に雪はふりける。●詠不盡山歌一首并短歌 (讀人不知) ●なまよみの、甲斐の國、打ちよする、駿河の國、こちごちの、國の三中に、出て、しある、不盡の高嶺は、大雲も、いゆきは、ばかり、とふ鳥も、とびもの、ぼらす、燦ゆる火を、雪もてけち、ふる雪を、火もて消しつゝ、いひもかね、なづけも知らず、あやしくも、いまず神かも、せの海と、名けてあるも、そが山の、つゝめる海ぞ、不盡河と、人の渡るも、その山の、水のあたりぞ、日の本の、山跡の國の、鎮とも、いまずかみかも、寶とも、成れる山かも、駿河なる、不盡の高嶺は、見れど飽かぬかも。●反歌『不盡の嶺に、零りおく雪は、六月の十五日に、消ぬれば、その夜ふりけり』●布士能嶺を、高みかして、み天雲も、いゆきは、ばかり、日たなびくものを。●業平朝臣の歌には、時知らぬ山は、富士の嶺いつとて、か鹿の子まだらに、雪はふりけむ。●夏なは寒き白雪は、白雪が夏も山に、つもるといはずして、雪が空のまなかに、つもるといふは、歌の修辭法なり。●足柄山』相模國足柄郡にあり、富士の高きを、いはんとて、その麓に、わく雲が、足柄にかゝるといへるなり。●富士の裾野』富士の麓の原野を、裾野といふ、駿河にも、甲斐にも、あり。●箱根は、相模にあり、俗に、箱根八里といふ、前の句と同じ

趣向なり。●三保の松原』駿河灣に、突出せる半島なり、有渡郡三保ヶ崎、松原ある故にいふ。謡曲『羽衣』天女の降りたりなどいへるにて、名高し。●田子の浦』駿河國富士郡の南部、田子村と、元吉原村とに、亘る海岸の總稱。●萬葉集赤人の歌に』「田子の浦、ゆうち出て、見れば、眞白にぞ、富士の高根に、雪はふりける」とあるを、古今には、『浦ゆ』を『浦に』に改め、ふりけるを、ふりつゝにかへて載せたり。●富士仰かぬも、なかりけり』古、東海道を、通行せる人、皆日記に、文章に、之を記さざるは、なし、故に、しかいふ、竹取、伊勢、今昔などの物語にも、亦これあり、其他歌ども、文どもに、多く見えて、委しくは、いふ要なからん。

(二五) 初航海 ●嘉永六年』我紀元二五一三年、今より五十年前。●安

政二年』紀元二五一五年。●和蘭人』オランダ(Holland)は、歐羅巴中部の西北の小國なり、徳川氏の時代に於いて、既に我國と交通す、昔時は、世界第一の商業國にして、現今にても、貿易甚た盛なり、かつて露西亞の郡縣となりしことありしが、今は、獨立王國となれり。●嘉永元年』皇紀二五二〇年。●甲比丹』カピタン、こは和蘭語にて、いふ船長といふことなり、ブルック、その船の水師なる外人の名なり、他の書には、一切外國

人の手をからず云とあり。●露西亞」歐羅巴の東半と、亞細亞の東半とを占む。面積に於いて、世界第一の國なり。東は北太平洋に瀕し、北は北氷洋に入り、既に北極圏に入れる所も多し。地理學上、亞細亞、ロシア、歐羅巴、ロシアに分たる。君主專制の國にして、内閣あり、樞密院あり、外務、陸軍、海軍、内務、司法等の諸省及會計検査院等あり。陸軍九十萬人、海軍は九十萬噸の兵艦あり。明治廿七八年の役、遼東半島を支那に還附せしめたるものは、此の國とフランスとドイツとの三國なり。首府をセントペートルといふ。ペートル帝の建設する所、人口百二十七萬と稱す。ヒンランド灣に臨み、軍港を備ふ。●ペートル」ペートル大帝は西洋紀元一六七二(我二三三三)延寶元年(六月九日、モスコイに生る。一六七六、父アレキキス自殺し、庶兄フェオドル三世位に即く。一六八二、フェオドル三世死し、母后政を攝し、一六八九遂にツァールの位に登る。まづトルコを討ちて、アゾフ海邊を奪ひ、更にスウイデンよりハルチク海岸を畧取せんとし、西歐諸國を歴遊してその文物を學び、また造船の術を極め、そのモスコイに歸るや、大に百官を督勵し、學校を建て、工場を設け、大に陸海軍を整備し、北歐を侵畧し、東方亞細亞を経畧す。露國の威これより四方に輝く。●絶倫」ゼツリン、倫は、ともがらなり。絶は、なきなり。即ちともがらなきなり。等輩を抜け出で、比すべきものなきをいふ。●人傑」シンケッ、人の

すぐれたるもの、英雄、豪傑などの意。●桑港」サンフランシスコ北米合衆國の西部カリフォルニア州にあり。米國太平洋岸唯一の良港にして、世界交通の衝に當る。市況甚盛、我國人の居留するもの、年々多きを加ふ。領事館あり、横濱の直東四千七百五十海里の處にあり。灣口は有名なるゴールデンゲート(金門)にして、風景絶佳なり。(San Francisco) ●勝麟太郎」海舟と號す。通稱を安芳といふ。徳川幕府旗本八萬騎の一なり。文政六年正月江戸に生る。幼にして刻苦激厲、勤學甚力む。維新の際大功あり。後明治政府に仕へて海軍卿となり、後樞密顧問に任せられ、伯爵を授けらる。明治三十二年薨す。年七十八。東京府下荏原郡池上村洗足に葬る。●佐々倉桐太郎」浦賀奉行の御船手と稱する。幕府水軍の士なり。●威臨丸」西洋紀元一千八百五十六年、即ち我が安政三年、和蘭にて製造せられ、翌安政四年徳川幕府に購入せらる。長二十七間半、巾四間、噸數二百五十、馬力百の小汽船なり。大砲は十二門を備ふ。萬延元年正月十三日品川出帆當時の乗組人次の如し。軍艦奉行木村圖書、教授方頭取勝麟太郎、教授方佐々倉桐太郎、鈴藤勇次郎等八人、通辨主務中濱萬次郎、教授方手傳赤松大三郎等四人、操練所勤番一人、同下役一人、醫師牧山修卿、木村宗俊、門人二人、鼓手一人、外に福澤諭吉、秀島藤之助、水夫五十人、火焚十五人、大工一人、鍛冶一人。●砂時計」砂を盛りたる硝子器にて、その砂自然

に流れ出で、時を知らしむるもの。享保年間の記録に、猫戯れて砂漏を翻すとありて、櫓時計の如きもの、中邊より、砂のこぼれ出づる圖を畫けりと或る書に見わたり。

### (一六) 瀬戸内海

●瀬戸内海』近畿の一部、紀伊、淡路、四國島、九州島山

陽道一帯の間に、包まれたる内海をいふ。東西の長さ一百餘里、南北の廣さ四五里より二十里に及ぶ。外海は、東南鳴戸の瀬戸を以て、太平洋に通じ、西は馬關海峡を以て、日本海に連り、西南は速吸門より太平洋に接す。●大阪』大阪府は、和泉、河内二國及び攝津の一部を管す。大阪市は府廳の在る所にして、京都の南西に在り。方凡そ二里、行政上東西南北の四區に分つ。東京に次ぐ都會なり。●安治川』淀川の一派にして、古昔川村瑞賢の開きし所なり。(アチカハ) ●大阪港』筑港工事半は既に落成す。●天保山沖』安治川口にある山を、天保山といふ。●神戸港』もと兵庫と神戸との二つに分れ、湊川を以て堺とせしが、今は合して一市となる。●須磨明石』スマ、アカシは風光絶佳の地として、人口に膾炙す。この地の景色を詠せる詩歌亦多し。播磨明石郡。●わくらはに問ふ人わらば須磨の浦にもしはたれつゝ、わふと答へよ。(業平) ●はのはのと明石の浦の朝霧に島かくれゆく船をしそ思ふ。(柿本人丸) ●白峯』崇徳天皇の

陵あり。其宮趾を鼓が岡といふ。(シラミネ)。●高松』高松市は松平氏十二萬石の城趾保多織を特産とす。●屋島』又八島とも書けり。元暦元年平氏一の谷の戦敗れ、舉族天皇を奉して、海に航して八島に逃れ、城壘を構へ、源軍を迎へ撃つ。勝ちはこりたる源軍も、爲に大に苦戦す。讃岐國山田郡屋島壇の浦も此の附近なり。●多度津』讃岐多度郡に屬す。四國中國間郵便線路の要點なり。●波止場』ハトバ、防波堤船を碇泊せしむる所。隨て又棧橋をもはとばといふ。●琴平神社』讃岐國那珂郡琴平、象頭山の麓にあり。大物主神を祭り、崇徳天皇を合祀す。本邦船員の最も崇敬する所なり。此の町に水難救濟會本部あり。(コンピラともいふ) ●鞆津』トモノツ、備後國沼隈郡の半島の東端にあり。●埠頭』前の波止場と同じ。●尾の岬』備後國御調郡にあり。停車場の在る所なり。今尾之道市となる。●要衝』エウシヤウ、要害の通路なり。き衝は通道なり。●内海』瀬戸内海のこと。●宇品』ウシナは、元島なりしが、築堤によりて本陸と連接せるものなり。

### (一七) 瀬戸内海

●廣島』廣島市は、廣島縣廳の在る所。市内に太田川あり。控訴院、第二高等師範學校あり。征清役後頼に繁盛を加ふ。●大元帥』もとはた

だ大總督、總大將の意。今は陛下親ら總都督の地位に立たせらるゝにより、かく申したてまつる。 ●宮島』ミヤジマ、嚴島、安藝國佐伯郡の海にあり。 ●嚴島神社』市杵島姫を祭る。社殿は平清盛の造營にかゝり、岸により水に架し、廻廊長く繞る。毛利元就の陶晴賢を滅ししも、此の近傍なり。 ●實に』げにとよむべし。 ●岩國』周防國玖珂郡岩國町。 ●錦帯橋』キンタイキヤウ、又は算磐橋といふ。日本三奇橋の一なり。 ●徳山』周防にあり。本州九州交通の要路。 ●三田尻』ミタヨリ、周防にあり。鹽田多し。 ●門司』モジ、石炭の輸出盛なり。今は市となる。 ●馬關』バクワン、長門國赤間關市。明治二十七八年戰役馬關條約の締結地。 ●一葦の海水』わづかばかりの水といふこと。一葦は小舟のことなり。小舟にても渡らるべきほどの小さく細き流れ。 ●咽喉』インコウ、要地といふが如し。人の體にすれば、正に咽喉の如く、大切なる處といふことなり。 ●硯の海』スズリノウミ、馬關門司間の海の名。 ●檀の浦』長門國赤間關市檀浦町の海面。文治元年三月源平兩軍此地に戦ひ、平氏大敗して、將士殆盡き、安徳天皇崩せさせたまふ。

(一八) 幼き「ナイチンゲール」

●「ナイチンゲール」 Nightingale

Florence. 嬢は千八百二十年(我二四八〇、文政三年)四月四日伊太利のフロレンスに生る。病人及び負傷者の看護に従事して、大なる名譽を得たり。今の赤十字事業は、嬢によりて創始せられたり。父はウイリアム、ジョリアといひ、シエッフキールドといふ處の銀行家なり。嬢は幼より、既に病者を看護する慈愛と嗜好とを有し、又特にしか教育せられたり。後英京ロンドンに於いて、病院を支配し、一八五四年クリミア戦争の時、傷病兵看護の特志看護婦として、戦地に出張し、病院を設けて、兩軍の傷病者を收容す。嬢の企業大に成効し、遂に世界到る處、赤十字の標を見ざる所なきに至らんとせり。 ●牧師』ボクシ、耶蘇教の僧。 ●スコットランド』イギリス國の内なり。イギリスの本稱を、グレートブリタンといふ。元は四國なりしを、聯合して一國となれり。四國とはイングランド、アイルランド、スコットランド、及びウェールズなり。英國の北部なり。一時は最も教育の發達したる國と稱せられき。本文は此のスコットランドの人の牧師某といふものといふ意。 ●鹽梅』アンバイ、接排ともかく。工合といふに同じ。 ●焔衝』キンシヤウ、醫學上の語、身體の或部分に、熱をおこし、或は腫れ痛みなどし、かつ、その部の官能に異狀を呈するをいふ。 ●奄包』アンボウ、これも醫學上の語、奄は蒸す、包はつゝむなり。解は下の牧師の答にあり。

(二九) 無効の節儉 ● 解釋の要なし。

(二〇) 子守女の周旋を頼む ● かしこ 畏し、恐多しの義

轉して敬意を表するに用ふ。又書簡文の終には必ず置くべき習となれり。 ● かひがひしく』まめくし(忠實)けなげ(健)などの意。

(二一) 夏の一日 ● あわたいしく』あわてまどふ状形容詞 ● 電照

りはためく』電光耀き、雷聲烈しく鳴るはためくはてりかやく意。 ● 一陣の風』ひとしきり急にふさくる風を一陣の風といふ。雨にも亦いふ。 ● 打撲撃』共にうつとよむ、撃には動かす意なり。撲は小撃なり。打も撃の小なるものなり。 ● いかめしく』嚴として犯すべからざる様子をいふ。 ● ぞうく』澁々ならん水の激する聲なり。或は轟々ならんか、水の音の形容なり。 ● さで』魚を捕ふる具、竹又は木を撓めて、圓くし又は箕の形にし、それに網を張る。 ● すがくし』清々の意、さわやか、さつぱりなどの意。

(二二) 雨後の雲 ● 解を要せず。

(二三) 十錢銀貨の來歴 ● 十錢銀貨』明治四年より發行、五年

十一月量目寸法改正。同六年一月圖書改正、徑五分八厘、量目七分一厘八毛八、性銀八銅二。 ● 但馬國生野』銀鑛あり。 ● 大阪造幣局』大藏省の所管なり。貨幣を鑄造するところ。 ● 上野』東京市下谷區車坂町にあり。上野公園の東なり。日本鐵道與羽線中仙道線(直江津線)土浦線等の起點なり。上野公園の事は後に出づ。 ● 福島縣若松市』會津平野にあり。松平氏二十八萬石の舊城地なり。戊辰戰史上に有名なり。會津塗、繪蠟燭、人參等を産す。人口二萬九千。

(二四) 十錢銀貨の來歴談 ● 米澤』羽前米澤市(上杉氏十萬

米澤織の産地) 人口三萬六百) ● 秋田』羽後秋田市(縣廳の所在地、人口二萬七千、秋田織) 入口三萬六百) ● 新潟』越後新潟市(信濃川の河口、五港の) 入口五萬二千三百) ● 敦賀』越前敦賀町(北海道と大阪との商品取引の一、謀介) ● 大津』近江大津市(滋賀縣廳所在地、人口三萬三) ● 京都』山城國に在り府廳の在る所、府は山城丹後、及び丹波の一部を管轄す。京都市は桓武帝より東京遷都す

で千有余年の帝都にして、我國第三の都會なり、人口三十五萬三千二百人、東京と相對して、或は西京ともいふ。三條通を以て、上京下京の二區に分ち、市街頗る端正なり。山水秀麗、風俗優雅、市民は美術工藝に巧なり。西陣織友禪染、鹿子絞、清水焼、粟田焼等名産多し。琵琶湖疏水工事完成してより、市民大に其澤に浴す。●**腑に落ちぬ**『腹にいらぬといふに同じ、合點のゆかぬ。●**苦しかりしか**』『しがと濁るは非なり、しかと清みてよむべし。上にこそありて過去を表はす場合には、しといはで、しかといふ。ぞや、なむなどの上にある時は、し、何もなき時は、きを以て文の終りとす。

(注意) 此文は地理と關聯して課すべし。鐵道及び交通の現狀などを説明せば、興味多からんと覺ゆ。

### (二二五) 愛らしき子

●これは故郷に残れる父母が、學びに出てたるその子を思ふ由を歌へるなり。●**まささくて**『幸に、又無事に、健康に、などの意、ささく』といふ詞に、まの發語がそはりしものなり。●**おぼつかかな**『おぼつかなしなり。心細し、心もとなし、などの意。音信絶えてより、三月も経ぬ。昨日今日秋風時に寒し。學びに出でし我子や如何に、無事にて學問に勤むやいかに。まことに心もとなしとなり。

●**學びし**』この「し」は助辭の「し」にて、學びを強めたるまでなり。●**そを**』「そは、其なり」といふ語根に「れ」が「の」を、などそはりて普通の語となる。今はたゞ語根のみを取れるなり。嬉しき時も愛さき時も、我子が學を果て、かへるべき日を、指折りかぞへては、それをせめてもの慰藉として居るなり。さても我子の思はることよ。

### (二二六) 公爵の幼時

●**近衛公爵**』今の貴族院議長、近衛篤磨公なり。

●**輕車**』善き車といふ意なり。輕は文飾なり。●**紅葉館**』東京芝區芝公園内にある貸席なり。●**伊太利の古城**』伊太利は興敗常なく、羅馬の都府は、遂に滅亡し、今伊太利は、獨立王國となれり。歐羅巴の南部にある小國にして長く地中海に突出す。●**パリの劇場**』ハリーは佛蘭西の首府なり。劇場數多く、華美を以て歐洲に鳴る。●**瑞西の山水**』瑞西は山水明媚の地なり。●**北米の瀑布**』北米ナイアガラの瀑布は壯大を以て名あり。高さ五十米突、幅、六百米突と二百七十米突との二つとなれり。●**京の金閣**』京都の金閣寺は、足利義滿の建つる所、壯麗無比と稱せらる。●**三條の大橋**』京都三條通にて、加茂川に架せる橋をいふ。加茂川は京都市の東邊を流る。此れに架せる橋數多し。三條の橋は勤王家高山彦九郎が皇居を拜せし所。●**李鴻章**』字は少



筌道光三年(文政四年)安徽省合肥縣に生る。道光廿七年進士及第。福建延郡の道臺江蘇省巡撫、直隸總督等を経て、總理衙門に入り、後、兩廣總督となり、再ひ直隸總督となり、北洋大臣、内閣大學士を兼ねぬ。明治三十四年十一月七日歿す。享年七十九。清帝哀悼の意を表し、特に侯爵を贈る。 ●わんぱく 童(ワラハ)より轉して、わつぱとなり、更に轉して「わんぱく」となる。小兒のことなり。 ●貴族院 皇族華族、その他國家に功勞あり、または學識あるものなどの中より勅選せられたる議員を以て組織す。又上院ともいふ之に對して衆議院を下院といふ。上下を合して帝國議院といふ。 ●歐米東亞 歐羅巴亞米利加東亞は東部アヲアにて即ち支那朝鮮等を指す。 ●大統領 共和政治國の政府の最高等官。 ●親炙 シンセキ、親しく交際すること。 ●兩半球 地球を東西の兩半球に分つことは、地理上の常なり。東洋西洋といふと同じ。 ●五攝家 ゴセツケ、近衛九條二條一條鷹司の五家をいふ。共に藤原氏の族にして、其昔攝政關白たりし家柄なり。女帝又は幼帝の時には、此等の家より出て、天下の政を攝することを得る家系なり。近衛家の祖は藤原忠通の長男基實、九條家の祖は藤原忠通の九男兼實、二條家の祖は藤原道家の二男良實、一條家の祖は藤原道家の三男實經、鷹司家の祖は藤原家實の二男兼平。

二七 田舎と都會

●解釋するほどのものなし。

二八 草花にそへて人のもとに

●おひし 逐ひし

●つゆけさ つゆ多き様、それより轉じて淋しき意をも表す。 ●思ひわたされて 思ひやられて。 ●手すさび なぐさみてあそび。 ●流石 其れ相應に。 ●さる御方に 然るべき人に。夏はしのぎよかりしが、その代りには秋は一しは淋しかるべしと思はれ、今より淋しき心地せらる。なぐさみにとて植ゑし草花、まぢをりし間に、はやさきそめぬ。その花の中、萩は花少く、女郎花はたかすぎなどして、選り出さば、いづれも美しきとはいはるまじ。されどその物相應に、野育ちのものも又おかしなど、さるべき人の御憐を蒙らば、有りがたき仕合と思ひて、一枝づゝ折りて、御贈り申すといふ意なり。 ●七草 秋の七草なり。萬葉に、秋の野に、咲きたる花を指折り、搔き數ふれば、七種の花芽之花、乎花、葛花、瞿麥之花、姫部志、又藤袴、朝貌之花、といふ旋頭歌あり。七草の名これに基くか。今或は桔梗を以て朝貌に代ふ。 ●とりどり あれもこれも、思ひ思ひに。 軒から軒と連りて、家は並び建ち、廣き通りに出でずば、空さへも見がたき都の町の住ひにては、花屋が賣りに來るもの、外は、秋の景色も見難きに、御手植の七草の

いろく思ひ思ひに、面白き節あるものを、惜まず下されし有り難さ、申し様もなし。すぐに花いけにさして、獨眺め居るうれしさ。いづれ御面會の上と、何も申さず。只御禮のしるしに一筆申候との意なり。

### (二九) 動物の自衛

●蟹』かに。 ●甲蟲』かぶとむし。 ●蝨』はまぐり。 ●蝦』はまぐり。 ●鳥賊』いか。 ●魷』いたち。 ●御嶽』おんたけ、信濃國にあり。美濃飛彈の三國に跨る、高さ九百十九丈。 ●乗鞍』のりくらがたけ、飛彈信濃に跨る、高さ九百十九丈餘。 ●雷鳥』ライアウ、深山に棲む。形雉に似たり。其羽毛は常に淡き褐色なれども、冬に至れば白色に變ず。らいのとり(雷鳥)とも、らいけい(雷鷄)ともいふ。 ●尺蠖』セキカク、しやくとりむし。

### (三〇) 生物體に於ける新陳代謝

●新陳代謝』シンチンタイシヤ、新は、あらしきもの、陳はふるきもの、謝は衰なり、凋落なり。新なるもの來り、古きもの凋落し行く、これを新陳代謝といふ。 ●生物』成々化々して生命あるもの、即動物植物等といふ。 ●物質』こゝにては、たゞ物といふほどの意。 ●實質』こ

れも、こゝにては前と同じ。されど備にいは、同一の物を指すにあらず。此には要なればいはず。 ●歸納的』キナフテキ、これは論理學上に用ふる語なり。論理學にて、演譯法と歸納法といふことあり。演譯法とは、一の真理より推し擴めて、他の事も眞なりと断定する法。たとへば網の大綱より、次第に小綱(目)に至るが如し。歸納法とは、種々の事實を取り集め、此も十なり、彼も十なり、故に彼も十なりなど、多くの事實より一眞理を發見するをいふ。網の目を尋ねて、その大綱に至るが如し。歸納的とは、この歸納法によりてといふ意なり。 ●推理』歸納法によりて、實驗の及ばぬところは、その得たる理によりて、推論断定するを推理といふ。此にては、歸納法によりて推論したる結果といふ意味なり。

### (三一) 話し二題

●憚りですが』はいかりは恐れいるの意にて、それより、人に物を頼む時に、謝辭として用ふ。 ●標致』さきやう。

### (三二) 孝子の馬鈴薯

●馬鈴薯』マヤガイモ、ジャガタラ、セイダイウ、二度芋ともいふ。 ●獨逸』(Deutsches Reich)中央歐羅巴の北部を占め、北東はロシアに接し、南西はフランス、イギリスに接す。立憲聯合君主國にて、二十四の聯邦より成

る。陸兵五十八萬、海軍三十二萬噸、首府をベルリンといふ。プロイセンの王都、ドイツの國都なり。世界屈指の政治的大中心として、又、知識の街として、大學校數多し。●佛蘭西』 France 歐羅巴の西部に於ける大強國なり。民政共和國にして、陸軍五十三萬、海軍七十五萬噸を有す。●ライン地方』 (Rhin) の戰爭は何時代のものか明ならず。佛獨の戰爭は、常にライン河地方に於いて開かれ、其度數も少からず。この河は獨逸の南西部を流れ、ホーランドに入る。

### (三三三) 孝子の馬鈴薯

●解釋すべき要なし。

### (三四) 秋の田園

これは正岡子規氏が、肺と腫物とを患ひて、身體自由ならずなりし頃のものなるべし。氏は常に散步を好み、飛鳥山になど散策せらるゝを常とせり。氏の宅は上野山の北東根岸町にあり、鶯溪といふ字の所なり。その宅より、車にて、北に上野山の裏手の道を、飛鳥山の方に向ひしなるべく、田端といふ所より、谷中の諏訪神社のあたりへ登りしなるべし。●上野』東京市公園の一なり。東京の東北に位し、下谷區にある小山にして、北は北豊島郡に連る。昔は東叡山寛永寺とて、徳川氏の廟地たり。寛永寺天王寺今もなほ存す。されど其大半は維新の際兵火にかゝれり。山

の入口を山王臺といふ。東崖下に、上野停車場あり。西は不忍池に臨む。西郷の銅像及び彰義隊墳墓あり。播鉢山、櫻ヶ岡など字多し。動物園、博物館、圖書館、商品陳列所、美術學校、音樂學校、天台宗大學林等あり。花に紅葉に、若葉に雪に、四時遊客絶えず。鶯溪は上野の東北新坂下になり。子規氏の家のある處。●淺草』淺草公園は、都人の好みて遊ぶ地にして、四時常に雑踏す。特に、春の花見の節、及び秋の菊見の頃などは、殊に甚し。金龍山淺草寺あり。觀音大士を祭る。花屋敷、玉乗劇場などありて、常に喧囂を極む。東に行くこと數町にして、隅田川に至る。●團子坂』本郷區に屬し、細流を隔て、下谷區に連る。小さき區域なれども、夏は瀧により、秋は菊によりて、名高し。菊細工は大抵俳優の似顔を造り、衣紋等を装ふに菊を以てす。菊は花の小さきが多し。又別に花壇菊もあり、又盆栽などを賣る家多し。都人一日の行樂地なり。●鶯横町』ウグヒスヨコテウ、子規氏の門前の通をいふ。●千住の煙突』製紙會社其他のものなり。●谷中飛鳥』谷中は上野の北西に連る一帯の高臺なり。飛鳥は、北豊島郡に屬する岡の如き小山にして、谷中上野に連る。●天王寺』もと感應寺と稱して、日蓮宗なりしが、今は天台宗となる。五重の塔あり。凡そ三百年前のもの。此邊に、共同墓地あり。●我が故郷』愛媛縣松山市は子規氏の生地なり。●おとし水』水深き田にあらざれば、大抵秋に稻の實の

熱する頃其水を悉くすて去る。これは用水堀などに落ち去らしむるなり。故にこれをおとし水といふ。●諏訪神社 谷中天王寺の裏手、日暮里村にありて、東は崖にて、筑波江南一帯の地を望むべし。人多く遊ぶ。故に常に茶店の設けあり、夏日など特に面白し。

### (三五) 洪水奇談

●搖籃 ヨウラン、ゆりかご、Swinging Cot の譯、つりと

この一種小兒を安樂に寝ねしむる具。

### 女子國語讀本備考卷の一 終

### 女子國語讀本備考卷の二

普通教育研究會

### (二) 我が國

(第十五日本の米作を参照すべし)

此の教科を授くる前には、先づ地圖を示し、地理の概説をなすべし。次に、我國の國體及び建國の詔勅について、敘述する所あるべく、最後に征清役の顛末概畧、及北京籠城談をもなすべく、つとめて愛國心を惹き起さしめむことを望む。

●地形概説 日本帝國は、アシア大陸の東部、太平洋にありて、東北より斜に西南に亘れる列島より成る。本洲中央にあり、北に北海道あり、西南に四國、九州、琉球、臺灣あり。

我國は大小二千の島嶼より成り、周圍凡そ七千三百餘里、面積凡二萬七千六十二方里、長さ凡一千三百里にして、幅の最も廣き處は、百里に垂んとす。

●一帯 ひとすじ、或は一面の意。一帯の海水とは、一筋連れる海水といふこと。 ●北

●寒き千島あり』千島アライト島の北端(北緯五十度五十六分)は我が極北なり、寒帯に近き北温帯圏に屬す。●南に熱き臺灣』我國の極南は臺灣ペールレート列岩の南端にして、北緯廿一度四十五分なり。即ち、一部は既に熱帯に入る。(北緯二十一度半より温帯に屬す。北緯二十三度半より南緯廿三度半までを熱帯とす。)極西は澎湖島、花嶼の西端、東經百十九度二十分より起り、極東は千島シムシユ島の東端、東經百五十六度三十二分に至る。●地勢』我邦は、斜に彎曲して、恰も弓形をなし、其凸面は太平洋に向ひ、凹面は日本海を擁して、アシア大陸に對す。これ崑崙樺太<sup>コンロン</sup>二大山系の方向に依るものにして、崑崙山系は、西南より來り、樺太山系は、東北より來り、富士火山脈の近傍にて相會す。其相會する所は、本州中幅員最も廣く、地勢極めて高峻なり。火山脈には、富士火山脈、千島火山脈、霧島火山脈あり。富士火山脈は、中部を横り、霧島は西南に、千島は東北にあらはる。活火山も亦少からず。●水系』我國は、地形狹長にして、山岳急峻なれば、水流は夥しといへども、多くは山腹を直走する細流にすぎず。彼の大陸に於いて見るか如き、河道廣濶にして、航通の便と、運輸の利とを與ふる、大河をなすこと能はず。故に、霖雨の際、堤防決潰、水害常に絶えず。然れども、絶佳なる風景多きと、利用すべき水方に富むるとは、又其の利として見るべきものなり。●氣候』氣候は、緯度、地勢

海流等の差異によりて變化す。本邦は、北緯二十一度四十五分より、北緯五十度五十六分に亘り、地勢頗る變化に富み、加ふるに海流の影響あるを以て、氣候の變化少からず。而して、西北には、アシア大陸を控へ、東南は、太平洋に臨み、山脈中央に連亘するを以て、雨雪多く、夏季は、南風或は西南風、太平洋より多量の温氣を送り、九州四國の南部、及び紀伊の南端、並に東海道沿岸、降雨多し。冬季は之に反して、北風或は西北風、日本海の温氣を齎し來るにより、北陸山陰兩道の地降雪甚し。唯北海及び瀬戸内海沿岸は、雨雪の量少し。●海流』海面は、著しく本邦の氣候を左右す。抑本邦の沿岸には、寒暖の二流あり。暖流は日本海流。●黒潮』にして、臺灣島の東より、琉球諸島の西を流れ、宮古島の北方にて二分し、本流は、九州四國の南岸を洗ひ、豆南諸島に達し、御倉島、八丈島間の黒瀬川となり、犬吠岬の沖より本州を離れて、遠く太平洋中に去る。支流は、對馬海流と稱し、九州の西岸に沿ひ、對馬海峽を経て日本海に入り、遂に二派に分れ、一は宗谷岬に進み、一は津輕海峽をすぎ、太平洋中に隱る。寒流には三派あり。千島海流、樺太海流、ライマン海流これなり。千島海流即ち(親潮)は、オコック海に發し、千島列島の間を過ぎて二分し、一は宗谷岬に至り、一は北海道の東岸より、本州の犬吠岬附近に至る。樺太海流は、樺太島の東岸に沿ひて南流し、宗谷岬に近づき、ライマン海流は、東部アシアの海岸

に沿ひ、對馬附近に至る。●交通 我國は、四圍海なるか故に、頗る運輸交通の便あり。東は遙にアメリカ洲に至るべく、南はオセアニア洲、西はアジア洲沿岸は勿論、遠くヨウロッパ洲に達すべし。●天産 我國は、熱帶温帶に跨り、高山聳々、海洋繞り、雨量多く、地味肥沃なるを以て、天産甚た豊なり。植物は寒温熱三帶のものを併有し、至る處森林蕪鬱たり、臺灣琉球等の平地には、榕樹あり。本州の高山には、白檜あり。その頂上には、偃松ありて、その種類一様ならず。動物は植物の如く、その區域判然せざれども、温帶性の者、全國到る處に産す。南方の陸産には、猿、毒蛇、鹿、兎、狐多く、海産には、太平洋に、鯨、鰹、鮪、牡蠣、日本海に、鯛、烏賊等多し、又北方には、熊、狼、あり、鱈、鮭、鱒、鰻、等多く、千島は、紅鱈、海獺、海豹、臘肉獸の類多し。礦物中有用にして、産額多きものを擧ぐれば、銅及び石炭を第一とし、金、銀、鐵、硫黃、アンチモニー、滿俺、石油、石炭、石、水晶等これに次ぐ。外に花崗石等の建築石材あり。(以上山上萬次郎氏日本地誌に依る) ●また無き 又たとなき、無二、無比などの意 ●皇祖天照大御神 (アマテラスオホミカミ) 天照太神に男子坐せり。忍穗耳尊といふ、高皇產靈尊の女を娶りて、彥火瓊杵尊を生みたまふ。高皇產靈尊、特に此の皇孫を鍾愛し、たて、葦原中國の主とせんとす。時に中國不順なり。尊之を諸神の集議に問ひ、武勇なるものを遣して、平定せしめたまふ。大國主命に順ひ、出雲平定

す。時に太神、高皇產靈神と、實祚無窮の神話を垂れたまふ。これを建國の勅ともいふ。即ち豐葦原瑞穗國は、吾か子孫の王たるべき地なり。皇孫就きて治せ。實祚の隆えまさんこと、天壤と共に窮りなかるべし。と是れなり。乃ち三種の神器を、天孫に授けたまふ。三種の神器とは、八咫鏡と、叢雲劍と、八坂瓊曲玉となり。乃ち勅したまはく、吾か兒、此の寶鏡を見ること、常に吾を視るか如くすべし。と。又天兒屋根命、太玉命、天鈿女命に勅して、配侍せしめ、又天忍日命に勅して、天大來目を帥ゐて前驅せしめたまふ。天孫終に筑紫の日向の高千穗峯に降りたまふ。既にして地を吾田の笠狹岬に相し、定めて都としたまふ。(有賀長雄氏帝國史要に依る) ●はた 又たといふほどの意 ●民の窳云云 (此書の第六卷の第一及び第八卷の第一を見よ) 紀元九百七十三年、仁徳天皇位に即きたまふ。天皇は水利を起し、賦斂を軽くし、汲々として民の利を圖り、又宮中の用度を節し、勉めて民の負擔を軽くしたまふ。四年、群臣に詔したまはく、朕高臺に登り、遠きを望むに、烟氣域中に起らず、以爲らく、百姓既に貧しく、家に炊くものなし。即ち知りぬ。五穀登らず、百姓窮乏せるを、封畿の内尙給せざるものあり。況や畿外の國をや。と、乃ち三年、課役を除き、百姓の苦を息はせたまふ。是に於いて、朝廷の用度を節し、黼衣鞋履は弊盡せずは更に爲り給はず。温飯煖羹は、酸醜せずは易へたまはず。宮垣崩れて葺きた

まはす。茅茨壞れて葺きたまはす。風雨隙より入り、星辰壞より漏る。七年天皇再び高臺に登り、遠きを望みたまふに、煙氣多く起りぬ。乃ち皇后に語りたまはく、朕既に富めり、豈愁ふる事あらんやと。皇后問ひたまはく、宮垣壞れて修むることを得ず、殿屋破れて、衣被露あり。いかでか富めりとまをさん」と。天皇宣はく、天の君を立つるは、是民の爲なり。君は百姓を以て基とす。百姓の貧しきは、即朕の貧しきなり。百姓の富めるは、即朕の富めるなり。未、百姓富みて、君貧しきものはあらず」と。時に諸國稅調を運び、以て宮室を脩理せんと請ふ。天皇許したまはす。翌年始めて課役し、宮室を構造せしめたまふ。百姓老を扶け、幼を携へて來り、材を運び、篋を負ひ、日夜を問はず、競ひ作り、未だ幾何ならずして、宮室悉く成りぬ。有賀氏帝國史、天皇在位八十七年、海内無事、政令善く行はれたりき。後世聖主を談するもの、必らず仁徳天皇を稱したてまつる。高き屋に登りて見れば、烟たつ民のかまどは、賑ひにけり。の歌は後人のこの事を詠したるものなり。●御階の霜』醍醐天皇の故事なり。大日本史にいはく、天皇勵精治を圖り、百姓を哀矜し、寒夜親ら御衣を脱し、以て間の凍餒を省みる。群臣の奏對する毎に、必ず和顔にして之に接したまふ。かつて曰く、威嚴外に見はるれば、盡言を爲し難し。朕人を待つ毎に、必ず辭色を假し、忠讜を導庶し、以て啓沃を求むと。是の時國家無事、民庶安堵す。世以て仁徳

帝に比したてまつる。後の治を言ふ者、皆延喜を稱す。(大日本史) 一條天皇も亦慈仁心と爲し、寒夜嘗て御衣を脱す。上東門院異として之を問ふ。帝曰はく、方今天寒し、想ふに窮民衣無からん。朕豈獨重襲するに忍ひんやと。云云 ●和氣霽々』ワキアイアイ、霽は「かすみ」なり。もやなり。和きたる者の氣は、霞の如くになびくものなり。それよりして人の心の和きたるを形容し、情の濃なるにいふ。 ●生成』なりあがる。といふ意。

## (二) 一村の手本

(注意) 此の文章は、凡て敬語體を以て成れり。宜しく敬語の用法活用等を畧説すべし。

●おはす』居るといふ詞の敬語、漢字には、在の字、又は坐の字を當つ。 ●方』方は四角形のことなり。 ●いと』最も或は甚だの意。 ●大杯を擧げて云云』杯を擧ぐるとは、悦を表し或は祝意を表すなり。その杯を薦め、酒を飲ましめて祝するなり。 ●庄家』むらさをさ、一村又は數村の長、名主といふに同じしやうやとよむ。一村の事務を處分し、地頭領主の役所へ上達する者の稱。 ●區長』明治初年に地方行政區劃を改めて、大區(一郡位)小區數ヶ村に分ちたることあり。例へば何々縣第何大區何郡第何小區

何村何番地何誰といふやうにしたるなり。區長は戸長の上にあり。●戸長』今の村長町長などを市町村制實施以前にかくよべるなり。●一意専心』意をその事にのみ傾けて他のことを顧みざることを。意をその事に一つにして、心を其事に專にするをいふ。これは副詞句なり。●公益』一身一家の事にあらずして、多人數一般のためになることを公益といふ。たとへば橋の修繕、堤防工事、衛生事務の如きは、即公益なり。●殖産の道を講じ』殖産は、土地より産出するものを、多くするをいふ。道とは、その方法のことなり。講ずるとは、之を考へ明めることなり。殖産の道とは、農業の方法なり。●ざるを』ざるはシカあるなり。ざるをば、然様なるをといふことなり。●近江聖人』オミセイヨンとよむ。中江藤樹先生なり。中江藤樹名は原、字は惟命、藤樹はその號。與右衛門と稱す。近江國高島郡小川村の人なり。祖父は伯耆侯に仕ふ。父は近江にありて、農に隠れ、祖に先ちて歿す。藤樹即祖に従つて、伯耆に行く。後伯耆侯伊豫の大洲に移る。藤樹亦從ふ。時に年十一。藤樹幼より舉止衆兒に異り、一日大學を讀み、自天子以至於庶人、一是皆以修身爲本の句に至り、感奮して學に志す。力學多年、奮然聖學を興すを以て任とす。然れとも、此の時文運未だ開けず、人皆讀書を輕す。即ち晝は武を學び、夜學を修む。藤樹母の近江に在るを愛ひ、之を大洲に招かんとす。母從はず。即暇を藩侯に乞ふ。

侯許さず。即ち逃れ歸り、侍養の傍、徒を集めて教授す。藤樹好みて、孝經を講じ、愛敬の二字を擲出して、入に教ふ。藤樹人となり温厚、躬行を先にし、文詞を後にす。人賢愚となく、皆其徳に服し、善に興起せざるなし。輿夫を感起せしめ、盜をして良民たらしめ、旅舎茶肆といへども、客の遺物あれば、之を保存し、以て其の遺主の復來るを待つに至る。稱して近江聖人といふ。慶安元年八月二十五日歿す。その地の人、今に至つて、なほその故居を拜し、貴人といへども、亦輿馬を下るといふ。●再生』二たび生るゝといふにて、生れかはることなり。後身、再誕などともいふ。●二宮先生』二宮尊徳は、相模足柄郡柏山の人なり。金次郎と稱す。幼にして父母を失ひ、刻苦經營、艱辛備さに嘗む。かつて、一僧の觀音經を誦するを聞き、嘆して曰はく、人間の事業たる甚だ多しと雖、急を賑し、苦を濟ふを以て、善の第一義となすと。時に年十四なり。後此の念を渝へざること、終生一日の如しといふ。居常朴素を守り、衣は則ち綿衣だも重襲せず。未だ嘗て襪を着くることあらず。食は則ち單汁單菜のみ。孔子、佛氏の言を好み、遂に報徳教を建つ。小田原侯のため、荒廢せる邑を治め、又宇津氏のために、その邑の廢蕪に歸し、民の存立すべからざるを救ひ、川副氏の采地の敗村を興し、民庶を救恤せること甚だ多し。遂に幕府の命を受けて、日光の祭田の興復を司り、日光の官舎に居る。安政三年十月廿日、病みて日光官



舎に歿す。年七十。尊徳の民を諭すや、至誠を堆して以て開示し、繼くに涕泣を以てす。故にその民感化せざるものなし。その民のために法を立つるや、務めて奢侈を省き、衣物什器若くは婦女飾具の如き、苟も財を靡し産を妨ぐるものあれば、皆鬻きて以て錢貨にかへしめ、因りて負債を償ひ、或は生活の資に充てしめたりといふ。●つれく」徒然又は無聊の意。

(三) 親こゝろ 共にいふべきほどのことなし。

(四) 親こゝろ 亦いふべきほどのことなし。

(五) 母の手紙 ●豊島』朝鮮忠清道の西北邊の亂島の一なり。仁川の西

南に方る。●威海衛』支那山東省の突出して半島をなせる所にあり。その對岸なる遼東半島の旅順口と共に、渤海の關門をなせるもの。元と支那北洋艦隊の根據地なりしが、我軍之を破りて後、守備隊を駐在せしめしが、今は英國の借る所となる。●仁川』韓國京畿道の西南にありて、朝鮮第一良港なり。明治十六年我國のために開港す。今は甚だ隆にして、汽船の出入頻繁なり。我が領事館ありて、邦人の在留者甚だ多し。●ベーカー島』大連灣の東方にある島の一也。●高千穂艦』二等巡洋艦、艦材鋼鐵、長サ

一米四三九、廣サ一四米〇七一、吃水五米六六七、排水量三七〇九噸、馬力七六〇四、速力一八ノット、砲數二四、定員二五二人、明治十八年進水。●小笠原海軍大尉』小笠原長生子爵、日清戦史、海軍史論等の著あり。●遺り』おくり ●ふがひなき』意氣地なき。●肺腑より出づ』ハイツ、心の奥底といふほどの意、肺は五臟の主と考へられ、精神知覺を司る者とせられたり。腑は六腑なり。肺腑といふは、腹の底といふほどの意なり。●切』せつ、せち、しきりに深く、ひたすらなどの意。●千載一遇』千年にして、一度遇ふといふこと、珍しきこと、めつたになきこと。●ふがひなき』いくぢなし、又は、ぐづといふほどの意。●天晴』あつばれ、讚美驚嘆に發する感動詞、轉して形容詞となり、名詞狀ともなる。●切なれば』せちにあればなり、せちには、頻りに深くひたすらなどの意。●恕せよ』恕は音ヨ、寛恕、仁恕など、熟語に用ふ。こゝにては、たゞ許せといふほどのこと。●一大快戦』快戦は氣味のよいやうな戦といふことにて、死生を賭して、小氣味よく戦ふことあるべしといへるなり。

(六) 鯨のはなし ●蝙蝠』脊推動物の、哺乳類に屬するものにて、翼手

類と稱す。かはほりは、空中を飛翔する獸類にして、その前肢は伸長し、指間より、體側後

肢及び尾端に至るまで、皮膚を以て満たされ、たゞ前肢の拇指と、後肢の趾とのみ、皮膚外に出づ。●鯨』これもまた哺乳類なり。古は何れの國にても、魚と思ひ居れるなり。我國にては、久治良、又は伊佐名(勇魚)などいひて、やがては、いさなどるなど、鯨の枕詞に用ふるに至れり。

(注意) 此の文を課する時、若都合よくば、鯨獵の話をもし、又その有益なる事業なることを示し、更に經濟問題、數學問題にも及さむことを望む。

●ちよい〜』少しづゝ又は、少しは、などの意なるべし。東京の方言、●うんと』力を入るゝ様子を形容す。東京の方言 ●素晴らし〜』たいしたもの、ぬらいものなどの意。東京の方言、

### (七) 朝風の歌

●わたの原』「わた」は海の古語、わたの原は、海原(うなばら)大海原と同じ。海の廣き所をいふ。 ●はやく學校云々』はやくの「く」は誤りなるべし。

### (八) 一家の經濟

●經濟ケイセイとよむべきなれど、通例ケイザイとよむ。經は、經理、經記などいひて、理に順ひて生を營むをいふ。濟は、濟生なり。一家を經營する意味より轉して、單に理財といふことゝ、同じ意味に用ひらる。家人、國にても費

を少くし、富の度を増し、其生活を安らかにする法をいふ。 ●家産を傾くる』産は産業なりはひなり。それを傾くるとは、その家を傾廢するの意。身代限りをすること。家のつぶれること。

### (九) 佐藤つるの傳

●圃』音はホ、畑なり。 ●畚』音はホン、ふこなり。もつこの類、小くして深き籠やうのもの。物を入れて運ぶに用ふ。形一様ならず、多くは草藪などにて作る。 ●耜』音シ、すきのことなり。耜を執るとは耕耘することなり。 ●蓬髮』よもぎの亂れたるやうなる髮、亂れたる梳らざる髮をいふ。音ハウハツ ●孤勞』コラウ、獨にて苦勞すること。 ●隣里』リンリ、となり近所といふ意。論語には、隣里郷黨などいへり。

### (二〇) 佐藤つるの傳

●睡を交へず』睡は音セツ、まつげなり。睡を交へずとは眠らざることなり。 ●勞りけり』いたはる、あはれむ、ねきらふ、かあいさうがるなどの意。こゝにては看護の意。 ●遣る』のこる、 ●人こいち絶えぬる』人こゝちは、人心といふに同じ。人心絶えぬるは、人事不省、悶絶、氣絶などいふに同じ。悲痛の極、往々にしてこれあり。 ●生けりし時』いきてありし時なり。 ●まに〜』ま

に、又は、随ひて、その通りなどの意。それに任ずる意。まゝに、まゝにの約りたるなり。  
 ●歌』「つる女が母の疾を勞るときのこゝろを」これまで歌の題なり。いとゞし、は甚しの意。もは感嘆詞「心せく」は心せかるゝこと。こゝろもかりかね「衣借兼と折しも雁か音」といひかけたるなり。大變にマア甚しく心がせかるゝことであつたらう、風がさむいのに、衣を借りて着ることも出来ないうで、たゞ雁の音のなきわたるのに、心を惱ますころは、風もさむくなり、衣もほしくなり、雁もないてくるやうな夜は、いかに激しくつる女が心を痛めたりけむと、思ひやれる歌なり。

(一一) 蟻と阜蟲

こは多分、エツッパ物語を譯せしなるべし。エツッパには、

The Ant and the Grass-hoppers とあり。

●阜蟲』此の字明ならず。或は阜蟲の誤りか。さら

ば、ばつた、さりと、す、いなごなどを云なり。

●歌舞飲食』歌ひつ舞ひつ、飲みつ食ひ

つなり。後の用意をせず、無益に日を暮せるをいふ。

(一二) 森林

●西班牙スペイン (Spain or Hispania) エスバニアともいふ。歐羅巴

の西部にあり。イペリア半島の三部を占め、東は地中海に臨み、西は大西洋に面し、南はヨブラルタルの海峡を隔て、アフリカに相對し、北はフランスに接し、西北はホルチ

ユガルに連る。其本土及びバレアリック諸島、カナリー諸島、北アフリカの領地と合せ、面積凡そ十九萬八千方哩、人口凡そ千七百萬あり、立憲王國にして、議院の設あり。其首府をマドリッドといふ。この國、昔時は海運の發達著しかりしより、一時、廣大なる領土を有し、世界の最強國とまで稱せられしが、十八世紀に、英の海軍に破られてより、國力頓に衰へ、又再び起たず。遂にそのヒリッピン諸島をもアメリカ合衆國に輸するに至り、今は弱國の一として數へらるゝに至りぬ。  
 ●福岡縣』明治二十二年七月五日、筑後川大洪水、久留米市、三潞山本、御原、御井、竹野、生葉、下座、上座、の一市八郡は殆ど渺茫たる湖水の如くなりき。但し人畜の死傷は比較的少かりき。  
 ●和歌山縣』明治二十二年八月十八日、十九日、大洪水。和歌山市、及び名草、海部、有田、日高、東西、牟婁、那賀、伊那、等の諸郡漫水し、家屋倒潰し、人畜死傷す。  
 ●壙土』粘土と、砂と、火土灰との混合にして、且つ動植物質を交へ、多少酸化鐵を含みて、色は褐色なり。  
 ●暴漲』ハウチヤウ、にはかにはげしく漲る。  
 ●漲溢』チャウイツ、汎濫なり。  
 ●調節』調は調理、節は節制なり。調し節して過不及なからしむるをいふ。  
 ●陰翳』インエイ、陰は當に蔭に作るべし。木がげなり。翳は技葉の蓋の如く、地を覆ふをいふ。陰翳は、かげのおほひかぶさるなり。  
 ●濫伐』ラツハツ、みたりにさる。  
 ●兀山』コッサン、はげやま、兀山は秃山なり。

り。岨ともかく。

### (二三) 實用上の利益

●自然界』世界を区分して、人間界と自然界とす。自然界又は天然界といふ。動植物、礦物の如きは、凡て自然界なり。●枚擧』マイキヨとよむ。枚は箇數を示すことば、枚擧は箇々一々に擧ぐる。

### (二四) 熱帯地方の生物

●熱帯』地理學上の語。地理學上、世界を五帶に區別し、熱帯、南寒帯、北寒帯、南温帯、北温帯とす。熱帯は、赤道より南北に各廿三度廿八分に方る處までをいふ。即ち兩回歸線の間を指す。●臺灣島元』とは支那の領土なりしが、明治廿七八年の戦争の結果、遂に我の有に歸す。而して其の一部は、既に熱帯に入る。詳細は地理に依りて説明すべし。●非里比納諸島』 Philippine Islands. ヒリッピン群島のことなり。臺灣の南に方る。もとスペインの領地なりしが今は亞米利加に屬す。●婆羅』 Borneo. ホルネオ。●瓜哇』 Java. ヲアヴァ。●蘇門答臘』 Sumatra. スマトラ。此等は、大抵オランダ領なり。●瀦澤』瀦はシヨ又はナヨ、水の聚り停る所をいふ。●蜥蜴』セツエキ、とかげの類。鱉もとかげも、爬蟲類にて、形は同じやうなれども、内部の構造大に異れり。●ナラングス』猩々のことなり。●翁蕪』

Grapevines 葡萄科植物の一種

●ネペンテス』 Nepenthes 屬の名なり。サルノサカヅキ 猿盃、ウツホカヅラ(猪籠草)などあり。東京小石川植物園に在り。●ラフレシア』

Rafflesia. 寄生植物なり。

●椰樹』

ヤシノキ、熱帯の植物。棕櫚科に屬す。幹は直立して枝なき状、棕櫚に似、高さ五尺より十丈に達し、葉は梢にむらがりつく。春花を開き、夏

の末に枕に似たる實を結ぶ。長さ八九寸、徑四五寸、外皮は黒褐色にして、内に核あり。大さ三寸ばかり、その中心に水氣ありて、甚だ甘く、酒氣を帶ぶ。又葉は屋根を葺き、皮は繩とし、基は建築に用ひらる。●芭蕉』 Banana. バナナ、こは芭蕉の一種なり。今は甘蕉と

譯す。木は暗紫色にて、高さ十五乃至二十呎に至る。葉の幅一呎位、その長さは六呎に至るものあり。その纖維を取りて、帽子等に製す。花は深紫色なり。實は黄色にして、長さ四寸許り、皮を去りて食用に供す。軟にして味甘く、且つ芳香あり。又火酒及ひ酢を製するにも用ふ。●榕樹』アカウ、熱帯の植物。我國にては琉球、臺灣、九州の南部等に生ず。その大なるものは、枝より根を生ず。支柱を立つるが如く見ゆるに至るといふ。葉は大枇杷に類す。

### (二五) 日本の米作

●飽餒』

ハウタイ、餓は飢うるなり。

●氣候風』

印度洋の北方、アラビヤ、印度、蒙古一帯の地は、夏季熱を受けて、低氣壓部を生ず。これが

ために、印度洋より空氣の流入あり。故に南若くは南西の風吹く。之を氣候風といふ。季節風又は信風ともいふ。冬は北又は北西の風吹く。●雨量』空氣中の水分が、雨雪其他のものとなりて、下降するもの、總量を雨量と稱す。印度ガンヂス河の流域は、世界の最多の雨量を有すと稱せらる。我が國の全年平均雨量は、一千五百七十三耗にして、全邦の面を、五尺二寸の深さを以て掩ふ割合なり。(一耗は三厘三毛にして、一坪の地面に降る外目は、一升八合三勺に當る。)本邦にて、最も雨量の多きは、岐阜縣の北部を第一とし、薩隅諸島の奄美、大島これに次く。これに次きて多量なるは、太平洋沿岸にては、臺灣の南部、九州の南東岸、四國の南岸、日本海沿岸にては、石川、福井二縣の沿岸にして、皆二千五百耗以上に達す。雨量の最も少き地は、北洲の北東岸にして、長野縣及び瀨戸内海これに次ぐ。雨雪は、季節を定めず降る處あり。又一定の季節に多く、他の季節に少きことあり。日本にては、六月及び九月を、最も多雨の時とす。六月頃には、陸地の諸處に、氣温の上昇と共に、微弱なる低氣壓部を生じ、此の低氣壓部は、甚だ徐々に移動し、これと共に、梅雨の現象を生ず。日本海沿岸と、太平洋沿岸とは、氣候風を異にし、又雨季を殊にす。日本海沿岸に、冬季雨量多きは、北西氣候風、日本海の面を吹き來りて、山脈に遮らるゝ故なり。●印度』地理學上、南部アシアに屬す。此の國は、佛教起源の地にして、

極めて古く、アシア文明の母とも稱すべきものにして、我國上古の發達は、此の國文化の輸入大に與つて力あり。然るに、今は全くイギリスの掌中に歸し、イギリスの領、殆ど印度の全部に當る。此の國は天産豊にして、貿易甚だ盛なり。●暹羅』シヤム王國は、印度支那半島の中央部を占め、西北はビルマに接し、東は佛領亞細亞(安南)に隣り、南に暹羅灣を擁し、馬來半島に連る。●緬甸』ビルマは、海峽殖民地(馬來半島の南部)と共に行政上イギリスの領となる。●安南』は今の佛領印度支那のことなり。トンキン(東京)アンナン(安南)コンチンチナ(交趾支那)カムボチャ(東浦塞)の四部に分る。安南には佛國保護の下に國王あれども、その他は凡て領地となる。以上はみな、即南部アシアと稱せらるるものにて、所謂南京米を産出すること夥し。●江南』江蘇、浙江、江西、福建、廣東、廣西等の諸省の地。●淫霖』じみくくと長く雨のふるをいへるなるべし。淫雨(悪しき意味のながあめ)と霖雨(悪しからざる意味にて三日以上の雨)とを合せて、たゞ梅雨のことを形容せるのみ。●收穫』明治三十二年末日の調査によれば、有租田二百七十四萬四千七百八十七町、二。免租田六萬八千五百三十七町、二。新開地一萬〇五百五十六町、九。又明治三十三年の調査によれば、米收穫四千一百四十六萬六千七百三十四石(但し粳米、糯米、陸米を合算す)。又明治三十二年の計算によれば、粳米三千五百六十

四萬九千六百三十七石、糯米三百四十九萬七千二百〇九石、陸米五十五萬一千四百四十二石、計三千九百六十九萬八千二百五十八石。

### (一六) 氷海上の一年間

●スタンレー Stanley Henry Morton. 亞

非利加探検家にして、千八百四十年(皇紀二、五〇〇)天保十一年に方る(英國ウエールスに生る。家貧なりしが、千八百六十七年、ニューヨークのヘラルドの外國通信記者として、アピシニアに於ける、英國の軍に従ふ。千八百七十一年—七十二年、旅行家リビングストンを搜索すべく、亞非利加に渡り、種々苦心の末、氏と遭逢し、一旦英國に歸る。後再び遠征隊に長として、亞非利加に至り、慘憺たる辛苦を嘗め、やがて歸英し、千八百九十五年代議士に選ばる。現存。 ●千八百九十七年『我明治三十年なり。 ●白耳義』 Belgium ヘルギー、首府をブラッセルといふ。アントワープ港は、歐羅巴大陸に於ける第一の港なり。 ●グラハムランド Grahamland 千八百三十二年(我紀元二四九二)天保三年(ビスコー(Biscoe)といふ人の發見せし、大なる陸地。南緯六十五度、西經六十度の邊にあり。 ●雀躍』 ヨヤクヤクこおどりしてよろこぶこと。 ●絶望』 のぞみのたわめてのはづれたること。

### (一七) 氷海上の一年間

●極地衰弱病』 植物などが、日光にあたらねば、葉緑素の成生を欠き、その青き葉の終に白くなると同しく、人も亦、太陽の光線を受くることなければ、その血色素の生成は妨げられ、かつ排泄物の放散を妨げられ、遂に衰弱症に陥る。この讀本の場合に於いては、太陽の光線を受けざるがうへに、氣候の變化も亦與りて力あり。(此項において運動及び戶外遊戯の必要を説くべし)

### (一八) 活版の由來

●活版』 從來の版本は、凡て、一文全體を、木に彫りし者なり。此の人の發明よりして、今は一字一字取放し組みかへらるゝやうになりたるなり。西洋にては、既に五百年程前に、獨逸にて行はれたり。支那には、それより以前にもありきといふ。然れども、無論不完全なるものなりき。 ●本木昌造』 モトキジヤウ

ザウ、名は永久、悟窓と號す。肥前長崎の人。北島氏を出て、母の兄本木昌左衛門の養子となる。本木氏は、世々阿蘭語の通辭なり。その業を嗣いで、蘭語を修め、専ら西洋の技術の事を研究す。嘉永中露艦長崎に來り、又伊豆に難船す。昌造これが通譯となり、造船の工夫を督す。是を以て、はゞ造船の術に通ず。山内容堂侯、昌造に命じて、小汽船の雛形を造らしむ。其製頗る巧なり。又活字を試製す。事本文にあり。然れども、鉛及び印肉の不完

全によりて、印刷明ならず。銅、銅、水牛等を用ひしも、亦意の如くならず。此の間長崎奉行の命を以て、製鐵所の御用掛となり、又英國より汽船を購入して、之が船長となり、江戸大阪等を往來す。嘗て八丈島に漂流し、半歳の艱難を経て歸る。明治二年、普通教育をなすの慈惠小學校を長崎に立て、子弟多きを加へ、財を費すこと多かりしかば、活字印刷の業を開いて、財を獲べき必要を感じ、人を清國上海に遣し、英華書院に就いて、其の術を諳はしむ。彼秘して傳へず。空しく歸ること數回、重野安釋が薩藩のために購ひたる活字、及び印刷器の用をなさずして、薩藩に在るを聞き、之を求めて、自ら文撰字ひるひ業に當り、陽其二人名と共に、印刷を試む。而も未だ完全ならず。米人ガンフルが英華書院より罷め歸るに會ひ、米國傳道師フルベッキを介して、之を聘し、始めて長崎に活字鑄造及び電氣版の業を起す。是より其業始めて大成す。門人平野富二と謀り、明治五年、活版所を東京築地に建つ。今の京橋區築地三丁目築地活版所の始なり。昌造亦夙に航海權の外人の手に歸せん事を憂ひ、時の大藏卿大隈重信に建議して、汽船會社を建てしむ。平野富二か、夙に石川島に造船所を私設せしも、その志をつげるなり。明治八年七月三日死去す。本文七年とあるは、作者記憶の誤ならん。●流し込活字』活字を造るに先づ、一字一字づゝ、眞鍮に刻す。是を字母といふ。これに鉛を流し込みて、活字を作る。

この仕方によれるものを、流し込み活字といふ。●和蘭通譯記』一に蘭和通辨に作る。蘭語を和語に譯する心得をかけるものなり。此書成れる時、一部を阿蘭に送れりといふ。●鉛製活字版の根元』我國古より、植字版、又は一字版といふものありしか、これを活字版といへり。足利氏の頃、支那(明)より渡來せるものを、本とせるなるべし。これは皆木版なり。其後慶長の頃に至りて、銅製のものも出來、木製銅製并ひ行はるるに至りぬ。されど鉛製のものは、此人より以前にはなかりしなり。●安政二年』皇紀二五一五年。●故ありて』この事實は明ならず。前の著書に關してなりともいひ、或は俠氣より他人の罪を負へるなりともいふ。●萬延元年』皇紀二五二〇年。●外國』こは英國なり。●飽浦製鐵所』長崎製鐵所のことなり。勝安房著の海軍史によれば、長崎在勤の奉行より、伺の上、稻佐郷飽浦の地を相し、安政二年十月に起工し、文久元年四月に至りて、落成せし由なり。本木氏は、萬延元年十一月、長崎奉行の命にて、その御用掛となる。事は外國船購入以前にあり。こゝに王政維新の際とあるは、其大體についていへるものか、または記憶の誤によるか。●重野安釋』薩摩の人、内務編修官となりし人、今文學博士たり、著述少からず。●上海』清國江蘇省の沿海にあり、外國貿易の中心たる港にして、本邦在留人の數甚た多く、學校を私設せるものもあり。人口六十

二萬といふ。●活版傳習所』生徒には、主として活字製造、及び電氣版のことを研究せしむ。この傳習生、後に半は本木氏の設立せる、長崎活版製造所に入り、半は製鐵所に入り、勸工寮活版所に轉して、終に今の印刷局に集りぬ。●窮士族』困窮せる士族、

### (一九) 野中婉女の勤學

●婉』えん。●野中兼山』土佐山内侯

の重臣、野中傳右衛門、兼山と號す。長岡郡本山六千石を食む。かつて禪學を好みしが、遂に儒に歸し、谷時中に從ひて學ぶ。時に海内書乏し、兼山乃ち人を長崎に遣して、舶來の書を買はしめ、又或は之を翻刻す。兼山天資剛毅、博く和漢の書に通し、よく古今得失を考ふ。重臣として國に方るに及び、その學ぶ所を以て、之を國に施し、學校を起し、土地を改め、農兵を置き、藥草を植ゑ、蜜蜂を育し、種々の新政上下に利あらざるなし。兼山儒教を信じ、一に文公家禮に從ひ、佛教の法を用ひず。兼山その政を行ふや、甚だ峻嶮なり。友人之を諫む、兼山以て善とす。然れども終に改めず。怨議頻りに起り、貶黜せられ、尋て病歿す。年四十九。時に寛文三年なりき。今、明治三十六年を距ること二百四十年にして、皇紀二二三三年なり。兼山の謫せられたる地は、同國幡多郡宿毛村にて、婉女その時五歳なり。●いみじ』すぐれたると。●負うた子に淺瀬教へらる』是は古き諺なり、己

れ教ふべき人に教へらるゝをいふ。●いとゞしく』いよく、甚たしくの意。●ぬれまざる』かへりて、子供になぐさめらるゝ母の身の、なほさらに、涙ぬぐひあわせず、母の袂もぬるゝといふなり。●歿』みまかる。●赦され』元祿十六年(皇紀二三六三)赦に遇ひ、これより醫を業とす。侯之に祿八人口を給ふ。●令聞』よききこゑ、令聞、廣譽などいふ、美名の意。●鬱々』ウツ／＼、氣のむすぼれて面白からぬこと。●嚴命』ゲンメイ、さびしき仰、ゆるがせにすべからざる仰といふ所より、單に君の仰といふことにて、嚴命といふ。なほ父を嚴君といふが如し。●食祿』シヨク、扶米なり。古の王諸侯に仕ふる者、必ず祿を賜はる。知行といひ、切米といひ、扶持といふも、同じくこれ祿なり。

### (二〇) 學業を報知す

●御丹精』丹精は誤、丹誠と書くべきとなり。

タンセイとは丹心の誠といふことにて、まこゝろをこめて事をなすをいふ。それより、よく心にかけて、ものすることをもいふ。●急劇』キツゲキ、にはかにはげしくといふ意。●巨細』コサイ、大小といふが如し。

### (二一) 同窓會の歌

●ふもとの道』古歌に、わけのぼるふもとのみち



はかはれども同じ高峯の月を見るかなとあり。此の意をとりてよめるなり。●陸魂』  
 むつだまは古語なり。陸まじき心といふことなり。むつだまあへるは陸しき心あひ  
 くてなり。●むつびし』親みしなり。なかよくつきあふことをむつぶといふ。●  
 かざし』漢字にては挿頭とかく。古時、神樂又は舞樂の時、頭髮又は冠に、草木の花、又は  
 造花をかざししたることあり。今はなきものなれども、その語によりて、頭髮を形容  
 するなり。此の書の第五卷第二、四を参照せよ。●友どちは』友だちといふに同じ。古  
 は、一人の時は、友だちといはず。されど今は一人にも用ふ。漢字には同志とかく。此の歌  
 は、むつみあへる友とちの楽しさを歌へるものなり。大意をいはず、山に登るには、麓よ  
 りするものにて、その麓のみちは、種々かはらされども、同じく山に登る道なり。これと  
 同じく、我等朋友は、たとひ立身の道は、様々なりとも、世のため國のために、盡さん志は、  
 全く同じことなり。かく大目的を共にし、むつみあひし友達と、共に花を見る今日の春  
 は、まことにたのしきことなり。又、學窓の下に、年月を経て、相互に陸みあひし友だちは、  
 隔心なきものなり。隔てなきまごゝろの赤きを、紅き紅葉によそへて、その紅葉をかざ  
 しにさして遊ばまし。遊ひたしと思ふ。紅葉の赤きやうに、赤き心をもて、親しく交り合  
 ふことは、實に楽しきことなりと歌へるなり。

### (二二) 小さき女王

●第一卷の第一五を見よ』千百九十年明治二十

三年に當る。●ウキルヘルム三世』 Wilhelm III. 1817-1890 Wilhelm Alexander Paul Frederik  
 Ledewijk ●よにも』「よ」は特の外の意」もは感嘆詞。●おももち』面持とかく。かは  
 つきなり、顔色なり。●満地』マンチ、地面一杯、地一面にの意。●亂軍接戰』兩軍入  
 り亂れて戦ふこと。陣を亂して盛に戦を交ふること。●體』テイ、有りさまなり。●  
 幼き筆もて』この次の文の下に、かきしるされたりといはんほどの字面、畧せられた  
 り。●猶豫』イウイヨ、ためらふこと、ぐづぐづすることといふ。遲疑決せざるをいふ。  
 猶豫は、もと獸の名なり、疑慮多きものにて、毎に人の聲を聞いて、輒ち木に登り、久しう  
 して人なきを見て、然る後に下り、須臾にして又上る。此の如きこと、一にあらず。故に決  
 せざるを、猶豫といふと字彙にいへり。●大臣』メイシ、●女官』ヨクワン、古  
 くはニョウクワンといひたれど、今はヨクワンとよむかたよるしかるべし。●  
 庶民』シヨミン、並々の人、平民の意。庶は諸の意、もろもろのたみといふことなり。民百  
 姓などいふに同じ。●點頭』ウなづくことなり。●色白く茶褐色の髪云云』歐羅  
 巴にては、美人として好むものに二様あり。一を (Blonde) とし、一を (Brunette) とす。

ブロンドは白哲金髪緑眼の美人にしてブルーネットは淺黒の顔及び黒髪黒眼の美人なり。南部歐羅巴の人は多くブロンドを好み、北部歐羅巴の人は多くブルーネットを好む。●**慄**『ひやうさん』●**威嚴**『キゲン、いかにも重々しく氣高く見ゆること。●**戸を叩く**』西洋にては、如何なる親しき人にも、黙して戸を開くるを非禮とす。勿論其室は大抵内の人が鍵をかけ居る故、外より開かされども、先づ必ず、戸を叩き、内の人の開くを待つが禮なりとぞ。●**別亭**』離れたるあづまや。

(二二三) 思ひやり

●**恕**』**シヨ**、字彙には、以己體人曰恕といひ、朱子は、推己及

人曰恕といひ、程子は、中心爲忠、如心爲恕といへり。●**わが身をつねりて人の痛さを**●**知れ**』古き諺にあり、己れ欲せざる所、人に施すことなかれといふ意なり。●**フィリップ・シドニー**』Philip Sidney 1554-1586 英國の人、ケントに生る。(十一月廿九日) オックスフォードの基督教寺院にて、學を修む、文學者として、著述頗る多く、又軍人として、スペインの遠征に従ひ、軍功少からず、本文の話は、ローヤルリダーにある話なり。●**最後の際**』將に命終らんとする最後の際なり。臨終のまぎはの意。●**手負**』てをひ、創を被ること、負傷のことなり。刀または矢にて傷けらるゝことを、てといふ。淺手深手と

いふが如し。されば、てをおふとは傷を被ることなり。●**同情**』他の人を思ひやりて、その人と同じ様なる感情を起す心のはたらきをいひ、轉してなさけぶかき心をもしかいふ。●**其角**』キカク、榎本其角、本姓は竹下、母の姓を冒す。近江堅田の人なり。父を東順といひ、醫を以て某侯に仕ふ。其角初の名は順哲、父の業を繼ぎ、又書を善くして、佐々木文山に従ひ、後ち米南宮を喜び、別に機軸を出し、自ら實齋と號す。又芭蕉に従ひて、俳諧を學び、終に所謂十弟子の首と推さるゝに至る。後江戸に來り、堀江町に居り、服部嵐雪、小川破笠と同居す。數年名大に興る。後更に茅場町に移り、荻生徂徠と隣る。寛永四年二月三十日歿す。年四十七。(皇紀二三六七) 晉子、實井、狂來堂はその別號なり。●**わが子なら供にはつれし雪の朝**』これは其角が、雪の朝、兩國の橋の上にて、樽拾ひの小僧のなやむを見て、讀めるものなりといふ。又、初雪やあれも人の子樽拾ひの句あり。陶淵明がいへる彼亦人子也、可善遇之の句など思ひ合すべし。●**小僮**』セウドウ、僮は奴婢の總稱、ものしもべ、でつちなどいふもの。●**裨益**』ヒエキ、裨は補なり、益なり。●**我子なら云云**』これについて、又面白き傳説あり。そは其角雪の夜、他出して歸りしが、復出つべき用事ありて、行かんとし、が常に使ひける子供に提燈持たせて、ゆかんとせるを、其角の妻、そのいたくしさを思ひやりて、一首の俳句を作りて示したりしか

ば其角もいたく感して遂に一人にて用事を濟したりといふ。その時の妻の發句といふは「我子なら供には連じ雪の夜」となりき。いづれまことなるかはしらす。 ●孔夫子」孔子名は丘、字は仲尼。支那東周靈王二十一年(皇紀百十年)十一月、魯の昌平に生る。東西に奔走し、苦辛して堯舜の道を祖述す。敬王四十一年(皇紀百八十二年)四月歿す。壽七十三。明治三十六年を距ること二千四百二十一年前なり。後に弟子等、孔子の言行を録す。之れを論語、甘篇とす。支那歴代の帝王、皆孔子を尊び、廟を設けて之を祭る。我國にても祭祀せることあり。夫子とは、之を尊稱するなり。猶先生といふが如し。支那の人は、姓を貴ぶ。故にたい孔先生と稱するなり。漢の文帝諡して文宣王といふ。子は男子の通稱なれども、幾分尊敬の意味を舍む。孔子といひて、孔丘の事とするは、大師といひて、弘法大師に限れるが如し。 ●己欲立云云」論語雍也第六に曰く、子貢曰、如有博施於民而能濟衆、何如、可謂仁乎、子曰、何事、於仁、必也聖乎、堯舜其猶病諸、夫仁者、己欲立而立人、己欲達而達人、註曰、以己及人、仁者之心也、云云、能近取譬、可謂仁之方也、已、程子曰、醫書以手足痿痺爲不仁、此言最善名狀、仁者以天地萬物爲一體、莫非己也、認得爲己、何所不至、若不屬己、自與己不相干、如手足之不仁、氣已不貫、皆不屬己、故博施濟衆、乃聖人之功用、仁至難言、故止曰、己欲立而立人、己欲達而達人、能近取譬、可謂仁之方也、已、欲令如是觀仁、可以得仁

之體。 ●己れ欲せざる所云云」論語衛靈公第十五にいはく、子貢問曰、有一言而可以終身行之者乎、子曰、其恕乎、己所不欲、勿施人、と。朱子の註にいはく、推己及物、其施不窮、故可以終身行之と。

(二四) 誕生日に人を招く ●ことくしう」たいさうらしく、

又は、ぎやうさんらしくといふほどの意。 ●自由を利かせ」さかせ、利くに使役動詞のそはりたるもの。 ●手も障へず」さへず、さはる、ふる、などの意、古語にして方言にもあり。

(二五) 猿の孝心 ●旦暮」タンボ、旦は朝なり、朝暮朝夕、あけくれ等に同

じ。 ●尾の上」をのうへ、をのへ、山の裾の引はへたる所を、をといふ。萬葉には、丘、峯、峽などを、を」とよませたり、みね」とは異なる。ねは山の頂のとがれる所。 ●ござんなれ」こそあるなれのつまりて轉したるもの、あるよな、の意、鎌倉時代の語なり。 ●とぎまかうさま」同様、かく様にて、あれやこれや、あのやうこの様と、いろく、にといふ意。天仁波の」と副詞の「かく」と連りたる語なり。 ●よしもがな」よしは、てだて方法なり。「も」は感嘆詞、がなは希求の意を示す天仁波。 ●してやつたり」爲て遣るにて、事を終

へたる意、うまくやりたりな」といふことゝなり。鎌倉時代の語。 ●我れから」みづから、自分より、自分でなどいふべし。 ●笑止」せうし、古は、他人が人の笑となれるを氣の毒に思ふことなりしが、後には、かたはらいたきことゝなり、此頃にては、嘲笑の意となる。 ●そろく」と」この語は、次の手にかゝるものなり。燃にはかゝらず。 ●驗」ケン、しるし。 ●惘然さ」あはれさ。惘然の二字にてあはれさと譯す。

### (二六) 衣服の取扱

●褶む」たたむ。 ●衣桁」イカウ、或はエカウ、衣架ともいふ。脱きたる衣をかけおく具なり。 ●襯衣」襯(シン)は身に近き衣なりとあり、はだぎと譯す。襦袢、シャツ、などをいふ。 ●苟且」コウシヨ、かりそめ」と譯す。草卒なり。 ●襪」フキなり、或は襪、などの字あり。 ●虞」グ、おそれ、うれへ、きづかい。 ●大率」おほむね、おほよそ、率は皆なり、畧なり。(音はシュツ)又計數之名總率なり。(音は類又約數なり。(音は律) ●壓」おし。 ●火熨」ひのし。火斗、火熨斗ともかく。 ●褪め」さめ、色のさむること。 ●曝す」さらす。 ●蚊帳」かや、蚊帳(かちやう)ともかく。 蠅は蠅の誤

### (二七) 花見の景況を知らす

(注意) これは東京の女學生より故郷に送れる手紙の體なり。都と無論東京のことなり。

●上野」は東京市下谷區にあり。寛永寺、天王寺などのある處、北は北豊島郡に連り、今公園となる。博物館、動物園、商品陳列場もあり、美術學校、音樂學校、圖書館、天台宗大學林等あり、又バナラマあり、前面には、彰義隊の墓あり、西郷隆盛の銅像あり、徳川氏の廟あり、後面には、鶯谷、櫻ヶ岡の勝あり、緑陰に紅葉に、四時遊客絶えず。就中春を以て第一とす。西南に不忍池あり、池の西に方りて、高く聳ゆる時計臺は、即ちこれわが東京帝國大學なり、池の東は山王臺と稱する所にして、彰義隊の墓、及び西郷の像のあるところなり。西南煙霞の中に皇居を望み、南は品灣を瞰下し、東淺草に至る一帯の地、皆一目の下に集る。 ●向島」東京市の東北部にして、隅田川の東岸にあり。一部は本所區に屬し、一部は郡部に連る一帯の地を總稱す。郡部にしては、南葛飾郡隅田村、寺島村等あり、隅田川に沿へる一帯の堤を、隅田堤と稱す。堤の兩岸櫻を植う。枕橋より北して、埼玉縣下に及ぶといふ。 ●目まぐるしさ」見るも苦しき、又は目紛しきの意。 ●葎簧張」よしずはり、葎の簧にて、假りにしつらへたる茶店をばしかいふなり。 ●扮装」扮は粧ふなり、みづくろいなり、扮装はいでたちなり。

二八 わがふるさと

解釋すべきものなし。

二九 雑遊

●はにわ』はにとは、赤土、粘土の類をいふ。はにわとは上古陵墓

の周に、埴にて作れる人馬或は甕などを、車輪の如くに、半は地に埋めて立て列ぬるものをいふ。これは上古の風俗に、主人死ぬれば、家來の昵近の者を、生理にしたることに、代へたるなり。それよりして、土人形の類をも「はにわ」といふ。 ●上己の節句』上己、ウヤウシ、又はウヤウミといふ。上古支那にて、三月の上旬己の日を以て除日とし、修禊をなし、不祥を除く。魏より後に至りては、三日を用ひて、己の日に拘らず。此風我邦に傳來して、古くより習俗となれり。三月三日を用ふるが故に、重三ともいふ。日本にては、人形を紙にて作り、おのが身を拭ひて、後之を水に流す。この上己の祓と、常にもてあそびし雛とを混同して、必ず三月三日に祭ることゝなれるなり。いにしへ雛を弄ふこと、時節に拘らず。そはうつは物語、源氏物語、枕草紙などに、見ゆたり。三月三日、曲水宴。我國にては中古の頃一しきり行はれたるのみにて、終に永く廢れたり。徳川幕府の例此日を祝日として、諸侯伯熨斗目長上下にて登城し、上己の賀を述ふ。諸藩亦之に倣ひ、都鄙終に此日を祝ふことゝなり。遂に五節句の一となる。 ●からくり人形』機械の仕掛

によりて動く人形。

●なりはひ』生計家業の意。●さるべき』然るべきと同じ。

### (三〇) 清廉

●享和元年』皇紀二千四百六十一年にて、明治三十六年より百

〇二年ほど前なり。●飯田町』今麴町に属す。九段の附近なり。(牛込區小石川區に

隣る) ●中坂』九段の側にある坂を中坂といふ。その附近を中坂といふ。中坂下、中坂

上などあり。●皮籠』かはつゝら、革葛籠。●奥六尺の御家人』六尺とは轡をかつ

ぐものをいふ。奥六尺とは、女の六尺にて、奥方に仕ふるものをいふ。御門までは男の六

尺之をかく。されど門より内には男を入れざる定めなれば、奥六尺(女)引き取りて之を

かく。つまり奥方づきの女の六尺を奥六尺といふなり。御家人とは、公義の旗下と名く

べきものにあらずして、即ち將軍家の旗下の士といふものよりも下れるもの、普通大

名にいふ所の足輕同様のものにて、公義若くは御三家御三卿に属するものをいふ。奥

六尺の御家人とは、奥六尺を出したる御家人といふことなり。(三家は、尾張侯、伊紀侯、

水戸侯をいひ、三卿は、田安、一橋、清水をいふ。) ●小日向金剛寺坂』こびなた、こんごう

じざか、今の小石川金富町金剛寺坂。

### (三一) 天地は一大工場なり

解釋を要せず。

### 三三二 八丈縞

(此文巻首の目録にはなし)

●ま・だ・み』いぬぐす、又はたまぐすをいふ。此木の皮にて、蔦色を染む。ゆづりはに似たる木にて、花は見えず。●かりやす』草の名なり。山野に生ず。蓋に似てそれよりもやゝこまかく、秋の初に穂を出す。黄色の染料に用ふ。根は細くして、弾力に富めるが故に、洗濯刷子等に製す。●椎の木』植物、葉は櫪に似て小さく、縁に刻みあり。實は大豆よりも少し大きく、やゝ長く尖り、一つづゝ苞の中にあり。八丈にては此の皮を以て黒を染む。●八王子』東京府下豊多摩郡にあり。甲州街道に於ける一都會なり。生絲絹布の産地にして、機業の盛なる地なり。特産には、八王子博多あり。官設鐵道は、此道を経、小佛峠の墜道を経て、甲斐に入る。(人口、二三、二〇三、明治三十一年末調) ●桐生』群馬縣山田郡にあり。絹織業を以て名あり。(人口、二三、九九一、明治三十一年末調) ●しもさまの者』したゝのものと云ふこと。●齋きによりてこそ』齋に依りて、改めざるやうにありたしといふ意なり。

### 女子國語讀本參考書二の巻終

### 女子國語讀本備考卷の三

#### 普通教育研究會

### (一) 東京

●東京』武藏國の南隅にありて、所謂關東平野の一端を占め、東に

隅田川あり、南西は海に瀕す。方四里七六。もと江戸と稱せしが、明治元年奥羽の亂平定し、車駕遷幸、十月東京と改稱し、皇居の地と定めらる。●江戸城』康正二年(皇紀二一

一六、後花園天皇御宇)上杉定正の家老、太田持資入道道灌の築けるなり。其後天正十八年(皇紀二二五〇)徳川家康此に遷りてより、漸々賑なる處とはなれり。●壕塹』ガウザン、おほりのこと。濠は城湮なり。塹は城下の水なり。●周り』めぐり。●帝國議院』

麴町區内幸町にあり。●外濠』そとはり、城は二重の濠を繞らす。故に内濠外濠といふ。●十五區』麴町區、神田區、日本橋區、京橋區、芝區、麻布區、赤坂區、四谷區、牛込區、小

石川區、本郷區、下谷區、淺草區、本所區、深川區。●人口』年々増減あるへし。百四十四萬〇一二一人(明治三十二年末調) ●葛飾』隅田川の東より、小刀根川(江戸川とも中川

ともこの灌域をいふ。北葛飾郡は埼玉縣に屬し、東葛飾郡は千葉縣に入り、南葛飾郡は東京府に管せらる。●**殷賑**』インシン、饒に足り充ち榮ゆること、殷は盛大、衆多の意、賑は富贍の意。●**富庶**』フシヨ、とみさかゆる、庶は衆又は多の意。●**電線**』には電話線あり、電信線あり、電燈線あり、電話は言語を通じ、電信は音信に用ひ、電燈線は以て燈光を引く。●**鐵管**』は水道と稱して、飲料水を供給するに用ふ。明治三十二年工事漸く成り、尙發達せしむべしといふ。瓦斯も鐵管により、電信の地下線も鐵管による。我國にて、電氣燈を用ひむとして、電氣燈會社の設立を願出てたるは、蜂須賀茂韶、大倉喜八郎、其他七八名にして、明治十六年三月許可せらる。本社は麴町一丁目にあり。京橋區新着町、芝區高輪、神田區錦町、深川區小松町、淺草厩橋等に支社を置く。●**鐵路**』蒸汽車も鐵道に依り、鐵道馬車も鐵路に依る。輪轡とは車輪の響なり。●**大學院**』東京帝國大學は本郷區にあり。もと加賀侯の邸なりき。

### (二) 倫敦の繁華

●**倫敦**』London ロンドンは英國の首府なり。テムズ

河(テームス)と發音するは誤なり。(Thames)に跨り、面積にては、世界第二(第一はニューヨーク府)に位し、世界第一の都府と稱せらる。我公使館及び領事館あり。人口四百五十

三萬餘、明治三十二年末) ●**巴里**』Paris パリは佛國の首府なり。セーヌ河に臨み、繞らずに堅固なる城壁を以てす。歐洲第二の大都府にして、又歐洲諸國服裝流行の中心なり。凱旋門、エッフェル塔、ノートルダム寺院あり。其の劇場は、最も有名なり。我公使館あり。●**三寸先も見ぬ**』俗諺の「一寸先は闇」といへるより來りしならん。●**ドック**』船を造り、又は修繕するため、内海の沿岸、又は河口などに作りたる大きな深き渠をいふ。

### (三) よく働きよく遊ぶ

●**拵掘**』キツキヨ、詩經、豳風、鴉鳴篇に

予手持掘云々とあり、註に、拵掘、手口共作之貌とあり、拵掘は勞作の貌、動作して鬆まざる貌、勤めて倦まず、勉強精勵するを拵掘勉勵といふ。●**一屈一伸**』一たびは屈し、一たびは伸ぶ、屈伸時あるをいふ。●**一張一弛**』張弛は、弓弦にたとへていふ、張は、弦をはること、弛は、それをゆるぶること。一たびは勞し、一たびは息ふ、張弛時あるをいふ。●**銀錢**』賃銀、賃錢、工銀、工錢などいふ。●**大約**』おほよそ。●**一轍**』轍テツは、わだちとよむ、車輪の跡なり、車轍の大抵一致する所あるが如きよりして、同じ方法、同じみちすぢ、等を意味し、遂に一樣同様といふ意に用ひらる。●**染職の明後日**』「こうやの



あさつてとは紺屋職人の多くは約束を守らず、明後日までにはと言譯しつゝ、次第に日限を延ばしゆくをいふ。かぢやの明日といふこともあり。同じ意味なり。●西人●西洋人をいふ。

### (四) 農夫の勤勞

●五穀●米、麥、粟、黍、豆の五種を指し、又穀類の總稱にも用ふ。●かくては●「かくの如くにして」はなるべし。されどその接續法を誤れり。は恐らく冗字なるべきか。●はかなき●おぼつかなき、かりのなどの意。善き邸園などに對して、茅屋を粗末なりとするによりて、かくいへるなり。●こぞり●漢字の舉字に當る。みな、ことごとく、の意なり。●ならはなむ●「なむは希求の天仁波、ここにては、人皆此農夫に習へかしと望み求むる意なり。

### (五) 花の心

●妹か垣根●堀河百首權大納言公實卿の歌に、むかし見し妹がかさねはあれにけりつばなまじりのすみれのみしてとあるより、來れるならむ。公實卿は、徳大寺實能等の父なり。皇紀一七四六年、堀河天皇の元年(白河天皇讓位の年後拾遺集成)。此公實卿は此時代前後の人なり。●大高源吾●名は忠雄、赤穂四十七士の一人、死を賜はる。年三十二、源吾誹諧を好み、子葉と號す。其角と友とし善し。吉良氏掩

撃の聖朝其角を訪ね、日の恩や忽ちくたく厚氷といふ句を賦せりといふ。元録十五年十二月十四日皇紀二三六二年) ●ラッセルローエル● James Russell Lowell 1819-x 米國の詩人。●使はし●「遣はし」の誤。此次に小括弧を附したるは聖書の語を引用したるによる。●芭蕉●名は宗房、初め金作と稱し、後、甚七郎と更め、最後に忠左衛門と改稱す。風蘿、桃青、羽扇、釣月、羊角等の數號あり。松尾氏、伊賀の人。藤堂侯に仕へしか、二十三の時、官を去りて京師に往き、北村季吟に師事し、遂に一派の俳風を起す。深川に居り、諸地方を歴遊す。元録七年十月十二日病みて大阪に死す。年五十一。(皇紀二三三四年) ●人心なきあり云々●こは歌の題にあらず。たゞ題意をいひあらはさんためなるにや。古今集及び家集には、初瀬にまうづることに、宿りける人の家に、久しく宿らで、程を経て後に至れりければ、彼家のあるじ、かくさだかに宿りはなむあるといひ出して侍りければ、そこに立てりける梅の花を折りてよめるといふはしかきあり。こは、貫之、都より長谷の觀音に詣てらるゝ度毎に、宿られたる宿坊に、久しく一宿もせず、程を経て後、行きて、案内を請はれたれば、彼の宿坊の主が、貫之にいへるには、久しく此方にて、一宿もせられねど、此方の宿は、かやうに相かはらず候ふと、内よりいひ出したれば、其宿の庭に植ゑてありたる、梅の花を折りて、此歌をよみたりといふことなり。さて貫之の家

集には、此時宿のあるじのよみたる返歌をもつせたり。花だにも同じこゝろにさくも  
 のを植ゑけん人のこゝろ知らなむとあり。此歌の意は、梅の花さへも、昔と同じ心に、相  
 も變らず咲くものなれば、此の梅を植ゑたる我心を、花のかはらず咲くにて、知りたま  
 へと答へたるなり。●人はいさ。いさと濁りてよむは誤なり。いさと清みてよむべ  
 し。いなしらすの意なり。此の歌の外にも、貫之の歌に、人はいさわか身はすゑになりぬ  
 ればまたあふさかもいかでまつべきとあり。例して知るべし。さて、心も知らずの歌の  
 心は、人の心主にあて、云ふは、前方と同じきや變りたりや。そはいな、知らず。されどわ  
 れは、故郷のやうにおもひ居る御坊の庭の花は、まことに前の通りの香に、少しもかは  
 らずにはへるなり。これによりて、我心をも知りたまへといふ意なり。●貫之。中納  
 言長谷雄の孫、父の望行も、歌に名高き人なり。延喜年中、御書所の預となり、越前權少掾、  
 内膳、典膳、少内記等の官を経て、大内記に轉し、五位下を授けられ、加賀美濃の介となり、  
 延長年中、大監物左京亮に拜せられ、土佐守となる。天曆年中、立蕃頭となり、從五位上に  
 進み、木工權頭となり、天曆九年(皇紀一六一四)卒す。古今和歌集は、紀淑望等五人と、勅を  
 奉じて編したるものなり。

(六) 卒業を祝ふ

●まさしくて。正し、確にあらはれて。●盛典。盛

大なる儀式といふ意。●かけまくも。『かけまくは、かけむの延音なり。言の葉にかけ  
 むはといふ意なり。皇室の御事を、我々などの言葉にかけて申さむは、いと恐れ多きこ  
 となれどといふ意よりして、陛下の御事を申したてまつる時には、常にかく申したて  
 まつる。

(七) 人道は一誠にあり

中庸曰、自誠明謂之性、自明誠謂之教、誠

則明矣、明則誠矣、唯天下至誠、爲能盡其性、能盡其性、則能盡人之性、能盡人之性、則能盡物  
 之性、能盡物之性、則可以贊天地之化育、可以贊天地之化育、則可以與天地參矣、其次致曲、  
 曲能有誠、誠則形、形則著、著則明、明則動、動則變、變則化、唯天下至誠、爲能化、至誠之道、可前  
 知、國家將興、必有禎祥、國家將亡、必有妖孽、見乎蓍龜、動乎四體、禍福將至、善必先知之、不善  
 必先知之、故至誠如神、誠者、自成也、而道自道也、誠者、物之終始、不誠、無物、是故君子、誠之爲  
 貴、誠者、非自成己而已也、所以成物也、成己仁也、成物知也、性之德也、合外內之道也、故時措  
 之宜也。

(八) 本邦電信の沿革

●廟議。ヘウギ。朝廷の議決。廟は、諸侯王

以上の其祖先を祭る所、宗廟といひ、祖廟といふ。天子その宗廟を祭りて、永く絶わざら

しむる所以は、よくその國家を治めて、亂れざらしむるにあり。祭政一致なりしが故に、故に國家を保つを、宗廟を有つともいふ。而して、此れによりて、國君の政治を行ふ所を、廟堂といふ。廟堂は朝廷といふが如し。朝廷大事を謀るには、昔は必ず、廟につけて、廟に於いてす。故に、朝廷の議を廟議といふ。廟算といひ、又は、廟策ともいふ。後漢書の注に、古者謀事、必就祖、故言廟策也とあり。 ● 濫觴 「ランシヤウ、物事の始をいふ。孔子家語に、江始出、于岷山、其源可以濫觴、及其至江津、不舫舟、不避風、則不可以涉、とあるに本づく。泉の始めて流るゝは、酒杯に汎濫するに過ぎず。泛濫して、漸く横流するに至るをいふ。これよりして、遂に始源の義となる。 ● 十年西南の役 「明治十年二月、西郷隆盛、兵を擧げて叛す。同九月、隆盛敗死し、亂平く。 ● 對峙 「タイマ、峙は山の聳ゆ立つこと。同じ様に向ひあひたつことなとを對峙といふ。 ● 五畿八道 「畿とは、王者の居る所の附近をいふ。支那の昔の里數にて、方千里を畿といふ。我邦にては、舊の帝京の附近、五ヶ國(山城大和河内和泉攝津)を指して、畿内といひ、その五ヶ國あるを以て、之を五畿と稱す。又は御畿内五ヶ國など呼べる時もありき。八道は、東海道、東山道、北陸道、山陰道、山陽道、南海道、西海道、北海道の八道をいふ。昔、全國を、畿内と北海道とを除きたる、他の七道とに分ちたることありしが、今は北海道を加へて、八道となり、更に臺灣を加へたり。今日に

ては、電信事業の發達著しく、明治三十五年七月十八日より三日間、東京に於いて、萬國郵便電信聯合條約加盟二十五年祝賀會を行ひ、特に紀念端書を發行したり。萬國と電信を通ずるは、海底電線による。

### (九) 書簡

● 家兄 「カケイ、わが兄の稱。 ● さしたる 「それといふべきほどの。 ● 寒村僻邑 「僻邑は僻遠の邑にて、片田舎のこと、寒村も同じ意にて、ものさびしさ村といふことなり。

### (一〇) 動物の智術

● 智術 「チヤユツ、その、智慧によりて運らすてだて。 ● 八門 「脊椎動物、節肢動物、軟體動物、蠕形動物、棘皮動物、腔腸動物、海綿動物、原生動物、これは動物界の八大區分にして、これ等を門といふ。門の次に綱あり。綱の下に科あり。科の下に目あり。目の下に屬あり。屬の下に種ありて、次第に細別せらる。 ● 蕃藤 「ハンリ、垣根など。 ● 飯匙蛇族 「ハブの族。ハブはまむしと共に、我邦に産する普通の毒蛇なり。上顎に二本の鋭き齒ありて、咬むときは毒液を注射す。

### (一一) 蛙

● 蛙 「かへる、かはづ。 ● 閤々 「カクカク、又は閤々とも書く、蛙の鳴

聲を形容す。●**蚪蚪**』クト、通例蛙斗に作る、或は活東といふ。爾雅翼に蝦蟇曳腸於水際草上、纏繳如索、日見黒點漸深、至春水時、鳴以聒之、則蚪蚪皆出、謂之聒子、古謂龜影抱、蝦蟇聲抱、頭圓色黒、始出有尾而無足、稍大、足生而尾脫、或曰月大、生前兩足、月小、生後兩足、崔豹古今注には、一名懸針、一名玄魚、以其狀如魚、其尾如針、又併其頭足言之、則似斗也、古科斗字取象於此。我邦の俗、是を「おたまじやくし」といふ。形によりて名けたるなり。

●**鰓**』サイ、あご、魚の頬中の骨なり。●**髻髻**』ハツツ、仿佛、彷彿等に作る、猶ほ似の如し。又見れども審ならざる貌とあり。それとは見れど、さだかにそれと知りたさをいふ。●**小野道風**』太宰大貳葛弦の子、好古の弟書を善くす。道勁神逸、古今に冠絶す。醍醐朱省村上の三朝に歴事し、正四位下内藏權頭に至る。醍醐帝甚だ其書を愛し、命じて醍醐寺の榜を書せしむ。其他題字の扁額今に存するもの多し。康保三年卒す。年七十一。●**身紀一六二六年**後世道風及び藤原佐理、藤原行成を稱して三蹟といふ。●**かじか**』これは蛙とは類を異にす。だゞその似たるを以て、人にて蛙と同じとす。谷川の清き河原などに棲む。朗々の音、極めて愛すべし。秋の夜の月明き頃など、ことによし、萬葉に、「河蝦鳴六田乃川乃川楊根毛居侶雖見不飽君鴨、おもはへず來ませる君を佐保川の河鹿聞かせず還しつるかも、又佐保河の清き河原になく千鳥、河津と二つ忘れかねつも、

など、よめるを見れば、古より賞美したるものなるべし。●**みやび**』風流、風雅などいふ。語源は「宮ぶ」とて、俚ぶるの對より出でしなるべし。都人の優に、あでなるをいひても、それより風雅などに轉せしものなるべし。

### (一一) 習字の姿勢

●**さてそのかまへといふは**』習字する時は、机に

向つて正坐すべし。脊髓を眞直ならしむべし。机に對して、適宜の地位を取るべし。されど、兩足の母指を重ねる位といふは非なり。臀部は兩足の間に、床の上に落すべし。力を丹田下腹に込めざれば、心氣落ちつかず。心氣落ちつかざれば、字輕浮となる。腰をかけた習字する時は、兩足をして、適度の地位を持たしめ、兩足に力を入れしむべし。懸腕直筆は、大字の法なり。中字は提腕にし、小字は枕腕にす。目は常に筆を見るべし。心氣筆と一體たるべし。●**風采**』人柄、様子、容貌、或は品位など。

### (一二) 長久保なほ女

●**そゝるゐるき**』散策、逍遙。●**たへらる**』

稱揚、稱讚。

●**健氣**』けなげ、かひくし。●**只管**』ひたすら。●**疏通**』ソツツ、河道をほりて、水を通せしむるを疏通といふ。疏通は通也、分也、又滌也とあり。

### (一四) ダニエル・ウエブスターの逸事

●**ウエブスター**』

Daniel Webster 亞米利加の政治家にして、又能辯を以て著る。西洋紀元一七八二年生れ、一八五二年死す。

(一五) 最良の衣服

●綿毛● わたげ。 ●毳毛● セイモウ、にぞけ、毳は毛の縛細なるものなり。 ●緊く● かたく。 ●なか●くに●却りての意。 ●いたつき● 苦勞をいふ。

(一六) 節約

●節約● セツヤク、節は、ひかへおさふる事。約は、つゞまやかにすること。 ●狀師● シヤウシ、辯護士。 ●至言● シゲン、道に至れる言の義にして、善言なり。美言なり。 ●必須● 必需、必要など同意。 ●堂司● タウシ、教會堂の司人。 ●認識● 哲學上にては、やかましき字なれど、ここにては、たゞ知る「認める」といふほどの意。

(一七) 少女のため

●梳風浴雨● 櫛風沐雨より來れるならん。風塵の中に勞苦して身を顧みぬをいふ。風に吹かれ、雨にうたれなどいふに同じ。莊子には「無敗、塵無毛、沐甚風、櫛疾風」となり。 ●は●ま●ざる● 沮喪、勇氣は、まひなどいふ。は●ま●む

は、實は他動詞なり。音にて「沮す」とよむ方よろし。

(一八) 學習の功

●丹青● タンセイ、繪畫のことをいふ。繪畫之輩曰丹青とあり。畫工の丹青等のものを用ふるによる。 ●レイノルツ● Sir Joshua Reynolds. 1723-1792. 英國デボンの人にして肖像畫の妙手なり。繪畫論あり。

(一九) 勅語捧讀

●千代田● 江戸城の一名なり。今の皇居の地。 ●ひとの君● 天に二日なく、地に二王なし。一國に二君あるべき理なし。故に一人の君といふ。「一人」といふは、君王のことをいふ。一人横行天下、武王耻之、又は一人有慶、又は所以養一人也など、一人といひて、天子を稱せるなり。 ●ふたりの親● 父と母とをいふ。 ●かしづく● 大切につきそひ養ふ。 ●いもせ● 夫婦なり。「いも」は妻、「せ」は夫をいふ。古くは兩性に用ひたれども、今は別になれり。 ●みをしへ● 陛下の教訓なるが故に、尊びていふ。「み」は「ま」と通ひて、物事を尊びいふ冠頭語なり。御の字など充つ。御門御心の類なり。 ●水穂の國● みづほのくに、日本國の異稱なり。古事記には「とよあしはらのちあさのなかいはあさのみづほのくに」とあり。普通には、瑞穂とかく、意義によりてなり。水を書くは音をかりたるのみ。 ●大御實● 國民を、天皇の撫治したまふに就いていふ。

稱國民といふほどの意なれど、臣民より妄にいふべき語にあらず。●しるべ』をしへ知らずること。道案内をすること。

## 二一〇 織物の進歩

●堺 堺市は和泉國にあり。大阪府の域に屬す。大和川の河口にありて、人口五萬餘。古は外國との互市場にして、織物の製出甚た盛なりき。今大阪との鐵道往復繁く、段通及び鐵器の製造に名あり。●倭錦 『ヤマトニシキ、襟良元の創むる所。河内錦に對していふ。●唐織錦』 後陽成天皇の頃、西陣の織工儀屋某、蜀江錦に倣ひて織出せるもの。●綴錦』 一名を天竺織といふ。十五世紀の比、白耳義の染業者シャノンゴレン(John Gobelins)の工夫せし者なり。高臺寺に傳はる豊太閤の陣羽織、系織ゴフラン。又寛永中角倉與一の商船より傳へられたる、祇園會鷄鉾の見送り、系織ゴフランの如きは、舶來にして貴重なり。安永の頃より、舶來品によりて織出せり。又天明の頃より、堂上方、門跡方家來の内職にて營みたれど、専門になしたるものなし。江戸にて、將軍家の大奥などにて、賞翫せられしかば、漸々此道に長したるもの出で、文化の末より、稍發達せり。此織物は、極めて時間と手數とを要するものゆゑ、市中(東京)にては、絶えて織出するものなし。今日は、たゞ京都の川島甚兵衛氏、工夫稍成効せるも

の、如し。此の綴錦は、日本織物の王として誇るに足らん。●錦』 爾之岐は、綺の一種にして、後世の竊真田の好きものなり。これ本邦の韓風を模したる始なり。雄略天皇十四年の條に見ゆ。●釐花山織』 金花山織か。●白絲』 生絲ならん。●明和安永』 明和元年(寶曆十四年)改元は、紀元二四二四年、後櫻町天皇の二年、安永元年(明和九年)改元は、紀元二四三二年、後桃園帝の二年。●元文三年』 櫻町天皇の第三年、紀元二三九八年。●縮緬』 もと支那の織物にして、天正の頃、其法を、明人より泉州堺の織工に傳へられ、初て織出し、ものなるが、その後京師の西陣に傳へられ、西陣にて發達したるものなり。天和中に至り、紋縮緬、柳條縮緬、エボシチャリメンともいふなどの類を織出せり。●御召縮緬』 は、天保中、桐生の織工、京師の製に倣ひて、一種の柳條縮緬を織出せり。即是なり。●風折縮緬』 かざをり、明和、中、足利の織工、西陣の柳條に倣ひて、織出せるもの。●濱縮緬』 寶曆中、近江淺井郡難波の人、中村林助、乾庄九郎の二人、年々姉川の水害を憂へ、植桑養蠶をなし、縮緬業を起すことを考へ、自ら丹後に行き、其織法を研究し、近隣の婦女に傳へしもの、東淺井、坂田の二郡にあり。其産額年を逐ひて増加せしかば、其製品を長濱に蒐集せしより、人呼びて濱縮緬といふ。●博多』 博多の唐織は、鎌倉時代、滿田彌三右衛門といへるもの、嘉禎元年四月、皇紀一八九五年、東福寺の僧辨

圓に従ひて入宋し、彼國の明州に、六年間滞在し、種々の織方を研究して、歸朝し、廣東織などの貴重品の品を織出せしが、後には獨鈷織、華皿織等の新意匠のものを織出せり。後數代中絶せしが、天文の比、彌三右衛門の遠孫彦三郎、神谷壽貞の助を得て、明に渡り、織法を研究し、唐織を再興せり。其門より、竹若伊右衛門出で、天正中一種の織物を發明せり。其質琥珀織に似て、甚だ厚く、其模様浮線文にして、柳條あり、時人之を博多織といふ。●仙臺織●大阪の役、伊達政宗がつれ歸りし、京師の呉服商人、岩井八兵衛によりて開かる。後八兵衛西陣の織工小松彌右衛門を招き、専ら伊達家用の織物を織らしめしが、彌右衛門の工夫にて、遂に一種の袴地を創製せり。之を八兵衛織と稱せしが、文化の頃より、仙臺平と改稱し、大に世に行はる。

(二二) 蠶

●蠶●蠶より生ずる工業品の高、明治三十二年、蠶絲、三百二十七万七千四百十六貫、真綿、九万九千二百二十八貫、蠶卵紙、三百七十九万五千三十枚。●生絲輸出高●(明治三十四年)八六九七九〇六斤、七四六六七三三〇圓六二〇。●孵化●フクワ字化ともかく、卵のかへるをいふ。●蛾●が、蝶の類、サナギより化せるもの。●眠●ミン、ねむりとも、とまりともいふ。初眠、二眠、三眠などいひ、ふねのとまりなどともいふ。

●起●おき、二眠おき、三眠おきなどいふ。●僞足●ギソク。●塾り●こもり。●蛹●ヨウ、さなぎ。●複眼●フクガン、瞳の二つ以上あるものをいふ。蠅、蜘蛛の如きも然り。●絲を取る●古は繭を口に含みて、其糸を抜き出したるといふ。●仁徳天皇●皇紀九七三より、一〇五九年まで、事蹟前に委し。●雄略天皇●皇紀一一一七年より一一三九年まで、即位の十六年諸國に詔して桑を植ゑしめ、皇妃をして躬ら桑を摘み、蠶事を勸めしむ。●輓今●ハンキン、ちかどろ、このどろ。●歷朝●代々の朝廷といふことにて、代々の天子といふこと。

(二三) 動物園

●上野●此の書の第四卷、上野公園を見るべし。●百萬の

軍勢●昔時戰術の未だ開けざる時に方りては、よく虎象などを用ひしなり。特に印度にては、戰爭に用ひ、敵軍に突入せしむるために、象を訓練せることさへあり。アレキサンダー大王が、印度を征服せる時の如きも、此の象のために苦しめられたること、少からざりきといふ。支那の史上にも、後漢の光武帝、王莽と戦ひし時、王莽、虎豹、犀象の屬を用ひて、以て兵勢を助けたる由記せり。●清正の畫●清正征韓の役に在り、嘗て三叉の槍を以て、虎を殺さんとせしに、虎のために、三叉の一を折られたりといふ話あり。能

く繪畫の主題となれり。●深谷の月』猛虎一聲山月高などの句より轉化し來れるものか。司馬遷答任安書に曰く、猛虎在深山、百獸震恐、及其在陷穽之中、搖尾而求食、此積威約之漸也と。

### (二三) 長良川の鵜飼

●長良川』源を郡上郡大日嶽に發し、中島郡に至り、木曾川に歸す。ナガラガハ。●武儀郡』ムギ郡。●藍見川』アキミガハ。●稻葉山』イナハヤマ、岐阜市の東南にあり、金華山に連る小山にて、その麓に稻葉神社あり。●鵜飼』神武天皇東征の時、吉野の鵜飼部歸順すといふことあり、又天皇、兄磯城を討ちたまふ時、將卒の勇氣を鼓舞せんとて、よみ給へる歌の中に、「島津鳥鵜飼がとも今に助にこぬ」とあり、又萬葉集の中にも、安由波之流奈都能左加利等之麻都等里鵜養我登母波云云、十七、島津鳥鵜養等母奈倍云云、十九、などあるを見れば、この事は、古くより行はれたるなるべし。●長良人は七艘』岐阜縣編纂長良川鵜飼の記に、毎夜長良村(稻葉郡長良村大字長良)にては七艘、瀬尻村にては五艘を使用し、又時としては、連合して十二艘となり、之を並列し、一瀬を下す毎に、交互先後をなし、その狀魚鱗鵜翼の如く、流に隨ひて下り、魚を圍む。この時、舟夫は楫を以て舷をたゞき、聲を發して勢力を

示し、或は叱し、鵜匠、中鵜使亦聲を和し、勢をそふ、鵜は篝火の明に乗して、縱横自在に水中に潜り、鮎を逐ひ、之を啣みて水上に浮み、吞下す。その間、入り交り、恰も蜘蛛の巢の如く混亂したる手繩を、左の指の股にはさむ鵜匠、中鵜使容易に操りさばき、その鮎を吞むこと多きものより、充分吞めば鵜は舟に歸る(大なるものは三四尾、小なるは七八尾)嘴を開き、吐籠に吐出させ、これは右の手にてする。又水に追入れ、篝を添ふる等、頗る神速を要す、とあり。●鵜匠』永祿七年、(皇紀二二二四年)織田信長、長良川に觀漁す。鵜飼人、生鮎鮎を献す。これより鵜飼を賞美し、鵜匠と改稱し、鷹匠と等しく遇せられ、一戸に藤米十俵宛を宛て行ひ、又漁船を給せられしことあり。鵜匠の名これより起る。●中鵜使』これも、亦前の如き者なるべし。●篙工』コウコウ、舟夫なり。或はカコとも訓む。●十六羽』長良川鵜飼の記に、一船に鵜匠一人、中鵜使一人、舟夫二人を乗せ、舳先に篝火を焚き、鵜匠は舳先にありて、十二羽、中鵜使は船の中央にありて、四羽、合計十六羽を使ふ云々とあり。●潛ぎ』かづき。●巻狩』まきがかり。カラミといふと、記にあり。●平瀬』ひらせ、河の水の淺きところを瀬といふ。瀬の長さあり、短きあり。平瀬は長さ方、片瀬は川の片々瀬となれるをいふ。●赤壁』セキヘキ、蘇東坡の賦によりて知らる。吳の軍が曹操を破りしところ。湖北省漢口の附近なり。赤壁の戦は皇紀八六



八年なり。●さゝいぬ』竹にて作り、酒を入るゝもの。●一盞』サン、さかづき。一杯といふに全じ。●船伏山』厚見郡にあり。フナフセヤマ。●文明年中』後土御門天皇の御代、足利義勝の時代の年號、紀元二二二九年より、二二四七年まで。●一條禪閣兼良公』イナデウゼンカフカチラ、左大臣從一位關白經嗣の第二子、姓は藤原氏、父の後を継ぎ、左大臣從一位となり、攝政となり、更に太政大臣に拜せられ、關白氏長者となる。享徳二年解職、准三宮、食邑三千戸、隨身兵仗及年官年爵を賜ふ。長祿二年之を辭す。文明四年美濃に遊び、藤河の記を作る。文明十三年四月薨す。年八十。(皇紀二二四一年)兼良博學多聞、最朝典に熟し、和歌を善くす。又神道に通じ、佛書に渉る。當時推して以て才學、絶倫とす。著す所、新玉集、應仁の亂に燒く筆占、公事根源、文明一統紀、樵談治要、東齋隨筆、桃華藥業、除宮雜例、花鳥餘情、代始私抄、年立換語、祕訣、歌林良材、連珠合璧、雲井春、小夜寢覺等あり。●慶長十六年』皇紀二二七一年。●東照公』徳川家康公、元和二年四月十七日薨す。年七十五。東照公と諡す。(皇紀二二七六年)●元和元年』皇紀二二七五年。●秀忠公』徳川氏第二代の將軍、家康の第三子、寛永九年薨す。(皇紀二二九二年)年五十四。台徳院と諡す。●義直卿』家康公の第九子、慶長五年生れ、慶安三年五月薨す。初め甲斐に封せられ、尾張に轉し、名古屋に居る。徳川氏の三卿の一なり。(皇紀二二六〇—二二三

二〇)

### (二四) 世界最大の鹽坑

●奥國』Austria. 日耳曼聯邦の内の君主

國なり。ガリシヤ Galicia ユーリックカ。●西曆千二百五十年頃』皇紀一千九百十年、慶長二年頃なり。●三百五十六年前』西紀千五百三十四年にして、皇紀二千百九十年頃、大永年間、及天文年間なり。●アントニー』S.I. Antony. The father of Monchism. 或は Antony of Thebes と稱す。紀元二百五十一年、上埃及に生る。或時は自己の家財を賣拂うて、貧民を扶助し、廿年間山谷に隠遁せしとあり。又百餘歳の老體を以て、アレキサンドリアに遊歴せし事あり。紀元三百五十六年死す。耶蘇教の高僧なり。●級磴』登壇に登る階段なり。●聖母』耶蘇基督の母マリア S.T. Maria なり。●ポーランド』Poland 昔日獨立國なりしが、今は露領となれり。●シギズムント』Sigismund. 紀元千四百六十六年に生れ、千五百六年即位す。當時王后の煽動に依て、改革黨起り、遂に千五百三十七年退けられ、千五百四十八年死す。●鏡鉞』樂器なり。●曲盡』つぶさに書盡すこと。

### (二五) 寶石

●ヴィクトリア』Victoria Alexandria 西洋紀元千八百十九年生れ、

千八百九十九年死す。 ●南アフリカ』 South Africa ●北カロライナ』 North Carolina  
カリフォルニア』 California ●ブラジル』 Brazil ●ボルネオ』 Borneo

(二六) 玉磨かざれば光なし ●古人の語』 實語經(作者不詳)

にいはいく、玉不磨無光、無光爲瓦石、人不學無智、無智爲愚人、云々。 ●至寶』 至は極なり、大なり、即ち至りて大切なる寶。 ●切磋琢磨』 大學の註にいはいく、切、以刀鋸、琢、以錐鑿、皆裁物使成形質、磋、以鈍錫磨、以沙石、皆治物使其滑澤也、治骨角者、既切而復磨之、治玉石者、既琢而復磨之、皆言其治之有緒、而益致其精也。 ●價值』 カチク、ねうち。 ●珊瑚』 サンゴ、珊瑚蟲といふ寄生動物の分泌したる石灰質より成る。珊瑚蟲は、三十度以下の温度に於いては、棲息せず。故に次第に上方に集合し、終に珊瑚島を生ずるに至る。珊瑚蟲は、其外層より、石灰質物を分泌して、骨格を生じ、且つ多く芽體を出して、群棲するを常とす。 ●瑪瑙』 前章にあり。 ●御影石』 ミカゲイシ、花崗石の俗稱。 ●創聞』 サッパン、はじめてさく。 ●雲母』 さら、鑛物の一種。 ●磨礬』 マロウ、礬はすりへらすこと。 ●酸化錫』 サンクワス、錫の酸化したるものにして白粉に用ふ。 ●光澤玲瓏』 光澤は、つやなり。つやくしく、水氣あるが如くにて、白く明に透き通るや

らに見ゆるを、光澤玲瓏といふ。玲瓏は玉の聲、又明なる貌をもいふ。 ●故三條公』 三條實美、天保八年二月八日、京都に生る。從五位下侍從より、進んで禁色昇殿を許され、累進して權中納言に任ず。文久二年、詔を奉して、江戸に下り、攘夷の旨を幕府に達す。慶應三年、議定となり、明治元年正月九日、副總裁議定職に任し、尋て外國事務總督を兼ね、又大納言左近衛大將に轉ず。徳川氏大政奉還の後、江戸に下り、關東監察使となる。閏四月廿一日、三職入局を廢するに因て、更に議定兼輔相を拜す。五月廿四日、右大臣に任せられ、輔相兼關八州鎮將たり。鳳輦東下に及びて、鎮將府を廢せらる。其請によりてなり。明治二年正月、右大臣を辭す。尋いて修史局總裁となり、明治三年七月、太政大臣に陞る。明治十年十二月廿九日、勳一等に任し、旭日大綬章を賜ふ。賞勳局總裁、修史館總裁を兼ね、十五年四月、大勳位に叙す。十七年七月七日、公爵に叙す。十八年責任内閣の制、初るに及び、退きて内大臣となり、尋いて辭す。二十二年十月、假に總理大臣を兼ね、二十四年二月十九日、正一位に叙せられ、其日東京麻布の私邸に薨す。勅して三日間朝を廢し、國葬を以て東京小石川音羽護國寺の墓地に葬る。 ●音羽護國寺』 東京市小石川區音羽町護國寺、眞言宗新義派の本山なり。 ●域内』 イキナイ、境内といふに全じ。舊境内の一部今は陸軍墓地となる。

### (二七) 番兵の宥罪

●宥罪』イウザイ、宥釋宥赦、宥はゆるすとよむ。

●南北戦争』北亞米利加合衆國は、紀元一七七七年獨立してより、隆々の勢を以て進みたりしが、その南部と北部とは、利害感情相一致すると難く、遂に奴隸廢止の議によりて、相戦ふに至りぬ。元來南部合衆國は、綿花栽培のため、奴隸を使役すること多く、北部は商工業多きを以て、之を要せず。非奴隸會といふもの起り、奴隸使役を以て、人道に背くとし、之を解放せんと主張するや、北部は之に和し、南部は之を拒否す。一八六一年、非奴隸派のリンコルン大統領となるや、南部十一州は、北部と離れ、ソツチモンドを首府とし、ダキスを大統領とす。北部は、グラントを大將として、頻りに南部を征す。一八六五年、南部の首府陥り、諸州降りて、復合衆國に合し、翌年に至り、公然奴隸の使役を禁止せり。これを南北戦争といふ。皇紀二五二一年文久元年皇紀二五二五慶應元年 ●ワシントン』Washington 北米合衆國の首府にして、一七九一年の經營にかゝる。

### (二八) 北京籠城

此の事については、土屋鳳洲先生の文簡にして要を得たれば、左に之を掲ぐ。

清國有稱義和團者、世人或呼曰拳匪、以練習拳棒也。腰間各束紅帶、或著紫衣、頭纏紅巾、

以爲標識、常念誦呪語、謂可以避禍、端郡王實爲其首領、滿人附和者日益多、其徒號二十萬、初據山東省、漸蔓延于直隸省、會涑水縣有一武舉人與耶蘇教徒爭訟、敗、脚之、遂傾資財、至山東、請團徒教師三人、及其徒若干人、歸謀害耶蘇教徒、教徒豫知之、逆擊、團徒激昂、聚黨與毀教會堂、并燬教徒家、以肆殺戮、總督聞之、附分統楊福、以馬隊七十五人、自保定往勦、楊分統以三日、殺團匪二三十人、匪徒伴敗走、楊逐之、陷伏、遂爲所殲、是爲此役之始、時我明治三十三年五月二十一日也。無幾、匪徒塞北京天津間路、聲息不通、於是各國將官相會、本邦及英佛露米獨伊奧謀助清國鎮定之時、各國艦隊在太沽灣者、十有八艘、太沽爲北京天津之要衝、設砲臺四、而敷水雷於白河、各國指揮官皆知清政府陰援團匪、下略、六月十七日取太沽、初團匪之蜂起也、仇視外國人、其在北京天津者、將爲所殲、於是各國軍艦指揮官在太沽者、會議曰、救護各國民、爲今日急務、因連合各國軍、更分爲二部、一以救北京各國公署、一以護天津居留民、(七月十七日天津陷) 十四日(八月)我司令官師團長山口中將、以第二十旅團爲本營、使少將眞鍋旅團長攻朝陽門、少將塚本旅團長擊東直門、此日露軍先破東便門、福島少將與粟谷聯隊長、進從東便門入、達我公使館、而朝陽東直二門、敵各據堅壘、奮勇決戰、銃丸如霰、我軍蔽人家、砲擊自朝至晡、不能拔、兵多死、司令官令曰、今夜宜用爆發器、破城門、於是、二少將各選敢死士、

編一隊、令掌發電器、爆發藥、函裝藥器、運搬手等之事、夜鐘九點、將發、月明如晝、衆患之、須臾、黑雲掩月、咸喜曰、是天助我義兵也、各蒙黑衣、纒得近城門、裝藥、函而隊長一揮、電氣觸接、爆然一聲、震撼天地、二門皆破、突進猛擊、敵不能支、各國軍亦皆奮門入、公使以下在公署者、歡呼起舞、聲震城中、宮闕內猶有殘兵五六百、我兵圍而不敵、擊蓋有所慮也、間兩日、盡潰散、乃知皇帝西太后、以十三日既避于西安府也、於是連合軍燬端郡王第、掃蕩拳匪、根據劃城中、朝陽門至府城爲南北兩部、我軍管北部、又以正陽門爲中心、露佛領其東部、英米領其西部、各設民政廳、整理庶務、糾察奸慝、綏撫人民、別置師團司令部於公署、市民安堵、軍糧歡迎、咸服我恩威云、時明治三十三年八月十六日也、自拔太沽、至此凡六十一日。

●北京 支那帝國の首府、周圍十里九丁餘、人口凡そ百九十萬、各國の公使館あり。

●石井書記官 當時、公使館一等書記官、從五位勳六等法學士石井菊次郎氏、亂後、勳五等雙光旭日章を賜る。

●兒島正一郎 兒島惟謙の子、明治八年東京に生れ、明治三十年高等商業學校を卒業し、三十二年十月、外交官及び領事館の登庸試験に合格して、外交官補となり、清國在勤を命ぜられ、この役に死せり。

### (二九) 赤道直下の一日

●鱒 『フカさめの一種なり。大なるものは二三丈に至るといふ。』

### (三〇) 玉川上水の工事

●玉川上水 東京市に引きたる上水、三

通あり、神田上水、千川上水、玉川上水といふ、武江年表承應二年の條に、今年玉川の上水を、都下に通して、衆庶の用に充てしめたまふ。玉川上水は、遠く西の方、甲州丹波山の幽谷に發し、同國丹波村を過ぎて、武州多摩郡羽村に至る云云。羽村に井堰あり、これより、四谷大木戸を經、虎の門に至り、日本橋以南の各町に分布す。

●大猷公 徳川三代の將軍家光公、慶安四年四月廿日薨す、壽四十八(皇紀二三一一年)。

●町奉行 江戸、京都、大阪及び駿府におかる、府内の人民の訴訟を裁決し、非違を警察し、驛傳を通し、民政を總理す。

●神尾元勝 『カムチモトカ』、遠州流の茶人、宗休と號す。初の名は五郎三郎、後、備前守に任ず。奈良奉行より勘定奉行に歴任す。寛文七年四月廿五日歿す。年七十九。

(皇紀二三二七年) ●清右衛門 莊右衛門 記録明ならず。兄弟なりともいひ、從兄弟なりともいふ。後、御普請役に命ぜられ、玉川の姓を賜はりしが、その奇才、幕府の忌む所となりて、終に罪せられさといふ。

●評定所 徳川幕府の制、和田倉門外、辰の口にあり。寺社奉行、町奉行、勘定奉行等集會し、政刑を議し、訟獄を決する所なり。

●會津侯 松平正

之』會津は今の福島縣若松市にて二十三万石の領地なり。二代將軍秀忠の四子、信州高遠の保科正光の養子となり、保科の姓を冒す。慶長十六年五月七日生れ、寛文十二年十二月十七日會津に薨す。年六十四。皇紀二二七一、二二三二。正之學を好み、著述も少からず。又茶道を修め、殖産にも心を用ひたり。●薨去』天子に崩といひ、諸侯に薨といひ、士大夫に卒といふ。死なり。家光の薨去は、慶安四年(皇紀二三一)なり。●嚴有公』德川第四代の將軍家綱公、寛永十八年八月三日生れ、延寶八年五月八日薨す。享年四十二。嚴有院と諡す。(皇紀二三〇一—二三四〇) ●承應二年』皇紀二三二三年。●羽村』端村ともかく由。●四谷大木戸』今四谷區大番町なり。兄弟の功を頌せる石碑あり。紀元一千六百八年』皇紀二千二百六十八年、慶長十三年なり。●チャールズ第一世』Charles I. 紀元千六百〇年に生る。神聖王權説を固守し、國民の輿論に反對し、議會を解散すること二回。之を召集せると十一年なりき。苛税を課し、所有暴戾を極めたり。當時國中二黨に分る。一は王黨、他は議會黨なり。後者は共和主義を首唱し、クロムウェルを以て首領とせり。遂にク氏は高等法院を開きて、王の罪を審判せしめ、王を以て人を殺し、民を虐し、國を賣るの罪ある者とし、千六百四十九年一月三十日、終に王を死刑に處せり。●ヘルドホルド』Heldhold ●一千六百十三年』皇紀二千二百七十三年、慶

長十八年なり。●オウグスタス帝』Augustus 名は Octavianus 紀元前六十三年に生る。ケーザル(Cesar = シーザー)の死後、元老院首領に任せられ、アウグス(尊大の意)の稱號を得て、皇帝の實力を有せり。帝は羅馬帝國の初代に當り、心を内治に用ひ、兵制の改革、海軍の擴張、風俗の改良、地方制度の改革等をなし、農工商を興し、水道を敷設し、溝渠を開鑿して、大に羅馬の隆盛を來せり。其外美術文學技藝を獎勵せしかば、瓦造の羅馬は、大理石の羅馬となれり。是れ後世、史家の羅馬の極盛時と稱讚する時代なり。紀元後十四年に死す。●ヒッル』Hill

(三二) 良妻は内庭の干城なり ●干城』カンツヤウ、干は

楯なり、難を杆くをいふ。城は城廓なり。難を蔽ひ杆く處なり。干ともなり、城ともなりて、國を守るといふより、武夫を干城といふ。干城とは、フセギ又はマモリトナルモノの意なり。詩經の兎置の章には、尅々武夫公侯干城とあり。此處にては、内庭即ち家内の掩護者といふ意味なるべし。●眞田伊豆守』後にいふべし。●會津』今の福島縣若松市。此時上杉景勝之を領す。秀吉既に薨じ、五大老三中老五奉行漸く相争ふ。家康景勝の入觀を促す。景勝却て家康の十罪を數ふ。家康怒り、自ら將として、之を伐つ。慶長五年五月、

(皇紀二二六〇) 伏見を發し、七月下野に至る。石田三成、兵を擧ぐるの報至る。即ち秀康を宇都宮に留めて、景勝に當らしめ、家康海道より京に入り、秀忠は山道よりす。秀忠、上田城に眞田昌幸に沮され、時を失し、九月の關ヶ原戰爭に會するを得ざりき。 ● 上田 ● 信濃國小縣郡上田町、當時眞田昌幸之を領す。 ● 佐野 ● 下野國安蘇郡佐野町。 ● 石田三成 ● 本名は宗成、豊太閤の寵臣なり。從五位下治部少輔となり、采邑十八万六千石を食む。秀吉に從ひて、館林を攻め、忍城を攻め、並に功あり。又征韓の軍に從ふ。秀吉薨後、家康を討伐し、秀頼を擁立せんと欲し、遂に諸侯を要して、大坂城に據る。然れども關ヶ原の一戰、軍利あらず、逃れて高野に至り、終に家康に縛せられ、十月一日、四條に斬首せられ、三條磔に梟首せらる。(皇紀二二六〇) 其書の大意にいはいはく、家康、罪あり、嗣君(秀頼)命じて之を討つ。苟も太閤の恩誼を念ふ者は、宜しく來りて力をあはすべしと。 ● 大坂 ● 即ち大坂城、秀頼方をいふ。 ● 合體與力 ● ガツタイヨリキ、同心協力といふほどの意、即ち心を一にするのみならず、體を一つにし、力を共にするとのこと。 ● 眞田昌幸 ● 昌幸は、武田信玄の近侍たり。歩兵隊長となり、功あり。勝頼命じて上田を領せしめ、安房と稱す。信玄、城を吾妻(上野)に築きて之を守らしむ。武田亡ひて、昌幸、信長に降る。信長、秋に逢ひ、甲信亂る。佐久小縣、信濃の諸豪相議し、昌幸を推して將とし、上杉景勝に通ず。天

正十年九月、徳川家康の大封を以て招くに逢ひ、子信之を濱松に送る。徳川氏大に悦び、本多忠勝の女を養ひて之に娶す。次年九月、昌幸利根吾妻二郡を平け、信之に沼田を守らしむ。天正十二年、家康長久手の戰に、援を北條氏直に請ひ、爲めに昌幸の沼田を以て、北條に與へ、代ふるに郡内を以てす。昌幸怒り、秀吉に通じ、又景勝に通ず。家康、昌幸を上田に攻む。四月、北條氏沼田を攻む。景勝之を破る。八月、景勝上田を援く。昌幸共に家康を破る。九月、家康終に回る。昌幸、景勝の援を謝し、二男幸村を送る。景勝之に信州屋代郷一千貫を授く。十四年七月、家康復上田を攻む。昌幸、秀吉によりて、和を請ふ。十五年七月、信之復駿府に質たり。是歲、秀吉、北條氏をして、上京せしむ。北條氏沼田の地を請ふ。秀吉、昌幸をして、沼田を致さしめ、家康に説きて、信濃の田を與へしむ。十八年、北條氏亡ぶ。家康、沼田を昌幸に返す。信之之に入る。慶長五年、昌幸子信之、幸村と、徳川の景勝を討つに從ふ。石田三成等之を招く。昌幸の妻は三成の女なり。幸村の妻は、大谷吉隆(大坂方にて三成の與謀の女なり。信之は家康の恩遇を被る。昌幸乃ち二子を召して、之を佐野、天明山、森樹の下に謀る。昌幸終に幸村の言に從ひ、西軍に屬し、信之獨り東軍に屬す。昌幸は遂に上田に歸る。九月三日、秀忠、昌幸を招く。使者再反すれども、聽かず。信之、秀忠に從ひ、日に書を貽り、昌幸を招く。卒に聽かず。關原敗後、秀忠、昌幸を殺さんとす。信之切に請ひ、之

を紀伊に流す。昌幸九度山に潛居し、剃髮す。慶長十三年六月卒す。年六十五。皇紀二二六八年。 ●真田信之 或は信幸に作る。昌幸の長子。天正中、家康の質となり、本多忠勝の女を娶る。後、三成秀頼を擁して、大坂城に據るや、父、兄に背きて、獨り家康に従ひ、遂に上田三万八千石、沼田二万七千石を領し、尋いて三万石を加賜せられ、大坂没後、十三万石を加賜せられ、松代城に徙る。萬治元年十月卒す。年九十三。皇紀二三一八年。文祿元年從五位下に叙せられ、伊豆守と稱せしかば、豆州君といへるなり。 ●本多忠勝 平八郎と稱す。三河の人。家康の愛臣なり。戰鬪五十七回、大に功あり。從五位下に叙せられ、中務大輔と稱す。初め大多喜城に封せられ、後、桑名城に封せらる。食邑十二万石。慶長十五年十月卒す。年六十三。皇紀二二七〇年。 ●仇儻 カウレイ、配耦、夫婦、夫婦の仲合。 ●沼田 上野國利根郡沼田町。天正十一年、昌幸此地を陥れ、子信之をして、之を守らしむ。 ●左衛門君 真田幸村をいふ。 ●犬伏 下野國安蘇郡犬伏町。 ●真田幸村 幼名源五郎、後左衛門佐と稱す。天正十三年閏八月、越後に質たり。大谷吉隆の女を娶り、秀吉に仕ふ。關原の敗後、父と共に、紀州九度山に潛み、剃髮して、傳心月叟と稱す。慶長十九年冬、季父信尹、家康の命を奉し、來り諭し、約するに、信濃の田一萬石を以てす。聽かず。再命するに、信濃一國を以てす。幸村怒つて叱す。秀頼人を遣はして招く。幸村大に悦び、馬數

十匹、兵器弓銃を併せ、百餘人を率ゐて至る。秀頼人を遣して、之を勞ひ、黄金二百枚、白銀三十貫目を贈る。幸村信濃の遺民を募り、數百人を得。秀頼又兵五千を授く。幸村他の指揮を受くるを耻ぢ、別に戰はんと欲し、城の東南隅の阜につき、偃月城を築き、獨り己の兵を以て守り、真田廓といふ。十二月、加越の兵、濠に薄る。之を破る。廓中火を失す。加越の兵復迫る。復之を破る。大阪冬の役、元和元年四月、大阪夏の役、數、東軍を惱せしが、謀皆齟齬し、終に殺さる。年四十六。子昌幸年十六。秀頼に殉す。歌の意は、幸村は正義のために、武勇を勵し、幾度も幾度も、敵の軍を敗りはしつれど、時運つたなく、正義の子は終に、花々しく討死したりとなり。花々しき討死といはんために、花とちりけりといひ、花をいはんために、あしといひ、あしをあらはさんために、難波のといひ、合せて大阪に討死したることをもあらはせるなり。加藤千浪は、江戸の人、萩園と號す。明治十年十一月歿す。年五十八。

女子國語讀本卷の三備考終

女子教科 國語讀本備考卷の四

普通教育研究會編

(一) 德育

●學問には云々」教育を分ちて三通りとすること古くよりあることなり。されど、これ學術上確なる分類にあらず。たゞ學ぶもの、便宜上なほ此等の語を襲用するまでなり。學術上にては、かゝる區分は、牴牾多きことなりと知るべし。此の所謂三育は、治者即ち教育者より見ていふ語にして、被治者、被教育者、學ぶものよりいふ語にわらず。被教育者よりいふ時は、すべて皆德育たらざるべからず。教育者より見て、始めてこゝに三育あり、但し本文にては、かゝる學問上の意義ならで、普通に用ゐらるゝ意味にていへるにて、つまり、學問には、智識を得んとつとむること、徳を磨かんと勉むること、又、其身軀を強壯にすべきこと、の三通りの意味あり。三者互に相扶掖せざるべからず。その中、徳性を養ひ磨くこと、最も大切なりといへるなり。●物欲」精神的ならざる欲望、劣等の欲、動物性の欲、私欲、耳目口體の欲などといふ。●良心」



本心とも、本然の性ともいふ。本来吾人に固有する所の道徳心。『道徳的判斷の力を有する天稟の心性。』●天稟』テンヒン。稟は稟受にて、うくと訓す。天稟とは、天より受けたるにて、未生以前より、既に天より受けたりといふ意を成し、性又は質を形容する詞となる。稟は音、賓、上聲、受命也、俗作稟、音、林、上聲の時は、倉廩の意。今はテンヒンと讀む。●心術』こゝろだて。きだて。●煥發』クワンバツ。煥は明にして、盛なる貌。天皇の有り難き詔勅を發せられたるを、讚嘆崇敬して、煥發といふ。徳を尊んで、明德といふが如し。

### (二) 農産物

この文、大體一般植物についていひ、特に農産物についていふ。

●不毛帶』毛は草百卉の惣名にして、艸木をも含むなり。地、艸木を生せざる者を、不毛の地と稱す。その帶と稱せるは、植物帶の區分なり。地球上に於ける植物の分布を八大別とす。一、赤道帶 椰子類』二、熱帶 木本狀羊齒類』三、亞熱帶 樟樹類』四、暖中帶 常綠潤葉樹』五、寒中帶 落葉潤葉樹』六、亞寒帶 針葉樹』七、寒帶 石南花』八、極帶 地衣植物』●ツンドラ』(Tundra)露國の最北部にして、西比利亞に接する一帯の地方なり。●サハラ』(Sahara)亞非利加にありて、世界第一の大沙漠なり。其の長さ凡二千八百哩、其幅凡千二百哩あり。Great Desert ●亞刺比亞』(Arabia)紅海と波斯

灣との間に突出する半島にして、一般に高原なり。沙漠甚だ多し。●波斯』(Persia)イラン高原の西部に位する。西部亞細亞の獨立國、人口七百六十五萬あり。●印度』(India)大抵英國の領地にして、印度洋中に突出する。一大半島なり。その廣袤、歐洲全土の三分の一に均し。人口二億八千七百萬あり。●西藏』ヒマラヤ山系と、崑崙山系との間にある、世界第一の高原なり。從ひて、寒氣凜烈植物の發育宜しからず。●カラハリ沙漠』(Karahari)高原にして、沙漠、喜望峯殖民地の北にあり。●濠洲』馬來群島の南に横はり、西は印度洋、東は太平洋に面す。人口四百五十萬、面積は歐洲の五分の四に等し。全土悉く英領とす。●ステップス』ロシア語にて、原野といふ意。その大原野の名となる。●オリノコ河』(Orinoco)南米の大河、北部にあり。其支流はアマゾン河の支流と連る。●ラノス』(Llanos) ●パンパス』(Pampas)ラプラタ河 (Plata)の灌域。●ミシシッピ』(河Mississippi)北米合衆國の中央、大平原の中央を灌漑して、墨西哥灣に注ぐ大河なり。●プレエリイ』(Pririe)平原曠野の意。○以上のステップス、ラノス、パンパス、プレエリイ等は、何れも土語の原野といふことが、固有名詞となれるなり。●莫大』(バクタイ)すぐれて多大なるをいふ。莫大焉(これより大なるはなし)といふ語より來る。『大』よりして、更に『多』の意味を有し來る。●寄生樹』やどりきの類、熱帯には頗る大なる

ものありと云ふ。●**穂稻** (スイイン) 稻の花なり。●**埃及** 亞弗利加州の一部にして、地中海岸の一小國、埃及は、世界の最古國にて、曾ては最進歩せるものなりしが、今はたゞ、その名残をとゞむるのみにて、小さな一國となり了れり。アレキサンドリアはナイルの河口にあり。●**ナイル河** (Nile) は紅海と殆平行して、北に向ひて亞非利加の東部を流る、而して此河、年々汎濫し沿岸に沃土を堆積す、埃及穀産の富は、全く此の賜なり、其の河流は、三角洲の適例にして、その名稱の起因は、こゝにあり、ナイル河は、長さに於ては世界第一なれども、水量は遙に他の諸大河に劣れり。●**支那** 支那の大、河、黄河、揚子江も、年々汎濫して、沿岸の土壤を肥沃にす、其の他、廣東河、珠江、閩江、白河、黒龍江、松花江等あり。●**印度** 印度には、インダス (Indus) 印度河、ガンダス (Ganges) 恒河、ブラマプートラ (Brahmaputra) 等の三大河あり、その内、恒河は婆羅門教徒の最も神聖視する所なり。●**コ、の果** (Coconut) 椰子と稱する熱帯地植物の果實。●**バナ**、**芭蕉** の實前にあり。●**三角洲** 水流の爲めに沃土の河口に堆積して洲を成せるもの。●**伊太利亞** (Italy) 歐洲の南部より地中海に突出せる一大半島にして、面積十一萬四千四百方里、人口三千百三十萬あり、此王國の首府をローマと云ふ。●**合衆國** 北亞米利加にありて、四十五州より成立し、立憲共和政體なり、舊は英國の領土なりしも、千

七百七十五年、十三州の委員は、ヒラデルヒヤに會し、公然本國に反對することに決し、ワシントン<sup>ワシントン</sup>を以て元帥とし、翌年七月獨立宣言書を發布し、其翌千七百七十七年十三州合同して、亞米利加合衆國と唱へ、各國の助力を得て、多年英國と戦ひ、千七百八十三年、和議全くなり、獨立を承認せられたり。

(三) **蜜蜂** ●**粘稠** 『ねばりけありて、其質の細密なること。』

(四) **西洋各國の衣食住** ●**デッネー** (Dinner) 一日の中にて、最も

御馳走のある重なる食事を云ふ。●**デッネー** (Dinner) 佛國に於ての遅き朝飯、及び肉と酒と位を添へたる中食を云ふ、英國に於ける Lunccheon ランチオンと同じ性質のものなり。●**精養軒** 東京上野公園内にある高等洋食店なり、位置高燥眼下に不忍池を見るを得て、眺望頗る佳なり。●**富士見軒** 麴町區富士見町にあり、遙に富士山を望見することを得るより名づけたるなり、これも高等洋食店なり。●**コック** (Cook) 料理人、庖人等を意味す。●**用を足して** 普通の用達の意にて、即ち用を辨するなり。●**威丈高** (キタケダカ) こゝにては、威儀儼然たるをいふ、されど字の本意は、居丈高にて、人と對坐などして、肩を聳し、居丈を高くするをいふ、傲然、人を見下す風なり。

### (五) 衣服着用の注意

●晴服』「はれのふくともはれぎとも。●常服』「つねのふくふだんぎ。●容儀』容貌威儀と訓してなりかたち崩れず、身體しまりて動作に筋目あるを云ふ。●風采』風標神采と熟字して、ふうがらを云ふ。●かくや』斯の様にありやと云ふことにて、服装正しくして、締めよきときは、その人の心までも、正しく締めよきように思はれて。●いとあらまほしく』最もかくありたくはしくするに、て、斯くありたく希望せらるゝこと。●蔑に』(ナイガシロ)に、即ち頓著なしに。●心劣りして』内心何となく卑しく、劣れるやうに。●爪弾き』穢きもの、賤しきものとして、忌み嫌ふこと。●傍若』(バウツヤク)傍若無人と云ふ熟字にして、無頓着なる舉動を云ふ。●いかにぞやあるは』いかにあはしくあるはなり。

### (六) 徳川時代の貿易

●後陽成天皇』人皇百〇六代の天子にして、皇紀二千二百四十七年位に即き、在位二十六年、御年四十七歳にて崩御あらせらる。●慶長五年』皇紀二千二百六十年、此の慶長年間は、小判大判を盛に作りたる時なり。●和蘭』(Holland) 普通オランダと云ひ、又 Netherland と云ふ。低地の國の義なり。面積一萬二千六百万方哩、人口四百九十三萬。●墨是哥』(Mexico) 兩米州の中間にあり。

國の南半は、熱帯に屬し、人口千三百萬あり。●呂宋』(Luzon) 比律賓群島中の最大なるものなり。マニラ市、島の西南にあり。●英吉利』歐洲大陸の西北部に在る島國にして、人口面積共に、殆んど我國に同じ、然れども其の領土は、亞歐米にありて、甚大なり。●安南』(アナム) 佛領亞細亞の内にあり、君主あるも、佛國の保護の下に立てり。●朱印』シユイン、足利氏、徳川氏の世に、命令書又は下賜の證として、幕府又は將軍、其の他大名などの用ひたる印、朱肉にて捺す故に、朱印といふ。轉じて、命令書、免許狀を指すに至る。其の黒印にて捺したるものを、黒印といひて、貴しとし、又黒付ともいへり。●五島』肥前の國長崎の西、五島列島の内にあり。●平戸』肥前國にありて、平戸島なる島にある港なり。●長崎』肥前國長崎市にあり、我國最初の貿易港なり、舊稱五港の一にして、現今長崎醫學專門學校の設あり、港内水深く、自然の良港なり。●葡萄牙』(Portugal) 歐洲最西端の一王國にして、西班牙の西にあり。●寛永十一年に、耶蘇教嚴禁』南蠻との交通、愈頻繁となり、彼我の往來從て盛なり、豊臣秀吉、かつて、南蠻寺を燬拂ひ、耶蘇教を信ずることを禁じたりしが、交通貿易は、依然たりき、家康も宗門をば禁じたりしが、貿易交通仍舊の如し、然るに交通の頻りなるにつれて、彼の西教を信ずるもの多くなり、從て不穩の行あるものを見るに至りぬ、家康、家光公の教禁は、全く、

耶蘇教が政治に關係せんとしたるに因る。元來、羅馬天主教は國政を主宰する主義ヲ取り、就中、當時隆盛なりし、ゼズイット派 (Jesuit) の主義とする所は、法の爲に國を制し、血を見るも尙顧みざるにありしを以て、其徒の日本に渡來せしもの、徳川氏に宿怨ある輩と結托して、幕府を轉覆せんと企てしは、亦自然の勢なり。慶長十六年、和蘭陀人幕府に上書して、西教信徒中、覬覦の志を抱くものありと告ぐ。家康乃ちゼズイット宣教者を逐ひて、西教を嚴禁し、其信徒有馬晴信には死を賜ひ、前田氏の臣内藤如安の徒百餘人を、呂宋島に追放す。彼の地の寺院に其跡あり。又慶長十九年に至り、關西の信徒を捕治す。此の後、和蘭人のみ通商を許され、長崎の出島に滯留することを得たり。此事は島原亂後なり。(有賀帝國史畧抄録)

寛永五年(二二八九、一〇八代後水尾帝)秋七月、先是家光聞筑紫多耶蘇之徒、命竹中重治、松倉重政、索捕之。其悔過者、蹈耶蘇像、不悛者、悉殺之。於是書耶蘇像、令筑紫人蹈之。後以爲例。石村國史畧これより前代々皆耶蘇教を信するを禁じたりしが、此に至りて特に嚴となる。寺社奉行、宗門改役、切支丹役等の官設置せらるゝに至る。  
寛永十二年秋七月(二二九五、一〇九代明正帝)令長崎、禁交趾占城呂宋等互市。先是外船隨便泊西海諸港。至是、以嚴禁耶蘇教、故皆停之。(石村國史畧)

寛永十三年冬十一月、是歲那勿蠟國主來長崎、唱耶蘇教、捕而誅之。逐南蠻人居長崎者二百八十七人於阿媽港。又慮其作亂、令大村純信備之。而禁諸國商船、御朱印船のこと之。往外蕃。先是、聽廣東、東京、太泥、臺灣、東浦塞、暹羅、阿媽港、六昆等貿易。商船至者、歲九隻。至是皆禁之。(同上)

以上によれば、耶蘇教の嚴禁といふは、五年のこと、互市を禁じたるは十二年のこと、外行を禁じたるは十三年のことなり。本文に十一年とあるは記憶の誤によるか。

●島原の亂 初め小西行長、肥後を領し、深く天主教を信す。關ヶ原の役に行長、大阪に與し、所領を沒收せられ、その領天草島を、肥前唐津の城主寺澤某の領とす。行長の遺臣竊に幕府を怨み、又天主教を再興せんとし、深く教徒と結托す。時に天草に神童あり、益田時貞といふ、書を讀み字を善くし、妖術に通ず。或は鳩を掌に据ゑて、卵を生ましめ、或は雀の竹にとまれるまゝ、其の枝を斷りて、人に示す。遺臣等時貞を以て、耶蘇の再生なりとし、宗門再興の期至れりと稱し、黨類を集む。應ずるもの三萬五千人、一部は島原に渡りて、原城に據り、時貞を將として、勢甚猖獗なり。時に寛永十四年十月なり。島原の新領主有馬直純、元之を領す。君臣共に耶蘇教を信すといふを以て、日向に徙さる。松倉勝家江戸に在り、留守の家臣制すること能はず。天草の城代寺澤忠高の家臣も、また頗る

困窮す。大阪城代、まづ豊後府内及び近國諸藩の兵を發して、之を救はしめ、而して後、之を江戸に報す。家光、板倉重昌を遣はし、肥前肥後筑前の兵を將ゐて、討伐せしむ。賊善く拒ぎて、城拔けず。重昌陣没す。此に於いて、更に松平信綱を遣して、之を討す。十五年二月遂に平く。紀元二二九八年、有賀帝國史畧爾來教禁益嚴、遂に御禁書の制あるに至る。

●蘭人をして居らしめ云々』和蘭人ヤンヨース、家康に禮遇せられ、邸宅を賜り、今の日本橋區八重洲町又譯官ともなる。蘭は耶蘇新教の國にして、信教の自由を唱へ、ゼスイト派と同じからず。蘭人之によりて、ゼスイト派の非を上言し、他の貿易國舊教を奉ずるものを追放し、己れ獨り貿易國たらんとせり。島原の亂、先づ之を告げたるものは、蘭人なり。此を以て蘭人のみ、永く貿易を許され、出島に居りし葡萄牙人等は、追放せらる。當時、蘭、英が海上にその權力を振張し、班、葡等は漸次衰へたるも、注意を要すべきことなり。

●元祿元年』皇紀二千三百四十八年。 ●靈元天皇』人王第百十一代にして皇紀二千三百二十三年より、全四十七年に至る。二十五年間御位に在らせられたり。御年七十九歳にて崩御。 ●寛文十一年』皇紀二千三百三十三年にして、此年延寶と改元せらる。 ●長崎奉行』ナガサキギヤウ、長崎市街を管し、支那、和蘭人貿易の事を知り、兼ねて海防を掌る。文祿元年秀吉始めて長崎奉行及び代官を置く。奉行とは種

職の長の稱、勘定奉行、旗奉行など、又地方官の長の稱、町奉行、郡奉行、伏見奉行等。 ●私販』(シハン)官の手を経ずして、私に竊かに賣買を爲すことなり。

### (七) 徳川時代の貿易(二) ●貞享二年』皇紀二千三百四十五年。

●銅額』かねのたか。 ●東山天皇』諱は朝仁、靈元帝第四の皇子、天和四年禪を受け、寶永六年位を皇太子に譲りて崩す。壽三十五、在位二十五年。 ●嘉永六年』皇紀二千五百十三年。 ●浦賀』相模國にありて、横須賀軍港の南方數里にあり。兩三年前ペルリ來航の碑をたつ。 ●宇漏生』(Prussian)現今獨逸聯邦の一、プロシア王國にして、セルマン帝國の盟主國なり。 ●瑞西』(Switzerland)四面海なき山國にして、アルプス山麓にありて、佛、獨、奧、伊の諸國に圍まる。人口三百萬あり、最も工業の發達せる國。 ●白耳義』(Belgium) 和蘭と共に、獨佛の間に介在せる、低地の一小邦なり。人口六百五十萬。 ●丁抹』(Denmark) 歐洲の北部に位し、半島及群島より成る一小國、人口二百二十萬あり。(備考) 現今我條約國數は、左の二十三國なり。

韓、清、暹羅、亞細亞、英、吉利、露西亞、和蘭、佛、蘭、西、葡、萄、牙、獨、逸、瑞、西、白、耳、義、伊、太、利、丁、抹、瑞典、諾、威、西、班、牙、奧、地、利、匈、牙、利、希、臘、歐、羅、巴、北、米、合、衆、國、墨、西、其、秘、露、伯、刺、西、爾、亞、爾、然

### (八) 日本の船標

丁共和国(亞米利加)コンゴ自由國亞弗利加

●島津齊彬公

(ナリアキラ薩摩守と稱す。鹿兒島の藩主。文政七年、將軍家、齊に謁して、偏名を賜る。天保五年、少將に任せらる。嘉永五年、封を嗣ぎ、安政五年卒す。年五十。齊彬國政を視る。數年に過ぎずといへども、國事を愛ひ、維新の大業を助けたること少からず。

●水戸 常陸國水戸市、關原役後、徳川家康その子信吉を封じ、相繼ぎて明治維新に至る。

●尾張 水戸と共に、御三家の一にして、家康その子義直を封ず、後相繼ぎて明治維新に至る。

●宇和島 伊豫國にあり、伊達政宗の子秀宗、此地に封せられて、十萬石を領す。後相繼ぎて明治維新に至る。伊達三家の一なり。

●閩老 (カクヲウ)老中の異名にして、徳川幕府の職官の名なり。

●阿部伊勢守 名は正弘、徳川幕末の老中なり。嘉永年間、米使來朝し、要請する處あり。正弘、水戸烈公を起して、幕議に參せしめ、大に國事に務む。

●攘夷の論 維新以前、嘉永の始め、外國の船舶我國に來りて、貿易を爲さんと乞ふ。この時、此等外人をして、上陸せしめずして、打攘はんとの論起れり。

●御腹按 腹稿といふに同じ思想には、既に十分結構せられたれども、未だ文章としては、あられぬ草稿、草案。

●安政二年 皇紀二千五百一十五年。

●市木四郎 不明。

●つばら 委曲の義、詳に同じ。

(備考) 三重縣人、藤堂良駿といふ人の、日章旗といふ題の詩に、風旗閃閃、簇紅輪、日出之邦、祝典新應、被文明、歐國、艶家家、五百萬金春とあり。注に、いはく、聞有英人酷賞本邦旗章者、賦曰、以五百萬元換之と。

### (九) 列國軍の北京救援

清事變の概略を説明するを要す。

此文を講ずるには、先づ豫備に於て、北

北清事變の起は、支那に義和團といふものありて、一種の宗教を奉じ、大なる團體を成し、遂に耶蘇教徒と争ひ、外人を放逐せんとしたるを、支那政府の陰に之を援けたるによりてなり。白河の砲臺は、兵備をなし、天津と北京との交通は絶え、天津の領事館は襲撃せられ、北京の公使館は全く圍まれ、聲息通せざること月餘。各國相謀り、之を救ひ、清國の亂を鎮定せんとし、遂に太沽の砲臺を取り、天津城を占領し、北京を占領し、天子陝西に走る。清國遂に各國に謝するに至りて、事漸く終る。

抑支那の會匪に、義和、哥老、大刀、小刀、白蓮、維新などいふありて、咸豐、同治年中、咸豐元年は我が嘉永三年、皇紀二五一、内外多事、海内騒動し、募兵益多くして、游民填充せしより起れりといふ。義和團は、その起原、遠く、乾隆年間、乾隆元年是皇紀二三九六、元文元年にありて、白蓮會の支流なりといふ。拳棒を練習し、道を講じ、神靈を我が體に

附し呪詛を以て砲彈を避け、槍劍を防ぐべしと信せり。その信徒の中には、祖師、大師、二兄等の名目あり。かつて嘉慶年間、嘉慶元年は皇紀二四五、六、寛政八年、これを嚴禁し、又剿討の使を發したれども、殄滅に至らずしてやむ。近來耶蘇教の隆盛となるに従ひ、團徒は強固頑陋なる方法を以て、之を防がんと企て、國內の保守黨政治と結托して、排外の目的を達せんとしたるより、此の騷擾は起りしなり。尙、次卷の籠城日記の課を參看すべし。

●北京 是支那帝國の首府にして直隸省にあり、順天府、京師、或は燕京とも稱し、住民百七十萬あり。京城は高壁を繞らし、十二の城門を設け、内に帝室、禁苑、諸官衙あり、各國公使館も亦た此にあり。●銃眼 城中より、敵兵に向ひて、銃を放つとき、城壁の穴より、放つべく穿ちある穴を云ふ。

## (一〇) 洋學の興隆

●阻遏 (ツアツ) へだてと、ひるなり。●徳川吉宗 (在職は、皇紀二三七六、享保元より、二四〇四、延享元まで、二四一一、寶曆元、死、徳川八代の將軍なり、紀伊光貞の第三子、寶永六年、紀伊の封を襲ふ。正徳六年、將軍家繼薨じて嗣なし。老臣議して、吉宗を迎へ立つ。大に政務を改革し、徳川中興の英主と稱せらる。●西川如見 (ニシカハヨケン) 名は忠英、長崎の譯官なり。求林齋と號す、長崎の人、少

にして天文の學を好む。享保九年、七十七歳にて卒す。皇紀二三八四。●通事 (ツウジ) 翻譯官、通譯官。●西善三郎 長崎通事たりしといふ。外、生卒年代凡て明ならず。但し西を姓とする儒員、醫員は多し。●吉雄幸作 同上、但し、吉雄圭齋といふ人なり。此人は、本邦に種痘を行へる最初の人なり。●青木文藏 名は敦書、昆陽と號す。文藏は其通稱、武藏の人、幕府の儒官なり。世呼で甘薯先生といふ。二四二九、明和六、死。●野呂玄文 醫師なり。名は實夫、元文はその字、伊勢の人なり。年二十にして京師に遊び、山脇玄修の門に寓して醫を學ぶ。●中津の藩醫 豊前國にありて、奥平氏十萬石の藩なり。●前野良澤 中津藩の醫なり。年四十にして、青木昆陽につき、蘭語を研究す。著すところの書多し。享和三年十月年八十一にして歿す。明治廿六年特に正四位を贈らる。墓は東京池之端慶安寺にあり。●甫筑 (ホナク) 桂川甫筑は、蘭醫にして、多紀元簡の從子也。桂川甫周の爲めに、養はれて子となり、其の妹女に配す。文化二年擢用せられて、幕府の侍醫となる。文政十五年五月歿す。時に年六十一。●甫周 蘭醫にして、甫三の子、醫を以て幕府に仕ふ。享和六年六月死す。年五十九、著すところの書多し。●杉田玄白 和蘭外科醫、甫仙の子なり。世々小濱藩の醫員なり。文化十四年四月疾を以て歿す。時に年八十五。●小濱侯 小濱藩は、福井縣若狹國にあり。一小港にして、若狹塗を以て名

あり。藩侯は酒井氏にして、十萬石の城主なり。●大槻玄澤』名は茂質、字は子煥、磐水と號す。仙臺の人なり。父、醫を以て一關侯に仕ふ。年十三、建部清庵に從ひ、遂に江戸に出で、長崎に遊び、蘭學に精通す。天明六年、仙臺侯の侍醫となり。文化八年、幕命を受けて蘭書を翻譯す。文政十年、死す。年七十一。●銀二十枚』銀四匁三分を銀一兩とし、銀十兩を銀一枚とす。●文政』皇紀二千四百七十八年より、九十年迄にして、文政十三年、天保と改元す。●天保』皇紀二千四百九十年より、二千五百〇四年迄にして、天保十五年、弘化と改元す。●青地林宗』江戸の醫家なり。松山侯の侍醫、快庵の子。蘭學を學び、蘭方を以て、一家を興せり。天保四年、二月、疾を以て、歿す。年五十九。●安岡玄眞』又宇田川玄眞と云ふ。安岡は、その本姓にして、宇田川玄隨の養子となる。蘭醫にして、津山侯に仕ふ。伊勢の人。幼にして、醫を好み、江戸に出で、玄隨に學ぶ。天保五年、十二月、歿す。生六十六。●宇田川玄隨』津山侯の侍醫、道紀の子なり。年廿五にして、和蘭の醫說を學ぶ。寛政九年、十二月、歿す。年四十三。著すところの書多し。●醫範提綱』醫學上、要用なる大體綱領を書ける書物なり。●宇田川榕庵』(ヤウアン)江戸の人。本と大垣の醫員。江澤養樹の子。後出で、宇田川榛齋(玄眞)の嗣となり。津山侯の侍醫となる。善く洋書を讀み、かつて化學、植物學を翻譯す。弘化三年、死す。年四十九。●舍密開宗』(セイミカイ

サウ)化學の書物の名なり。●植學啓源』植物學の書物の名なり。●箕作阮甫』(ミツクリゲン)津山侯の侍醫、大庵の子。長しで、蘭醫を學ぶ。文久二年、櫻んでられて、幕臣となる。明年、六月、歿す。年六十五。●泰西春秋』泰西は西洋諸國の意。春秋といふ孔子の書きし、曆史に模して、自己の書きたる西洋歴史に、泰西春秋なる名を附せしものならん。●八絃通誌』(ハッコウツウシ)西洋の地理に關する書物の名。●省吾』(セイゴ)箕作、阮甫の義子なり。仙臺水澤村の人。江戸に來り、阮甫に從ひて、蘭學を受け、醫術を修む。阮甫其才を愛して、嗣となす。●九段坂』(クマンザカ)東京市麴町區にあり。此坂上に九段公園ありて、其内に靖國神社あり。●文久』皇紀二千五百二十一年より、二十三年にして、文久四年、正月、元日より、元治と改元す。●護持院原』(ゴチインガハラ)東京市神田區にありたり。今の宮城一ツ橋見、附外より、神田小川町邊迄ありし、廣き原にして、今の錦町表、神保町邊一帶の地を云ふ。●帝國大學』東京市本郷區、舊加賀侯の屋敷中にあり。文科、理科、法科、工科、醫科、農科等の、分科大學あり。此内農科は、東京府下駒場にあり。

(一一) 讀書に適したる時

●ウキテンハツ』Wytenpach Da  
niel (1745—1820) 伯林の人。一七七一年、アムステルダム大學に教授となり、希臘語を教



へ、一七七七年哲學を講し、一七九九年修辭學を授け、一八一六年其職を去る。アルタークの道徳論を刊行し。『A Life of Runken』を著す。妻ヨハナ、ガリーエンの婚せしはウイテンバッハの七十二才の時にしてウキデンバッハの死後(巴里にて)その妻ヨハナは、マーブルグの推舉により、一八二七年、哲學士の稱號を與へらる。その著書若干卷あり。●語にいはく。佐藤一齋の語に、書を讀まんと欲して、讀むべき時を求むるに、一生終に讀むべき時なきなりとあり。又本居宣長翁歌に、をりくは遊ぶ暇のある人のいとまなしとて書よまぬかなといへるなどあり。なほ他にもあるべし。●傾注』(ケイチユウ)かたむけ注ぐと訓し、茲にては専ら意を讀書にかたむけ、一念に心を注ぐとなり(一二) **博物館** ●影響』影の形に隨ひ、響の聲に應ずる意にして、利害關係の及ぶこと。●回顧』ふりかへりて過去を顧みること。●鼓舞』人心にはづみをつけ、動かしをだてることにして、此にては美術の盛になるやう、はづみを附けて、引き立てしむるを云ふ。●殖産致富』(シヨクサンチフ)民の産業を増殖せしめ、富を致すを云ふ。●サウスケンシントン』South-Kensington。●意匠』趣向又は工夫などの意なり。●圖案』圖取安排を云ふ。●典範』(テンバン)大體の則るべき模範を云ふ。典型模範の意。●訂盟諸國』盟約を訂結せる諸國にして、條約國に同じ。●趨勢』(スウ

セイ)趨き向ふところの形勢を云ふ。●彈丸黒子大』ハジキダマヤホクロの如く、小さなりといふ意、彈丸黒子之地などいふ。●ブリタニッシュ博物館』(British)即ち譯して英國博物館と云ふも可なり。千七百五十三年の建築に係る。●ルーブル、リュクセンブルグ』ルーブルは、十三世紀前後より、佛國の宮城たり、一七九三年に至り、其内部の大部分は博物館となれり。リュクセンブルグも、元一宮殿たりしが、即ち一六五一五年より二〇年に至る五年デプロッセが、マリアデメチナの爲めに建てたるものなりしを、大革命後、博物館となれり。●グナカノ』ワナカン宮城中に在りて、ジュリアス二世の創始に係る。●里昂』(リオン)佛蘭西の大都會人口四十七萬、絹布製造業の盛なること世界第一なり。●伯林』(ベルリン)逸獨帝國の首府、人口百七十萬餘、世界第三位の大都會なり、現今世界學術の中心と稱せられ、有名なる伯林大學此にあり。綿布、麻布、鐵器の製造業盛に行はる。●羅馬』(ローマ)伊太利の首府にして、人口四十七萬と云ふ。此府は古の羅馬帝國首府の跡なれば、往昔文華の遺蹟多し。●フローレンス』Florence 伊太利の以前の首府にして、マスカニーの有名なる町なり。●ヴェニス』アドリヤチック海の群島中にある、有名なる港のあるところなり。

(一二三) **博物館** (三) ●分科博物館』分科とは、繪畫彫刻、工藝、農業、工業商業等、

科を別にして立つる博物館を云ふ。 ●調攝』調和融攝。 ●機先を制す』人に先んじて好機會を占取するを云ふ。 ●回祿の災』回祿は支那人の傳説にある火の神の名なり、故に火災を回祿の災と云ふ。 ●災異』(サイキ)災難、天災、地異の畧。 ●腐蝕朽廢』(ラシヨク、キウハイ)保存せるもの等の年を経るに隨ひて、追々かびを生じ、或は蟲に喰はれ、或はぼろ／＼に朽ち等して、役に立たぬやうになること。 ●コスモ一世』一五一九—七四 Cosmo de medici (1510—1574) コスモ一世は、フロレンスなるメヂチ王家の人にして、有名なる投鎗隊長ギョーバンニの子なり。コスモ大王と稱せらる。資性慧敏、文藝美術を愛すると、遠祖、ローレンツォの兄コスモはメヂチ家中興の祖なり。よく國を始め、内訌外寇なからしめ、其資を投じて、文藝美術を勸奨し、フロレンスをして、文藝復興の中心たらしめ、莊麗の建築をおこし、大圖書館を創めたり。一三八九—一四六四に似たり、其敵を遇するや、冷酷殘忍なるも、亦良主たるを失はず。 ●徽宗皇帝』宋の八代の天子、我紀元一七六一、堀河帝の康和三位に即き、我一七八五、崇徳帝の天治二年禪位す。常奢侈に耽り、土木の奇巧を窮極し、加ふるに小人、黨をなせるを以て、宋室大に亂る。後遂に金に執へらるゝに至り、宋の祀中絶し、南宋起る。此間學術文藝等頗る盛隆を極め、儒學、詩文、畫等名手一時に輩出せり。 ●裴翠閣』(ヒスイカク)

●足利義政』足利八代の將軍、幼名義成、永享八年生る。此の時應仁の亂あり、京師大に亂る。義政如何ともする能はず。京師大半兵火に罹り、僅に禁内を殘するのみ。應仁十五年東求堂を東山に造り、鑄刻するに、金銀を以てす。時人之を北山の金閣寺に比し、稱して銀閣といふ。中に茶室あり、これを四疊半茶室の始とす。義政之に移り、古器丹青を弄玩す。數寄の盛なる、此時を第一とす。義政後、薙髮して、道禪と號し、道慶と改む。延徳二年正月七日薨す。年五十六。(二〇九六—一一一五)慈照院と稱す。又畫を學びて喜喜號しき。 ●君臺觀』京都東山銀閣寺の中にある一室。 ●品彙鑑賞』種々なる類の品物を集めて、色々めきゝなどして賞すること。 ●人文』人間社會の文化文明。人生の文物。 ●忍辱』(ニンニク)佛教にて説くところの語、六波羅密の一辱を耐へ忍ぶこと、此にては殊柔和のことを云ふ。 ●相好圓滿』容姿面相等の何れより見るも、非難することのできぬ圓滿なる形をいふ。 ●佛菩薩』(ブツボサツ)佛をば、大慈悲心者、一切智者等といふ。布施、持戒、辱、精進、禪、定、智慧の六のもの、悉く具足して缺くるところなし、故に佛をば又自覺覺他覺行圓滿といふ。慈悲の相、忍辱の相、其他一切の相好備はらざる所なし、即ち所謂三十二の相、八十種の好、具足圓滿せざることなし。故に相好圓滿といふ菩薩は、佛の次の階級にある聖者にて、直に佛となり得べき人。上求菩提、下化衆生の心

に充さんたる人。佛菩薩とこゝにいへるは、釋迦乎尼佛、阿彌陀佛、大日如來、藥師瑠璃光如來、文殊菩薩、觀音大士、普賢菩薩等の如し。これを、僧侶又は坊主達と譯すべからず。そは生徒の誤解を來すべければなり。●慢蓋莊嚴の僧伽藍摩』マンガイザウゴンのサンガラシマと讀むべし。慢蓋は華幔、天蓋などの佛具。莊嚴は飾り付け、僧伽藍摩は梵語サンキヤランマ衆國又は精舎と釋す寺院の義なり。●一刀三禮』イツタウサンライと訓す。古印度に毘首羯磨と云ふ者、釋迦如來の木像を刻みけると、敬意を表するため一刀を入るゝ毎に三度つゞ禮拜したりと、これをいふなり。●梵竺僊』元の歸化僧竺僊和尚の像をいへるなるべし。●韻致』云ふに云はれぬ神韻のある趣を云ふ。●在中庵』茶入の名なり。天下にたゞ一品といふを以て、其の道の人の珍重此上なしと。●後景』Back Groundの譯、美學上の語。例へば、繪畫に於いて、その主題にあらざるものなれども、依りて以てその主題の意を一層明了ならしむるもの。●時代博物館』その時代々々に依りて、美術工藝の製作物等を集むる博物館を云ふ。昨年より東京博物館にては、年二回、特別展覽會を行ふ。即ち時代博物館の一種なり。

(二四) モローの大畫

●ヴェルサイユ』(Versailles) 佛國の首府巴里を離るゝこと、汽車時程一時間のところにある市なり。次章の文のヴェルサイユ宮殿は此

の市にあり。●モロー』(Marot) (1877 現) (Franc Dramatic Author) ●普佛戦争』一八七〇起る、歴史を見べし。此時北白河宮獨逸に御留學中。●マクマオン』(Macmahon Marie Edme patrice Maurice De) (1808—1893) マクマオンは、アルゼリア、コンスタンチン、マロツフの諸軍に従ひ、早くより顯はれしが、一八五七八年、再びアルゼリアの役に赴して功あり翌年伊太利の軍に、總督となりメーセンタ侯に封せらる。一八七〇年普佛戦争起るに及び、擢んで、佛の第一軍に將たり。ウオールヅに破れセマンに擒へらる戦已むや、放たれて、還り、ベルセーユの軍を率ゐて、コンミュールの亂を平げ、千八百七十二年選ばれて、佛共和國の大統領となり、任にあると七年、非改新黨、王黨に左袒せる疑をうけ、一八七九年、其職を辭し、千八百九十一年、遂に歿す。●ミシュエル將軍』(Michel Clemeuce Louise) (1833—現在) ●密集連發』兵語なり。密集隊を編制して、小銃を連發すること。●教化』教育董化の廣義となりたる語。社會教育、社會的品性陶冶、文運の進歩等を意味す。此の處にては、繪畫は、たゞ娛樂に供せらるゝのみならず、看者の性情を感奮激勵せしめて、以て社會の風教に功益をあらしむるをいふなり。

(二五) ヴェルサイユ宮

●路易十四世』(ルイ十四世) Louis 一六五三—一七一五、ルイ王は自ら政權を恣にしてより、殆んど五十年間は、非常なる專制主義を

取り、國王は無限の権力を持つるものなることを決し、百事華美を極め、苛酷なる課税をも爲し、終に佛國大革命の端緒ともなるに至らしめたり。●玉座堂』帝王の玉座のある堂。●拜神堂』天帝を禮拜する儀式を行ふ堂。●水晶殿』殿堂の裝飾に、皆水晶を用ひたる建物。●戦勝殿』凱旋の紀念に建てたる宮殿。●皇后階段』皇后の玉座を設けあるところのきだはし。●使臣階段』外國よりの使節の臣などの列席するところのきだはし。●奈翁浴室』有名なるナポレオン一世にして、千八百〇三年、八月佛國民より撰ばれて、終身大統領となり、千八百〇四年に至り、全國民の投票を以て、佛國皇帝に選ばれ、巴里に即位式を挙げたり。後大に勢力を得て、威を歐州諸國に振ひぬ、各國は是より漸くその跋扈を惡み、同盟して佛國を攻め、遂に巴里を圍みて、奈翁をして帝位を辭せしめ、之をエルバ島に流す。後奈氏はエルバ島を遁れて不意に佛に上陸せり。茲に於て奈氏の恩顧を受けたる多數の將士は、之を擁して巴里に入り、再び帝位を稱へぬ。茲に於て列國驚きて大軍を集め、大に戦ひて之を破り、再び帝位を剝ぎ、セントヘレナに流す。後六年を経て、千八百二十一年六月五十二才にて死す。

●マリヤアントネット』(Marie Antoinette)(1755—1783) マリア、テレザと、フランシス第一世との間の第四女、ルイネ第十六世の皇后なり。皇紀二四一五、寶曆五、一二四五三、寛政

五、革命黨のために絞首せらる。●光彩燦然』光輝色彩の美が、目のまばゆくなる位にきら／＼とせるを云ふ。●封建時代』諸侯を各所に置きて、その地方を治めしめ、朝廷はその諸侯を統治して國を治むるを封建政治と云ふ。●王室式微』朝廷の權威頹微振はざることを云ふ。●跳梁』(チャウリヤウ)跳梁跋扈と熟す。●風潮』氣風の潮流にして、その時代等に一貫せる傾向を云ふ。●王權回復』諸侯跳梁跋扈して國王の權利を蹂躪するに至りたりしを、その權利を回復すること。●君臨』君として天下に臨むこと。●霸權』霸王の權にして、即ち自ら王となりて、霸道の政を行ふ所の權力を云ふ。●榮華』(エイグワ)榮えて映あること。●秦皇阿房』秦の始皇帝六國を合せ、天下を統一し、茲に戦勝の餘威を以て、一大宮殿を阿房に建つ。阿房は舊地の名なり。宮成りて、未だ更めて名づけざるに、始皇暴病に罹りて死し、國再び亂れて、宮毀たる。故に天下只だ阿房宮と云ふ。●佛國大革命』歴史に就いて見るべし。

(二六) 上野の公園 ●薄にふけし武藏野の月』(ヌ、キ)武藏野は今の埼玉縣の一部より東京へかけて附近等の庶野をさしたるもの、勿論往昔太田道灌が江戸城を築ける以前の状態を云ふなり。「武藏野や草より出て、草に入る月」といふ句あり。●摺鉢山』(スリハチャマ)上野公園の東南部にある築山の如き小高き處。

●元祿時代花見の圖』元祿の年號は皇紀二三四八年以後十六年間に於て、殆んど今より二百餘年前なり。風俗奢侈に流れ、文學美術等は、大に發達したりし時代なり。●不忍池』(シノバズイケ)上野公園の邊にあり。周圍半里餘、池中蓮多し。小島あり、辨才天を祠る。●遙けき水』見渡すかぎり池水のひろくとしたるなり。●根岸』(ネギシ)下谷區内にして、上野公園の裏手にあたり、程遠からぬところ、其界限を總稱して根岸と云ふ。●笹の雪』絹にこしたる豆腐の、淡きによりて笹の雪と名く。そを賣れるよりやがて其家をも笹の雪とは呼びなせり。●入谷の朝顔』(イリヤ)下谷區内にあり。上野公園を距る事、十町程、朝顔を盛に培養するを以て名高し。●山王臺』(サンワウマイ)上野公園中の東南の一隅、眺望佳なるところ、茲に西郷隆盛の銅像、及彰義隊戦死者の碑あり。●いてふ』(銀杏)山王臺西郷銅像の傍に、大銀杏あり。●うなる』兒供のとまり。●西郷の銅像』翁が郷里薩摩に歸臥して、後、犬をひきて野外に出でたるところをうつしたる銅像なり。

### (一七) 兒童の公德

●累々』(ルイルイ)かさなり合ひて多くある貌。  
●腕白盛』(ワンバクザカリ)いたづらざかりなり。

### (一八) 言語の用法

●世辭』(セジ)世間のつきあひにつきて、或は個人の交際について親愛を、われより示すことばをいふ。轉して追従するをもいふ。●佞辯』(ネイベン)人におもねりへつらふ言を云ふ。●けぢめ』區別なり。

### (一九) 女子書簡文の起源

●平安朝』桓武天皇、都を奈良の舊都より平安の新京(今の京都)に移させ給ひしより後の或時代を稱するに於て、即延暦元年より、安徳天皇の年時代に至る四百餘年間を指す。●竹取物語』源順村上圓融朝頃の人(の)作なりと傳へらるれど、明ならず。物語の源は、印度の神話にして、轉じて我國に傳はれるものなりとも云ふ。其の書の趣意は、竹を取る翁竹の中より美少女を得、之を育せしに芳名四方に喧傳して、幾多の貴紳之を獲んとて、苦心せしも、終に其の効を奏すること能はざりき。後、美人は、天使に迎へられて月宮に還りたりといふなり。●室町將かくや姫』竹取物語の主人公にして、即竹裡より生れ出でたる美人なり。●室町將軍時代』足利尊氏は頼朝以後の覇業を繼ぎ、幕府を京都に開き、鎌倉に管領を置きたり。然れども尊氏、義詮二代の間は、戦亂相踵き、幕府の基礎未だ定らざしが、義満に至り天下漸く治まり、始めて幕府を室町に定めたり。これより足利氏の滅亡迄を、室町幕府

時代と云ひ、特に明德四年より、天正元年に至る百八十年間を指す。

(二一〇) 母に送る書(一)

●大高源吾 名は忠雄、子葉と號す。淺野侯に

事へて、中小性と成り、金奉行を兼ね、淺野侯長矩自盡の後、姓名を變して、脇屋新兵衛と稱す。俳諧を善くし、茶事好む。義典敵と思へるの愛する茶人羽倉齋に出入して、敵狀を探り、諸士と共に遂に報復を行ふ。元祿十六年四月死を賜はる。年三十二。なほ三の巻を見よ。 ●士の道 武士道の義にして、武士道は、遠く王朝時代より形成せられ、藤原氏時代より、鎌倉時代を経て、徳川氏時代に至りては、最も發達し、その内容、忠孝、剛勇、廉潔、慈善、節操、禮讓等の諸徳を具備して、一見其の性質を明め難きに至れり。而して徳川時代にありて、最も武士道を鼓吹したるは山鹿素行にして、赤穂四十七士の如きは、みな素行によりて、武士道の教育を受けたる人なり。その義舉のときも、畢竟武士道の煥發に外ならざるなり。今、士の道と云ふは、忠義、節操、廉耻等を重んずる士たるもの、履むべきみちを云ふ。 ●御側近、御奉公 大高源吾が、藩侯淺野長矩に仕へて、中小性膳番元方、金奉行、腰物方などの役をつとめたればなり。 ●相手 (アヒテ) 吉良上野介義典(ヨシナカ)を云ふ。 ●無念至極 ぐちをしきこと此上もなきの意、殘念至極と全じ。 ●仔細なく 何の滯もなく、事柄もなきの意、いさこぎなしに「文句をいはずにな

どの意あり。 ●大學樣 淺野長矩の弟長廣を云ふ。長矩の死を賜はると同時に、其の

播磨の領三千石を收めらる。後寛永七年、安房の田五百石を賜ひ、其祀を存すと云ふ。

●殿様の御跡 長矩侯の御跡の義にして、赤穂領地の幾分を下されて、其家の斷絶せざるやう跡を立てることの意。 ●品も付きて (シナ)もシナはシルシといふに同じ

東京の方言、情狀酌量等の廣き意、色をつけるともいふ。 ●出家沙門 (シユツケシヤ

セン)父母の家を出で、全く六親眷屬を離れて、佛門に入り、修業をする僧侶のこと、沙門は梵語、勤息の義(Shakamana)の略、善を勤め、惡を息むる人即僧を云ふ。

(二一一) 母に送る書

●その筋 官府政治の當局。 ●下知 (ゲヂ)上よりして下さる、御指圖のこと。 ●天晴 (アツパレ)古言あはれの轉じたるなり。讚美

驚歎に發する感動詞。 ●幸右工門 小野寺秀富の通稱なり。大高源吾の弟。 ●九十

郎 九十郎は、岡野包秀の通稱なり。母は源吾の姉なれば、九十郎は即ち其甥なり。 ●閻魔の金札 (ミンマ)佛經に云ふ幽界の長官。 ●人の死後 其の生前の善惡を判して、賞罰を加ふと云ふ。閻魔、閻羅、閻魔羅、梵語なり。金札は手形券の意。

●愛らしき子

此の歌は、學のために、都などに上せたらん愛子を、父母の頻りに思ひたまふをうたへ

るなり。此を課すに時は、父母の子を思ふ情を述べて、孝の根本概念を與ふべし。  
 音信絶えて、はや三月にもなりぬ。昨日今日夕風の特にさむきをおぼゆるに、いとしき  
 わが子は、今如何にかあらむ。いたつきなきか、あしきことか。なき幸多して、學ひの窓に、  
 そが友等と集ひ遊び、集ひ學べらむか。心もおぼつか。な。さて、わが子の思ひやらるゝ  
 ことかな。三月あまりも便りなし。  
 うれしきことあるにつけ、憂れたきことあるにつけ、いとしきわが子が、學業はてゝか  
 へらむ日の、いつもまづ、ゆびをられ、かそへらる。そのいつの日には、かへるべきと思ひ  
 つゝ、それをせめてものなぐさめとして、うきにつけ、うれしきにつれ、思ひ出しては、偲  
 ふとなり。『學びし』のしは助字。

諺にも、焼野の雉子夜の鶴などいひて、子をおもはぬものはなき世の習といふに、われ  
 は、殊更すぐれていとほしく思はれて、たゞなつかしくのみ思はるに、なほまた杖とも  
 頼み柱とも頼める愛子なれば、なでう忘れらるべきぞ。日毎夜毎、その行末のみ思はれ  
 て、幸ありて、はやく、すくゝと生ひたちて、歸りこむ日のまたるゝに、我子は如何に、今  
 如何にくらす、ひたすら戀ひしたはしきに。  
 かゝる親もたらん子、あゝ、いかにうれしかるべき情あらむ子等、此のうたよみて、いか

にか思ふ。涙なきは人の子にしもあらじ。

(二二二) 藤崎少尉の夫人

●熊本籠城中』明治十年の西南役の節

熊本城は賊軍の爲めに圍まれ、官軍出ること能はずして、城中に籠り居りしこと。●  
 彌縫』(ビハウ)一時假りの繕ひを云ふ。●撥荷』(タンカ)ズツクにて、製したるもの  
 て、病人、死人等を載せ、二人にて之を釣り持運ふに用ゐる道具の名。●別役少佐』不  
 明。

(二二三) 琵琶湖

●朝す』爾雅釋言の註に、臣見君曰朝とあり、この意をとり

て、河水の海に入るを朝すと云ふ。●窪下』アカと讀むべし。くぼみたるところをい  
 ふ。●淡水』鹽氣のなき水なり。その鹽氣あるを鹹水といふ。●死海』小亞細亞に  
 ある鹹水湖なり。●洞庭湖』支那にて著名なる湖なり。湖南省にあり。大さ二千方哩  
 九州と受け、八萬方哩の地を濕す。●淡海の湖』琵琶湖の事なり。アフミノミヅウミ  
 とよむべし。淡水湖なれば鹹水と區別する爲に、アハウミと云ひしが、やがて國の名に  
 も負はせて、近淡海ナカツアハウミと云ひ、更に變じて單に近江(アウミ)となりしなり  
 ●園匠』イサツ周回と云ふに同じ。●十一郡』近江の國は滋賀郡、高島郡、伊香郡、東

浅井郡、坂田郡、犬上郡、愛知郡、神崎郡、野洲郡、蒲生郡、栗太郡、甲賀郡の十二郡に分れたる。其中にて、甲賀郡を除く外は、皆湖水に濱し居るなり。●形の似たる。その形、樂器の琵琶に似たるをいふ。琵琶の解は、卷の一第四自然の音樂のところにある。●鹿首。單に頸ともいふ。細長く鹿の首の如く、くびれたるところなり。●海老尾。上方の海老の尾の如く、曲れる處をいふ。又單に匙頭ともいふなり。●竹生島。ナクブシマ。謠曲等にて名高き島なり。琵琶湖の北方にあり。周回二十六町。其最も高き處は水面をぬく事六十尺なり。東方に入江あり、舟を泊するに便なり。●大津。古の滋賀の都のありしところなり。今市制を施き、大津市と稱す。滋賀縣廳を置き、近江國一圓を管轄せり。京都を距る約三里。●覆手。胡琴教線に「し」といふ端入在之とあり。●吉祥天女。辨財天のことなり。略して、辨天ともいふ。印度の女神なり。辨舌の才を守り、又、智慧の福を與ふといふ。●三千世界眼前盡。源平盛衰記經正竹生島に詣る條に、昔都良香と云ひし人、此島に詣てつゝ、湖水遙かに見渡して、三千世界眼前盡と詠じ給ひたりければ、權現忽ちに、十二因縁心裏空と付け給ひたりけるも、いちじるしくぞ貴き、云々とあり。●都良香。ミヤコノヨシカと訓む。元慶三年、年三十六にて卒す。古今集物名の部におき、火の題にて詠みし歌あり。●湖心。湖の中心なり。●鹽津。シホツと訓

ひ。伊香郡にある村なり。●清洲。セイレイツと訓む。キヨクツメタキとなり。●氷魚。其形、白魚に似て、小さく色白しといふ。又冬期捕ふるところの、淡水産の魚の總稱なりともいふ。●鮠。爾雅釋魚の註に、今鱒魚似鱒而大とあり。アメノウチといひ、また「アママス」といふ。大なるは二尺に至るもありとぞ。●八勝。石山、比良、唐崎、栗津、堅田、三井寺は滋賀郡にあり、矢橋及瀬田は栗太郡にあり。●瀟湘の八景。瀟湘は支那洞庭湖の北にある二水の名なり。八景とは、洞庭湖の中にて、最も景色の勝れたる處を、八ヶ處撰びたるなり。即ち、瀟湘の夜雨、山市の晴嵐、遠浦の歸帆、煙寺の晚鐘、漁村の夕照、洞庭の秋月、平沙の落雁、江天の暮雪、これなり。

(二四) 舊山水を想ふ

●奈良。大和國奈良市、奈良縣に屬す。平城帝以後七十餘年の帝都、今も名所舊蹟多し。平城とも寧樂ともかく。●瀧田川。(タツタカハ)大和國生駒郡瀧田村の邊を流るゝ、生駒川を指して云ふ。下流は大和川に合す。歌の名所なり。古今集に、立田川もみち亂れて流るめり、わたらば錦なかや絶えなむなどあり。●生駒山。イコマヤマ、河内國河内郡の東部にありて、大和國生駒郡に跨る。辻子越、暗峠、善根寺越などあり。善根寺越は、古の孔舎衛坂の跡なりといふ。この山、古くより歌によみ入れられたり。萬葉集に、妹かもと馬に鞍して射駒山うち越えくれば、もみ



ぢちりつゝなどあり。●春日山』カスガヤマ、奈良市の東にあり。平城京の鎮護の山とす。古より、神靈の宅と稱し、嚴に伐採を禁ず。一山鬱蒼として、風景頗佳なり。萬葉に「物おもひかくろひ居りて今日見れば春日の山は色づきにけり」とあり。又、古今には、峯高き春日の山にいつる日のくもる時なく照すべらなり」とあり。又、三笠山、御蓋山なども稱す。形、笠に似たるを以て言ふといふ。萬葉に「かりがねのさわたりしよりかすがなるみかさの山はいろづきにけり」とあり。阿倍仲磨の「青海原ふりさけ見れば春日なる御笠の山にいでし月かも」など有名なり。此の山の附近一帯の野を、春日野といふ。此の山の麓に春日神社あり。和銅二年、藤原不比等、藤原氏の氏神として祭れるところ。祭神は、武甕槌命、伊波比主命、天兒屋根命、比賣神命等なり。春日明神と稱す。神殿南面し。本殿、拜殿、樓門、前殿、廻廊等あり。興福寺の鎮守たり。明治四年、官幣大社に列せらる。●猿澤池』サルザハノイケ、興福寺の藤原氏がその一門の繁榮を祈るために建てたるもの。南崖下、登大路の北側にあり。率川の水の湛ふるものなり。大和物語にいふ。

昔奈良の帝に仕へ奉りける采女あり、帝召しけるが、後復、召さざりければ、限りなくうしと思ひて池に身を投げてけり、帝は、

猿澤の池もつらしなわきもこが玉藻かつかは水そひなまし

と詠みたまひ、慕はせさせたまふ。

●春日の社』春日山の條にいへり。●聖武』(シャウム)四二代文武帝の皇子、養老八年四五代の位に即き、天平勝寶八年五月崩す。壽五十六、在位二十六年なり。(二三八四、一四〇八、在位) ●孝謙』四六代、及び四八代(重祚)女帝、聖武帝の皇女、一四〇八、天平二十年讓を受け、天平勝寶と改元し、一四一八年、天平寶字二年、位を太子大炊王に讓り、削髮して法基と號す。一四二四年、天平寶字八年、帝大炊(淳仁帝)を廢して、淡路に流し、自ら重祚す。一四二九年、神護景雲四年八月崩す。壽五十三。前を孝謙といひ、後を稱徳といひ、或は孝謙稱徳と合稱し、或は高野天皇といふ。●奈良の都』竹外の詩にいはく、半空涌出兩浮圖、更有伽藍俯九衢、十二帝陵低不見、黑風白雨滿南都、芭蕉の句にいはく、奈良七代七堂伽藍八重櫻、と、懷舊の情、誰か溢れざるをえん。●室町』永和四年二〇三八、足利義滿新館を立て、四足門を建て、皇居に擬し、花御所と稱し、又室町殿と云ふ。義教之を増築し、爾後七十餘年間、足利將軍の府邸となりしが、文安六年之を毀ちたり。その趾は今の京都市上京區室町通にありと云ふ。●三條』平安の坊の名なり。今の京都市寺町通以西の三條通なり。●五條』京都市下京區の東西に通せる五條通をいふ。●保元』皇紀千八百十六年より十九年に至る四年間にして、保元の亂のありし

ときなり。●平治』皇紀千八百十九年より二十年に至る一年間にして、平治の亂のありし時なり。●鎌倉時代』皇紀千八百四十六年より千九百九十三年に至る百四十九年間を云ふ。即ち頼朝鎌倉に幕府を開きてより、新田義貞の義兵を擧げて、鎌倉を攻め、北條氏の遂に亡びたる時迄なり。●南北朝』皇紀千九百九十四年、即建武元年より、全二千〇五十二年迄にして、後醍醐天皇の中興の新政より、大内義弘吉野に赴き、兩朝和睦の事を奏し、遂に合一せるに至りし迄五十七年間を云ふ。●足利の末世』室町時代の末期、即皇紀千二百三十三年(天正元年)以前にして、群雄漸く四方に起りつゝありし頃なり。●信長』足利幕府の末世、尾張より起り、將軍義昭を逐ひて、足利氏を滅ぼし、覇業を爲して、威名漸く盛なりしも、遂に逆臣明智光秀のため、に弑せらる。●秀吉』信長の光秀に弑せらるゝや、秀吉軍を將ゐて光秀を撃ち之を誅す。之より諸方を平定し、遂に全國を統一せり。●叡山』(エイザン)比叡山の事にして、近江國にあり。●蟬蛸』(ラユウ)かけろふの事なり。朝に生れて夕に死する命の短きものゝことを述ふる意なり。淮南子に、鶴壽千歳、以極其遊、蟬蛸長生而暮死、而盡其樂とあり。●營々』(エイ)醒醒として、こせゝゝなし居る意。

(注意) まづ兒童の歴史的觀念を明瞭にせんことを要す。

(二五)

須磨

●須磨の浦』攝津國にあり、風景絶佳の地。●畿内と山陽』五畿内五箇國の中、攝津國は山陽道播磨國と境せり、須磨の浦は、畿内より山陽道に出づる最も肝要なる場所なり。●謹慎屏居』(キンシン)一種の刑罰の名にして、閉門と云ふよりも輕し、謹慎を表し罪を謝すると。(エイキヨ)世を離れて退きこもり居ることなり。●在原行平卿』阿保親王の第二子、業平朝臣の兄なり。仁明文徳等の朝に仕へ、累進して正三位中納言に至る。宇多帝(五九)の寛平五年薨す。年七十六。和歌を善くせり。勅勘天皇の御勸氣を蒙りたるを、正史には見えず。古今の歌に、わくらはに問ふ人あらば須磨の浦に藻鹽たれつゝ、わふと答へよとなり、又光孝帝(五八)の芹川行幸に供奉し、鶴の狩衣を着て、翁さび人などがめを狩ころも今日ばかりとぞたづもなくなる」とよみて舞ひたりとて御氣色を損せりといふ。これより致仕して須磨に住まはれけるにか。●紫式部』藤原爲時の女、藤原宣孝の妻、上東院の女房となりて、日本紀の局と稱せらる。式部、才學ありて和歌文章をよくし、又夫を失ひ、貞婉を以て聞えたり。著す所、源氏物語、紫式部日記あり。●源氏物語』此れは、五十四帖より成れり。帖は猶ほ卷の如し。前編四十四帖、後編十帖を、宇治十帖と稱す。當時の上流社會の狀態を直寫して、憚らず、組織は、容姿美にして、才あり、位ある光源氏(ヒカルゲン)を以し主人公となし、許多

の男女を錯綜せしめ、多く巧に情話を説き、仔細に人情の隠微を描き、其の前編は情事の圓滿を示し、後編は人生の缺陷を寫したり。此書は平安朝文學に於ける、最高貴のものなるのみならず、我國文學上第一に推さるるを得ざるべし。とは人の多く認むる所なり。

●壽永の亂』平氏の義仲に追はれて、西海に至るや、西方の豪族之に應ずるもの多し。義仲又頼朝を討たんとせしに、頼朝之を知りて、義仲を討たしむ。義仲粟津に敗る。夫より頼朝平氏を攻め、一ノ谷を陥る。宗盛安徳天皇を奉じて、屋島に遷る。壽永四年二月、義經之を襲ふ。平氏支ふる能はずして、壇の浦に避く。義經之を攻む。平氏防戦利あらず。一門悉く之に死す。

●平敦盛』(アツモリ)一ノ谷の戦に、熊谷直實の爲に殺されたり。

●榜示』(ハウシ)こゝのは古の關屋の趾なることを表示せる碑の如きもの。

●村上天皇』人皇第六十二代、皇紀千六百〇七年より二十七年に至る二十一年間位に在らせらる。

●藤原師長』左大臣頼長の子なり。長寛三年平清盛の怒にふれて、尾張に流され、建久三年薨す、五十六。

●菅公左遷下向の舊蹟』菅原道真公の太宰府に貶せられて、其の地に赴きしとき、途中此邊にて、休息を爲したるに關係ある古蹟。

●山陽鏡道』兵庫より馬關に至る迄の鏡道を云ふ。

●一の谷』攝津國、武庫郡須磨村字西須磨にあり。源平の戦のありし地なり。

●鐵拐鉢伏』(テツカイ、ハチブセ)

●須磨御料地』須磨にある皇室所屬の地。

●紀泉の山』紀伊及和泉兩國の山。

●淡路島』瀬戸内海の東端にあり。全島別に一國を爲して淡路の國と云ふ。

●オゾン』(Ozone)阿巽化學上の語、譯して變形酸素にて、酸化作用最も劇しく、常温に於いては酸素に作用せられざる銀水銀の如きも、之に逢へば、忽ち酸化物を生ず。オゾンは、諸物質の酸化植物の營養等種々なる原因のため、に生せらるるものにして、田舎の空氣には、常に此の氣體の微量を含む。

●雜選』(ザツタツ)多く人の入り込むこと、ひとこみこみあひの意。

(二六) 海 ●恒信風』一定の季節に一定の方向より吹く風をいふ。氣候風、季節風、信風ともいふ。

●阿西亞尼亞』濠洲のことなり。

●蝦夷』(エゾ)今日の北海道のことにして、昔は蝦夷と稱せしなり。

●天竺』印度をいふ。

(二七) 音樂の効用 ●ゆくりなく』不意に、思ひがけなく。

●嗅覺』(キウカク)五官の一にして、香を嗅ぐ覺官なり。

●高雅』高尚にして、何となくみやみやかなる趣あること。

●樂易』ラクイ、安らかに樂しきこと。

●定律』正しく定れる音律にして、一定の調子なり。

●古人が云々』禮記の樂記の中にある語。

(二八) 憐むべき孝女 ●おどましくて』鈍ましくてにして、即馬鹿

氣て居つてとの意。●いたづき』疾病なやみのことを云ふ。●負ひめ』(貧目他より我が身に負ふ借財、負債のことなり。●煙の代』(ケムリノシロ)朝夕の物を買ふ代價と云ふことを美しく云へるなり。●さゝれて侍るからに』戸が閉ち鎖されて居りましたからと云ふこと。●よすが』(縁たより、よるべの意。

### (二九) 村岡の局

●津崎元矩』京都の人左京といふ。●天明六年』皇紀二千四百四十六年。●嘉永』皇紀二千五百〇八年より全十三年に至る六年間。●安政』皇紀二千五百十四年より全十九年に至る六年間。●近衛左府忠熙』(タビヒ)近衛篤磨氏の祖父なり。●水戸齊昭』(ナリアキ)寛政十二年三月十二日、江戸磯川に至る。文政己丑の年、封を襲ぎ、夫より深く國事に盡瘁し、勤王の志厚し。萬延元年八月十五日病んで歿す。烈公と諡す。●九條關白尙忠』二條治孝の末子、九條の嗣を繼ぐ道孝公の父、道實公の祖父。●井伊大老直弼』近江彦根の城主なり。中將に任せられ、後掃部頭と稱す。安政五年四月擢んでられて、幕府の大老となる。萬延元年三月、櫻田門外に於て終に刺客の爲に殺さる。●家定公』(イヘサダ)徳川十三代の將軍なり。實暦十一年六月薨す。●安島帶刀』(ヤスシマタテハキ)●京都留守居役』ルネキヤク京都所司代の留守をする役、所司代の居りし處は京都二條城なり。●鶉飼吉左

衛門』名は廣邦、水戸の勤王家なり。藩命を以て京都の留守居たり。藩主齊昭の命を領し、近衛侯を要し、攘夷決行の勅を下さんと請ふ。安政五年八月、勅下る。幕府大に驚き、處士數十人を囚す。廣邦子幸吉亦共に江戸に檻致せられ、六年八月、小塚原に斬らる。●日下部伊三次』(シサカベ、イサウジ)薩州の勤王家なり。尊王攘夷を唱へ、獄に投せられ、安政五年十二月獄中に死す。●西郷吉之助』名は隆盛、鹿兒島の藩士なり。勤王家なり。明治六年陸軍大將に任せられ、參議を兼ねぬ。十月、征韓論の起るや、議合はず官を辭して國に歸り、私學校を興し、士を養ふ。明治十二年兵を起し、九月、軍敗れて死す。後從二位侯爵を贈らる。●一橋慶喜卿』(ヨシノブ)徳川十五代の將軍にして、水戸齊昭の七男なり。天保八年江戸に生れ、弘化四年一橋家を繼ぎ、慶應二年將軍となる。●紀伊宰相』(徳川)徳川十四代の將軍なり。井伊直弼の大老たりしとき、將軍家定病重し、直弼議して、紀伊より迎へて之を嗣とす。●關老間部詮勝』マベアキカツ、越前國鯖江の城主、從五位に叙せられ、幕府の老中となる。安政年間、大老井伊直弼を輔け、吏を四方に放ち、勤王の士を捕へ、或は誅戮し、或は禁錮せり。安政六年十二月職を辭す。後朝旨により、封一萬石を削らる。

### (三〇) 村岡の局

●清水寺』(キヨミズテラ)山城國京都下京區清水坂上にあ

り坂上田村麿の建立なりと云ふ。 ●月照ツキツネ (アツシヤウ)京都清水寺成就院の住僧にして、勤王の志に厚し。終に幕府の忌む所となり、鹿兒島に走り、追捕の嚴なりしたため、西郷と共に海に投じ、西郷蘇し、月照は死す。時に安政五年なり。 ●京都町奉行キョウトウチョウヘイ 京都の人民の訴訟を裁決し、民政を總理す。 ●白洲シラス (シラス)今日の裁判所の法庭にして、罪人を引出して、吟味詮議をする場所なり。 ●公家キョウカ (コウケ)おほやけと云ふほどの意、殿上に伺候する人の總稱。中古武家政治の世の中となりてより、幕府に仕ふる武士と區別して云へる語。 ●武家ブカ (ブケ)武士の家筋、鎌倉以後公家に對して、武人の稱として用ひたり。 ●司人シジン (シカサヒト)法庭のことを司り居る人。 ●心じらひココロジラヒ 心づかひ心の用ひを云ふ。 ●藤原氏の長者フジワラノチヨウシヤウ 昔、族氏の制あり、大氏小氏あり。小氏は大氏に屬す、其後、族制亂るゝに及び、その族中、最も勢力あるものを以て、氏の長者とし、その一族の事件を支配せしむ、即ち、その氏の内にて長たる人をいふなり。終には、源、平、藤、橘の四氏にのみ給ふ例となれり。 ●大御臺所天璋院オホミダイトコロ (オホミダイトコロ)大臣、大將軍家の内室の尊稱なり。天璋院は將軍家定の配名は敬子、島津齊彬の女。天保七年十二月、鹿兒島に生れ、安政元年、近衛忠熙の養女となり、安政三年、徳川家定に嫁す。安政五年八月、將軍薨す。夫人落飾して、天璋院と號す。明治十六年十一月薨す。年四十七。 ●古稀コヒ (コ

キ七十歳のと、人生七十古來稀と云ふより來れる語。

(三二) 梅

●衡門ケイモン (カブキモン)二本の柱に一本笠木を渡したるもの、多く、隱者茶人などの住居に用ふ。 ●出師の表シュシノヒラカ 此文は文章軌範の中にあり。支那に於ける三名文の一に數へらる。諸葛孔明の文にして、此文を讀んで泣かざるものは忠臣にあらずと稱せらるゝ程の文なり。

梅林に笛を聞く

●あげまきアゲマキ 總角、上げ卷きの義古の兒供の髪の結び方の名なり。こゝにてはあげまきにゆひたる童のと。

(三三) 植物の分布

●針葉樹チンエツシュ その葉の針の如く、細く尖れるより名づけらる。瀾葉樹といふに對する植物學上の名なり。松杉の類之に屬す。 ●直江津ナホエツ 越後國中頸城郡にある港なり。 ●妙義山ミョウギサン 上野國北甘樂郡にあり。白雲、金洞、金雞、三峯の總稱なり。全山すべて岩石より成り、兀として鋒を樹てたるが如し。北麓妙義町より登る數町にして、妙義神社あり。日本武尊を祀る。奇勝を以て名あり。 ●齒輪軌道シリンキョウダウ 官設鐵道、信越線上野國横川驛より、信濃國輕井澤に至る。碓氷嶺七哩間に敷きたる、一種特別のレールなり。その構造は、普通軌條の中央に、鋸齒狀のラックと稱す

るものを設け、機關車の内部にも、又別に齒輪車を取りつく、此齒輪車は、ラックの齒を咬みつつ昇降する仕掛なり。これ獨逸のアプトシステムを採用したるものにて、日本にては、たゞ此所一箇所あるのみ。●**輕井澤驛** 信越線輕井澤驛をいふ。信濃國北佐久郡東長倉村に屬す。近年避暑の爲め、貴顯紳士、外國人等の別莊を作るもの多し。●**淺間の高原** 信濃國東筑摩郡淺間村に屬す。温泉あり。萬葉に、紅の麻葉の野良に云々とある麻葉野は、即ち此所なりと云ふ。●**鉢石町** ハチインマチ、日光町内の一町名なり。●**馬返** ウマガヘン日光町より大谷川に添ひて行くこと里餘の所にあり。日光山に登る麓なり。●**東照宮** 贈正一位太政大臣徳川家康を祀る。別格官幣社たり。●**男體山** ナシタイザン、海面を抜くこと六千六百尺、國幣中社二荒山神社あり。●**白根山** 日光湯本温泉の後にあり。温泉が嶽と並ひて前面は湯の湖なり。●**赤沼が原** 千丈ヶ原なり。●**水蘚** うさくさなり、本草に、萍一名水花、一名水蘚とあり。此文地理を以て豫備を作れ。

女子國語讀本備考書卷の四畢

女子國語讀本備考卷の五

普通教育研究會編

(二) 國民第一の心得 ●政體 各國各政體を異にす、凡そ次の如し。

君主政體 君主專制 又は貴族專制  
 民主政體 立憲君主 共和政治

君主上にありて全國を統治するを、君主政體をいふ。其の權力無上なるときは、之を專制政體といひ、憲法を立て國會を開き、人民の意見を參酌して、政治を行ふもの、之を立憲君主政體といふ。若し又君主及び數人の貴族にて、政治を行ふもの、之を貴族專制といふ。民主政體とは、最初より一定の君主ありて、人民を統治するにあらずして、人民より代議士を選擧して、國家を統治するをいふ。此の場合に於いては、君主を奉戴する代りに、大統領を選擧して、之に兵馬の大權を委ぬるなり。共和政治は、政體の最も進歩し

たるものなり。●革命』革命と改革とは同じからず。改革は其の根抵を改めざるをいひ、革命はその根本より改め来るをいふ。革命といふは、天の命を革むといふ意なり。即ち天子は天命によりて天子となるにて、天命盡くるときは、即ち他の天の命を受けたるもの、之に代るをいふ。湯既革夏命といひ、天命有周爲此君といひ、受命之君といふ。程子曰く、一日天命未絶、則是君臣、當日而絶、則爲獨夫と、革命の所以、知るべきなり。●國家の存立』國家には、人民と政府と國土とを必要とす。若し一を欠がば、完全なる國家といふを得ず。

### (二) 女子教誡

●きよら』清きこと、うるはしきこと。●くすみて』くすぶに同じく、年老いて見ゆること、質朴に見ゆることをいふ。●おいらか』おとなしき。●らうたく』愛らし可憐。●いふかひなき』賤しき身分の、取りたて、いふほどにもなきものどもは、●かたましく』心ねじけたる、頑好。●さがなし』不善、不祥。●口かまし』口やかまし。

(注意) 女大學を參看すべし。

### (三) 獨逸留學中の所感

●普國』プロシヤなり、(Prussia) 獨逸北

部平原の地に位する王國にして、その面積頗る廣く、獨逸全國の三分の二を占め、全國の人口三千餘萬。又、プロイセンともいふ。●ナポレオン一世』ナポレオン、ボナパルト (Napoleon Bonaparte) は、西洋紀元千七百六十九年八月十五日を以て、コルシカ島に生る。一匹夫より身を起して、歐亞の風雲を叱咤し、遂に佛國の帝冠を戴き、歐洲大陸の諸州、皆その威を仰ぐに至る。されどその露西亞に頓挫するや、悲運荐々に臻り、遂にエルバ (Elba) 地中海中の一小島、コルシカの隣に、縮せらる。一八一五年三月、逃れて巴里に入りたりしが、ウァルタールーに大敗して、擒にせられ、竟にセントヘレナ島 St. Helena II. (南太西洋中の一小島、アフリカの西千二百哩、英領) に流され、一八二一年五月五日歿す。年五十三、皇紀二四八一、文政四年。●大打撃』紀元一八〇六年、ナポレオンは、ライン同盟を作り、多く普國の領土を侵畧するや、普國は露國の後援を待みて、戰を宣言す。ナポレオン則ち兵を率ひて、之を討ち、エーナ、アウエルシュタットに大勝を得、進みて伯林を陥れ、此に伯林條例(大陸條例ともいふ)を發布し、大陸諸國に命じて、英國との交通貿易を絶たしめたり。ナポレオン更に進みて、普露同盟軍を破り、チルシットにて條約を締結し、露國にワルソー侯國を建てしめ、普國にエルベ河西を譲らしめ、露普兩國をして、英國と交通を絶たしめたり。これは一八〇七年の事に屬す。●ゼルマン聯邦』 German

獨乙一にセルマンといふ。この國は二十二の王國、及び三自由都府より成りたる聯邦政治の國なり。プロシヤ國王は、かねて獨逸帝國皇帝の位につき、世々其の位を繼承して、獨逸全國を統治し、兵馬の大權外交の政務等を掌管す。されど、獨逸全國プロシヤの版圖となりしにはあらず。各國の君主は、皆立憲政體を用ひて、その國に君臨し、自由都府は共和政治を行ひ、各獨立の體面を有し、たゞ兵馬の權を有せず、又外國と盟約を結ぶことを得ず。されば、プロシヤ王は、獨乙の帝位にあれども、王號を廢するを得ず。獨逸帝國皇帝プロシヤ王國國王と稱す。●盟主』普軍、頻に佛軍に勝ち、一八七一年佛軍終に普軍に降る。普王ウヰルヘルム、時にワルセーユにあり。全獨逸の王侯相議して、獨逸帝國の建設を宣言し、普王をして、獨逸皇帝の位に即かしめぬ。これ即ち獨逸國民の統一なり。次て國會を伯林に召集し、憲法を定め、普王をして世襲の帝位を踐みて、帝國の政權を總攬せしむるに至れり。●ウヰルヘルム老帝』Frederich Wilhelm I. 一千八百六十一年、年六十四を以て、普王(第七代)の位につき、ピスマルクを擢で、内閣議長とし、ロオンを陸軍大臣とし、モルトケを參謀總長に任じ、銳意軍制の改革に従事し、終に一八六六年、埃太利を討ちて、これを破り、その在來の獨逸聯邦の盟主たりし地位を奪ひ、次で一八〇七年、佛國と戰端を開きて、ナポレオン三世を擒にし、佛都巴里を圍みて、遂に

これを屈服せしめ、一八七一年一月十九日を以て、佛國ウヰルサイユの王宮に於いて、獨逸皇帝の位に即き、この獨逸帝國統一の大業を全くせり。一八八八年三月九日殂す。年九十二。(明治二十年) ●醜藏』鹽漬。エンザウ。

#### (四) 女生徒を獎勵す ●睹』見るごと、目睹。

#### (五) スエズの開鑿 ●スエズの運河』埃及(Egypt)の地中海に瀕せ

るポートセッドより、紅海の最北端なる、スエズまでの運河。全長百哩、その間三個の湖水あり。先づポートセッドよりすれば、直にメレザレ湖に入るべし。それより運河を航すること二十哩にして、ケムサー湖に出づ。更に運河を航すれば、マビッタル湖に出づべし。そこより十餘哩にして、運河つき、スエズ港に達す。西曆千八百五十四年に着手せられ、千八百六十九年に竣工す。本來は、埃及の有たりしが、土耳其戰後、財政困難のため、その株を英國に賣りたるにより、今は英國その支配權を有す。此運河は紅海と地中海とを聯絡す。其北端をポートセッド Port Sait とし、その南端をスエズ Suez とし、水面の幅五十八乃至百米、突水底の幅二十二米、突深さ八米、突也。明治二年の開通。●レセップ』Ferdinand de Kesseps 西曆一八〇五年佛國に生る。外交家なり。運河會社の社長となり、功



を以て准伯爵に叙せらる。後又北亞米利加のバナム地峽の開鑿を企てたりしが半途にして千八百九十九年死す。(明治三十二年) ●地中海 歐羅巴と阿弗利加との兩大陸間の海なり。 ●紅海 埃及と亞刺比亞との間にある扁長形の海なり。 ●歐亞弗 歐羅巴、亞細亞、亞弗利加をいふ。 ●三千年前 ト、メス三世及びラメセス二世時代を指す。ナイル (Nile) 河と紅海との間に、運河を開きしはラメセス二世なり。 ●紀元前四百年代』ギリシヤのマセドン王アレキサンダー大王の埃及征服は、紀元前三百三十二年なり。ギリシヤの盛時は、紀元前三百年代より、百年代までなり。即ち二世紀より四世紀までなり。詳にいへば、一四六年マセドン羅馬に屬せしを終とす。 ●紀元前』西暦の紀元は、耶穌基督降誕の年を以て元年とす。而して、それより以前は、逆に算して、紀元前一年十年百年等といひ、其の元年以後は、順に算して、紀元幾年と稱す。耶穌降誕は實は紀元前四年にあり。されど襲用の久しき、又改むべからず。その紀元元年は我國の紀元六百六十一年に當り、第十一代垂仁天皇の三十年に當り、我紀元元年は西暦紀元前六百六十年に當る。明治三十六年は、我紀元二千五百六十三年にして、西暦の千九百〇三年に當り、我國紀元の年數より、六百六十を減じたるものは、西洋紀元の數となる。 ●希臘 』バルガン半島の南部に居住し、西暦紀元前四百年代より、同百年代

まで、隆盛をきはめ、大なる版圖を有し、勢力歐亞弗を威壓せり。然れども、遂に羅馬のために滅さる。ギリシヤ、又はギリシヤといふは、もとローマ人の名けし所にて、希臘人自身は、自身等をヘレネース (Hellenes) といひ、國をヘラス (Hellas) といふ。それを支那人音譯して、希臘といふ。然れど我國にては、これをギリシヤとよむ。希臘にギリシヤの音あるにあらず。ヘラスは、文明人といふ義なり。羅馬 』ローマ Rome 伊太利半島に於ける人種、紀元前百年代より起りて、四方を併呑し、長く隆盛を極めしが、紀元後四百年代より衰微して、遂に滅亡するに至る。今の伊太利は、其後なり。ローマは即ち其古都なり。 ●回部 』マホメト (六百〇九年) の創めたる回々教を奉ずる種族なり。紀元六百三十二年より、六百三十九年に至る間に、マホメトの後繼者オマル、埃及を征服す。後、波斯に入り、土耳其を取り、西羅馬帝國を滅し、一時威を歐亞に振ふ。今の土耳其は其後なり。 ●ナイル 』 Nile 源をスーダン地方のウケレエ湖に發し、埃及を北に貫流し、地中海に注ぐ。アフリカ第一の大河なり。 ●ナポレオン 』千七百九十八年、佛軍の將として、埃及を征す。ナポレオン時に二十七。 ●アリー 』 Mehemet Ali 1769-1849. or Mohammed Ali. ●イスマイル 』 Ismail Pasha or Ismail I. 1830..... 埃及の大守。 ●總領事 』 外交官にて條約通商の國に駐在し、そこに在留する自國人民に關する事などを掌る領事の長な

(六) スエズの開鑿

● 纏繞』アンセウ、まとい、まつはる。 ● 累』ルキルキ、土地の荒漠たるをいふ。 ● 孜』シシ、勤勞怠らざるをいふ。惟日孜、無敢逸豫などあり。 ● 誹謗』ヒバウ、そしり、ぞしる。 ● 誣罔』フホウ、しゆる、無さを有りとして、人を害する語をいふなり。 ● 流言』リウゲン、うはき、流言、訛傳、ねなしごと。

(七) 旅行の樂

● 鄙吝』ヒリン、情欲等の賤しき心。 ● よすが』便、てだて。 ● 萬戶侯』一萬戸もある土地の大名といふことにて、大名の大なるものをいふ。

(八) 伯林書信

● 以太利ゼノア』Genoa は伊太利の北西岸にあり。地中海第一の貿易港にして、又、此國の軍港なり。 ● 異域の殊俗』異なる國の殊なる風俗。 ● 比比』ヒヒ、どれもこれも。

(九) パノラマ

● パノラマ』Panorama ● 耶蘇』耶蘇基督 Jesus Christ アウグスツス帝の治世中、猶太國に生れ、猶太の一神教に由りて、新に一教(耶蘇教)を開き、博愛主義を唱道したりしが、其説時人の容るゝ所とならず、反逆者を以て目せられ

セルサレムの郊外に磔殺せられたり。時に紀元三十二年にして、三年十二。皇紀六百六十一年、垂仁天皇三十年なり。 ● セルサレム』Jerusalem ● 千八百七十年』皇紀二千五百三十年、明治三年なり。普佛戰爭破裂の年にして、翌年和議の結果、アールザース及ロレーンの一部と、巨額の償金とを普國に興ふ。佛人の千載忘るべからざる年なり。 ● 土豚』土石を俵に入れたるもの、土俵なり。三國誌に土豚、過絶河水とあり。 ● 凱旋門』拿破翁一世の、伊埃諸國に勝ちたる紀念門なり。弓形にして、高四十メートル、幅二十メートル、奥行十メートルなり。市の最高處にあり。 ● ガンベツタ氏』Gambetta 千八百三十八年に生る。當時佛王は普軍に降りて、共和民和となり、氏は其の内務大臣たり。防禦の策を案し、自ら輕氣球に乗り、巴里の圍を出で、ツールに至り、度々新兵を募り、巴里の重圍を攻めしも、遂に圍を解くこと能はざりき。一千八百八十二年死す。 ● 諦視』テイシ、諦は明なり、詳なり、よくよく見るなり。

(一〇) 戰國時代の婦人

● 元弘建武の亂』元弘元年は、後醍醐帝の第十三年、皇紀一九九一年なり。北條高時、怒りて帝を攻む。帝笠置に行幸し、後、六波羅に幽閉せられ、更に隱岐に遷さる。楠正成、新田義貞、兒島高德等の諸豪、王に勤む。北朝の

光嚴帝位に即き、正慶と改元す。既にして、元弘三年六月、車駕再び京師に入り、光嚴帝を廢し、尋で建武と改元し、親ら萬機を統べたまふ。翌年尊氏叛し、天下再大に亂れ、終に兩主を見るに至る。南朝北朝これなり。 ●瓜生保の母 瓜生保の母は、その姓氏を詳にせず。延元中、新田義貞金崎に據る。保、弟義鑑等と、杣山城に據り、脇屋義治を奉じ、里見時成を將となし、往いて之を抜く。路に高師泰と戦ひて兵敗れ、保、義鑑、姪七郎時成と俱に戦死す。弟源琳敗卒を收めて、杣山に還る。城中の軍士多く死亡し、號哭街に滿つ。唯保の母、神色自若として、敢て威容なし。進みて義治に謁していはく、兒曹力めず、里見君をして戦歿せしむ、竊に恐る大に郎君の心を傷めんことを。幸に二子從死す。以て少しく謝するに足る。妾が家の兒輩、本と郎君のため大義を起す。苟も賊を平ぐるを得ば、千百の子姪を亡ふとも、固より悔ゆる所にあらず。三子猶在り、源琳、重照、再舉期すべし。是れ妾の哀を轉して、喜となす所以なりと。因て起ちて、義治の爲に酒を行る。士衆感激して皆自ら戦はんことを思ふ。大日本史 ●佐竹貞俊の妻 不明。 ●楠公の夫人 此書の第十卷の四を見よ。 ●山名氏清の妻 左近衛中將藤原保修の女、氏清の足利義滿に叛して、兵を擧ぐるや、氏清は山名時氏の子、功あり、陸奥和泉守となる。弟の事により、遂に義滿に叛し、一戦して殺さる。藤原氏妻和泉界にあり、既にして潰兵來報して曰は

く、主君戦没すと。藤原氏二子(時清、滿氏)如何を問ふ。曰く脱走すと。藤原氏嘆じて曰く、二子耻を知らず、吾生を偷むに恐ひずと。將に自殺せんとす。左右之を止め、薙髮を勸む。聽かず。即ち扶けて輿に上し、土丸城に赴く。藤原氏輿中及に伏し、殊せず。左右驚きて藥を進む。肯て嘗めず。二子潛に來りて、見えんことを請ふ。藤原氏頭を掉りて曰はく、勇なきは士にあらず。孝ならざるは子にあらず。將家の子、年弱冠を逾え、父に軍に従ひ、父死して子逃る。何の顔ありてか來り見ゆる。熙氏(末子)は幼兒なり。尙能く父に殉す。二兒何ぞ死せざると。乃ち衣を被りて、復言はず。二子大に愧て去る。初め氏清に書を致して、藤原氏に訣る。藤原氏竟に書を取りて、和歌を、其後に題して死す。侍女三人皆水に赴きて死す。大日本史 ●天文永祿 足利氏の末世、所謂戦國時代なり。天文元年は、皇紀二一九二年、永祿元年は、紀元二二一八年なり。此間四十年許り、それより、元龜、正文、文祿、慶長より、元和、偃武の前後に至るまで、風教振はず。士人只鬪争を事とするのみ。その文教の後には傳はることをえたるは、實に僧侶の賜なり。 ●幸田彦右衛門の母 姓氏詳ならず。天正十一年三月、幸田彦右衛門尉の主人、織田信孝、秀吉に叛く。時に幸田の母、秀吉に質たり。秀吉怒りて、將に質を殺戮せんとす。是に於いて、幸田の母、密に一書を其子彦右衛門尉に贈りていはく、凡そ天下の人、君に仕へて忠を盡すは、則ち天地の大義なり。父母

の先ち死するは、理の常なり。我命を損すと雖、悲歎すること勿れ。汝義士孝子の道を守り、善く君に事へ、老母の故を以て、二心を懐くこと勿れと。秀吉遂に之を獄に下し、後之を磔殺し、以て道路に徇ふ。諸人其の義勇を稱す。●奈良左近の妹」奈良義成の妹、和歌を善くし、書を善くす。殊色あり。義成永祿中伏見に寓し、西國の人貞光久左衛門に就て、吹笛を學ぶ。貞光妹の美に愛慕し、懇請して妻とせんとす。義成聽かず。貞光の前妻を逐はんとするを以てなり。貞光益思慕す。義成竊に母と相議し、妹を諭し、婚を野村高勝に約す。時に將軍足利義昭本國寺にあり、三好の黨、急に起ちて、本國寺を襲ふ。義成三好氏に屬し、之を攻め、軍敗れて東寺に走る。貞光義成を得て、甘心せんと欲し、追驅して義成を呼ぶ。義成騎を回して接戦し、遂に死す。貞光伏見に至り、妹女を奪ひ、之を子舎に寓く。妹女伴り、色を和げて曰く、妾聞く、我夫越中、左近と并び陣歿すと。今已に孤寡たり。請ふ君少しく憐哀を垂れ、願はくは妾を郷里に致し、以て母氏の情を慰めよと。乃ち書を作りて、髮毛を裁し、以て封緘して、之を貞光に託す。貞光人をして、之を伏見に送らしむ。母氏之を聞するに歌あり、曰く、思ひ川深き淵瀬は早けれど、さそふ水には名を流さめや」と。狀を具して報す。母氏悲泣し、使者の面前に自殺す。使者驚き歸る。貞光大に悦び、女に傍して、戯押し、將に迫らんとす。女奮起し、貞光の佩刀を抜きて、之を刺殺し、自亦切腹

して死す。他日信長之を聞き、貞光の不義を憤り、其妻挈を捕へて磔殺す。●勝子」織田信行の侍女、京師の人なり。信行岩倉城に在る時、其臣に津田八彌といふものあり。信長の臣佐久間七郎左衛門に殺さる。七郎遁れて美濃に走り、齊藤道三に依頼す。信行之を信長に告ぐ。信長爲めに道三に請ふ。道三聽かず。信行嘗て勝子をして、八彌と婚せしむ。是に至り、仇を復せんと欲し、暇を乞ひて去り、美濃に行き、叔父の家に頼り。終に道三の夫人に侍す。翌年三月、城中に騎射あり。七郎亦與る。勝子請うて夫人に従ひ見る。此日射士十五員、簾前に揖して、各自名いふ。第十五番に至り、七郎騎を進めて、簾前に至る。勝子大喝、簾を掲げて跳下し。七首七郎の腹を刺し、呼んで曰はく、我は津田八彌の妻なり。今亡夫の讎を報すと、七郎斃る。道三父子怪みて之を問ふ。勝子具狀して、實をいふ。道三曰はく、憐む可し。女の勇敢、我之を援けんと欲す。信長の請を如何せん。且一婦人のために良士を失ふ。我の耻なり。義赦すべからずと。命じて禁錮せしむ。夫人固く請ひ、遂に金を與へて去らしむ。勝子岡崎に行き、縁によりて大須賀康高に見え、事徳川家康に聞ゆ。家康召して、城中におくこと數月。七郎の兄盛政、信長に困りて、之を歎請す。信長池田信輝をして、爲めに之を請はしむ。家康曰はく、希世の烈女なり。たとひ婚媾の親を絶つとも、我之を放ち遣るに忍ひずと。盛政恚にたへず、刺客をして殺さしめんと欲す。一日勝

子他に行く。刺客二人あり、従者之を捕ふ。家康命して、二人を誅し、之を見附驛に梟す。信長大に悲り、兩國將に難を作さんとす。勝子乃ち書を遺して自盡す。家康其義烈を稱し命して厚く葬らしむ。 ●細川夫人 細川忠興の妻は、明智光秀の三女なり。容貌殊に美、天正七年を以て嫁す。十年光秀逆を行ふ。忠興怒りて、婚を絶ち、三戸野山中に幽し、家人をして之を警衛せしむ。既にして山崎の戦破れて、光秀誅に伏す。或人いふ、支族を求めて、之を誅すと。家人諫めて曰く、坐して戮せられんよりは、自殺せんには如かずと。夫人曰はく、未だ良人の命なし、死すべからずと。夫人沈落艱苦、節を守ること十二年、秀吉其節操を憐み、忠興に諭して、復歸せしむ。親暱故の如し。慶長五年、忠興家康に東征に従ふ。七月、石田三成人を遣はして、將に夫人を大阪城に取らんとす。其意質とするに在り。夫人曰はく、寡君東師に屬す、我何ぞ之に叛かんや。盛衰を以て、節を改めず、存亡を以て、志を易えずと。肯せず。三成怒り、兵數百を發して、來り圍む。夫人、他の關係なきものを出して去らしむ。既にして、圍合す。夫人曰はく、我れは婦女なれども、辱を受くるに忍びずと。家人に傳令して曰はく、我秀頼に負かず。寇入らば、慎みて闘ふことなかれと。遂に命して、門を鎖ざしめ、十歳の男、九歳の女を刺し殺し、火を放ちて自殺す。家人及び侍婢、婦嫗悉く死す。三成等慚悔し、終に質を收むる議を止む。 ●睦若 凝視緘黙して、呆然たる

る貌。 ●武田夫人 武田勝頼の後妻、北條氏康の女。天正十年、勝頼軍敗れて、將に天目山に走らんとす。更に昇夫なし。乃ち荷駄馬に騎らしむ。侍婢皆草履を著けて従ふ。會城に火起り、敵已に迫る。天目山も亦寇あり。拒みて納れず。時に三月十日、終夜田間を狼狽す。次日土寇起り、敵を導き來り襲ふ。勝頼秋山紀伊守をして、來り言はしめて曰はく、命運既に盡く、卿は婦女なり、宜しく小田原に走り、身を保つべしと。北條氏泣て曰く、妾嫁して、既に七年、何爲れぞ逃るゝことをせん。願はくは、俱に死せんと。傳母を顧みて誠めて曰く、汝小田原に往き、我訃を傳ふべしと。乃ち髪を截り、絶命の歌を作る。曰はく、黒髪の亂れたる世そはてしなき思に消ゆる露の玉の緒と。會飛銃雨注す。左右勸めて巖崖に避けしむ。聽かずして曰く、今將に死なんとす。何爲ぞ矢丸を嫌はんやと。左右皆斃るゝを聞き、佛名を唱へて、勝頼の傍に自殺す。 ●清水左衛門尉の母 清水正令の妻、侍力あり。一日山上の社に詣づ。路一牛の米を負ひて、後跟を斷崖に墜したるに遇ふ。牛童遽驚し、俄に鞍苞を解かんとすれども、牛の崖下に陥らんを恐れて能くせず。牛も亦敢て動かす。其危きこといふべからず。行客救はんと欲するも、亦術なし。母即ち橋を下りて、双手を牛腹下に入れ、救ひ上げて、之を中路に置き、鞍鞍を解かず。衆舌を卷き、膽を冷す。左衛門尉も、亦奮力ありきといふ。 ●奥村助右衛門の妻 奥村永福、助右衛門と稱

す。前田利家の功臣なり。秀吉關白となるに及び、朝散太夫豫州守となり、豊臣の姓を賜はる。その妻は、勇婦なり。姓氏を詳にせず。天正十一年、前田利家、加賀能登の境、末森に城壁を築き、永福に守らしむ。佐々成政、兵一万五千を以て來り攻め、之を圍み、終日終夜苦戦す。妻、志氣勇敢、自ら、僮御數人を從へ、晝夜巡回して、不虞を警む。或は粥を煮て、士卒の饑を救ひ、或は酒を煖めて、軍衆の勞を犒ふ。故を以て、士卒奮勵、唯事に死せんことを欲す。城因て陥らざることを得たり。 ●巴 中原兼遠の女、今井兼平の妹、美にして、勇武技を善くす。源義仲之を壁す。毎戰別に一部の將と爲す。北國の戰、向ふ所功あり。義仲の敗るゝに及び、騎の從ふもの僅に十三騎、鞆繪トモエ其中にあり。東兵追尾す。鞆繪防戰甚銳なり。東兵披靡す。畠山重忠追ひ至り、その鎧袖を擲ひ、揮ひて去る。鎧袖留りて、重忠の手にあり。義仲四宮河原に至る。從騎たゞ七人、鞆繪尙在り。遠江の人内田家吉、自ら言ふ、力六十人を兼ぬと。鞆繪と馬を接へて交搏す。鞆繪即ち其首を斬り、義仲に示す。義仲憮然として曰はく、惜むべきの勇士、一女子のために獲らる。我も亦誰の手に死するかを知らず。異日人將に謂はんとす、義仲死に臨むも、猶女子を携ふと。まさしに名を累すに足る。汝此より去れと。固く請ふ。愚論懇到なり。遂に嗚咽して國に還る。時に年廿八、後尼となり。越後の友松に終ふ。 ●板額 城九郎資國の女、小太郎資盛の姨、建仁元年、源頼家、資盛

の叔父長茂を捕へて、之を誅す。資盛仇を報せんと欲し、兵を起し、壘を越後鳥阪に築きて之に據る。頼家佐々木盛綱を遣して、之を撃たしむ。資盛の士卒、殊死して戰ふ。矢下ること雨の如し。盛綱の兵多く死傷す。板額雄策多力、善く射る。兼て兵略あり。束髮して童形の如くし、腹巻を着け、櫓上より射發して中らざるなし。信濃人藤澤清親、城後に出で山より狙ひて之を射。其兩股を貫く。板額僵る。因て之を虜にす。資盛敗れ奔る。清親板額を以て、鎌倉に到る。頼家召して之を見る。板額進みて、簾前に至る。容貌醜醜、少しも屈する色なし。淺利義遠、請うて妻とせんと欲す。頼家曰く、是れ無双の朝敵なり、之を請ふは何ぞや。義遠答へて曰はく、勇力の男子を生みて、朝廷を護り、武家を扶けんと欲するのみと。遂に携へて甲州に還る。 ●浮田秀家 本名家氏、八郎と稱す。天正十年、父卒する時、尙幼、秀吉取りて子とす。十五年八月、參議に任し、從三位に陞り、攝家の上に坐す。征韓の役、征明元帥となり、還りて權中納言となる。復び征韓の役あるや、監軍たり。關原の役大敗して奔竄す。慶長八年八月、執へられて、八丈島に流さる。削髮して禮福と號し、寛文二年、壽を以て終る。(皇紀二三三二二年) ●王朝時代 又は、平安朝時代ともいふ。大凡桓武天皇、京都に御遷都より、源平二氏の時代に至るまでをいふ。(紀元一四五四遷都、紀元一八二七、平清盛太政大臣となる。此間、藤原氏權を專にす。文明の度進歩し、太平に馴れ

たるため、淫靡優柔、士女皆嬉樂のみを思ひ、いふに忍びざるものあるに至る。源氏、伊勢、大和、其他の物語に徴して明なり。●歳寒くして云云』論語子罕第九にいはいく、子曰、歳寒然後知松柏之後凋也。と註に曰はく、謝氏曰、士窮見節義、世亂識忠臣、欲學者必周於德、とこれなり。

(注意) かゝる文を講せんには、先づ豫め、道德の變遷を論じ、古代の道德と、今代のと同様にあらざる所以を述べ、此文の中の話説に就いて、取捨する所あらしむべし。若し、然らざれば、驕然、盲馬の逸するが如くにして、遂にいふべからざる危険に陥らん。加之、士女の其身を輕んじ、死を蔑にすることは、我國の弊風なり。宜しく改めんことに注意すべし。

### (一一) わが母

●代代の集』古今集、後撰集、拾遺集、これを三代集といふ。これに後拾遺、詞花、金葉、千載、新古今の五集を加へて、八代集といふ。新勅撰、續後撰、續古今、續拾遺、新後撰、玉葉、續千載、續後拾遺、風雅、新千載、新拾遺、新後拾遺、新續古今等の十三代集を加へて、二十一代集と稱す。此等は皆、世々の帝の勅によりて、撰せられたるものなり。故に勅撰の集ともいふ。最も古き古今集は、今より殆ど六百年以前、醍醐天皇の延喜年

間に成り、最も新しき新續古今集は、後花園天皇の永享十年(皇紀二〇九八)に成る。此の外、代々の歌人の撰著も、少からず、歌集の最も古きものを、萬葉集とす。奇古勁拔、古今の艷麗に勝る。●物語の類』物語類の書は、竹取を始とす。伊勢源氏、枕の草紙、住吉物語、とりかくばや物語など、その數少からず。又、古ありて、今なくなりしものも少からず。最もよく玩ばれたるものは、竹取、伊勢、源氏、枕、徒然草等なり。

### (一二) 松島

●松島』陸前國宮城郡、東北部の海邊(仙臺灣)にあり。俗に八百八島と稱する。無數の島嶼、點々海上に碁布し、島は悉く松を生じ、形に依りて各名あり。鹽竈より松島に至る海上三里。●三景』安藝の巖島、丹後の天の橋立と、松島とを以て、日本の三景と稱すること、古きことなり。而して松島之に冠たりと稱す。されば南山禪師が詩に、天下有山水、各擅一方美、衆美歸松洲、天下無山水、といれたる亦宜なり。●大小の島々』稍大にして、著名なるものを擧ぐれば、離島、尾島、馬放島、潮干島、茶臼島、兎島、二王島、桂島、后島、珍島、大黒島、蛭子島、布袋島、旭島、翁島、經島、福良島、徳浦島、雄島等なり。●松島村』戸數百戸ばかりの小村落なり。波止場あり。村の北二町計に瑞巖寺あり。一に松島寺ともいふ。寺は仁明天皇承和五年の建立ともいひ、淳和天皇の天長五年、慈覺

大師の開基にて、當時延福寺といひきともいふ。●碁局』碁盤のこと。●雄島』昔より歌の名所となり、擣衣、月、千鳥、松、夜舟、釣舟などの景物とせらる。俊成卿の歌に、松島やをしまの磯による波の月の氷にちとりなくまりなどあり。●偃蹇』エンケン。かゝまりふすこと。偃は靡なり。臥なり。又服なり。蹇は跛なり。屯難なり。偃蹇は、困頓の貌、又舞貌、走る兒。●插花筒』花瓶の一種、はないけのつゝ。●好事』風流の事を好む人。●茶杓』茶の湯に用ゐる小杓。●眼釘』メクギ。

(一二三) 太陽と惑星 ●太陽及び惑星

直 徑	直 經	太陽より平均距離	地球よりの最近距離
水星	二、九六二	三五、三二九、六三八	四七
金星	七、五一〇	六六、一三一、四七八	二二三
地球	七、九二五	九一、四三〇、二二〇	六二
火星	四、九二〇	一三九、三二二、二二六	四〇九
木星	八八、三九〇	四七五、六九三、一四九	

土 星	七七、九〇四	八七二、一三四、五八三	八三一
天王星	三三、〇二四	一、七五三、八五一、〇五二	一、七四六
海王星	三六、六二〇	二、七四六、二七一、二二二	二、六二九

●太白』李伯字は太白、盛唐の詩人。詩體飄逸豪放、最も絶句に長ず。好んで酒をばらうて、放縱拘らず。京に至りて、賀知章を訪ふ。知章其の文を見て、大に賞し、號して謫仙といふ。玄宗の朝、召されて翰林供奉となり、宮中にして清平調を制す。玄宗、蜀に蒙塵の後、永王璘に隨ひて罪を獲、郭子儀の救に遇ひて、夜郎に流され、碣石に死す。時に肅宗の寶應元年なり。年六十二、我紀元一四二二年淳仁天皇天平寶字六年なり。●山陽』姓は頼名は襄字は子成、久太郎と稱す。山陽はその號、又三十六峯外史と號す。安藝侯の臣、頼春水の子。江戸に生れ、諸方を歴遊し、諸大儒に交り、遂に京都に家す。孝養の心厚く、父歿後毎歲西省し、或は母を迎へて供養す。天保三年九月廿三日、肺を患ひて死す。年五十三。東山長樂寺に葬る。著す所、日本外史二十二卷、日本政記十五卷、通議貳卷、新策十餘篇を改刪す。春秋講義、先友錄、文集、詩集等あり。遺稿も亦少からず。刻苦學を修め、深く勤王の大義を悟る。

(二四) 高橋東岡夫妻

●高橋東岡』梅軒とも號す。大阪の御定番同



心元亮の子、明和元年十一月生れ、寛永七年父の職を継ぎ、文化元年正月十五日に死す。下谷源空寺に葬る。 ●定番同心ギョウバンドウシン 定番同心は、京都、大阪、駿府の城代の下にあるものにて、城代は時々交代するものなれども、此の同心は、常にその役を取りて、變ることなし。故に三府には、定番同心といふものあり。同心の首領を、與力といふ。與力、同心は、今の警部、巡査の如きものなり。 ●麻田剛立アサダガウリツ アサダガウリツ、名は安彰、綾部綱齋の子、深く天文及び醫術を好み、思ひを潛むること二十餘年、獨學終に其道に通ず。明和の末年、杵築侯に擢でられ、侍醫となり、江戸に赴く。剛立却て悦ばず、辭すれども聽かれず。遂に藩を脱して、大阪に至り、又研修二十餘年を経たり。寛政九年幕府改曆の議あり、之を召す。辭するに、老年を以てし、高弟高橋作左衛門、間五郎兵衛を以て、召に應ず。寛政十一年、歳六十六にして歿す。紀元二四五九年。 ●天文推歩テンブンチソ 天文學、曆算學、後漢書に推歩謂推究日月五星之度、昏旦節氣之度とあり。 ●寛政の頃カンセイノトキ 二四四九—二四六〇、光格天皇の御宇、徳川家齊將軍たり。 ●天文方テンブンカタ 天文を取調ふる役人。 ●徼カウ もとむ、むかふる、欲し求むるなり、徼倖なり。 ●伊能東河イネノトウカ 伊能忠敬、東河と號す。字は子齋、三郎右衛門と稱し、晩に勘解由と改む。下總武射郡小堤村神保貞恒の子、佐原村伊能氏に養はる。家産偶荒る。忠敬儉素を守り、産稍復す。天明の飢饉、私財を發して、閭里を賑はす。寛政

六年家を子景敬に委ね、東都に出で、其の好める曆學を專攻せんとし、終に高橋東岡に従ふ。推歩測量、獨り忠敬を推す。寛政十二年、官忠敬に命じて、北陸道及蝦夷の南沿海を測量せしむ。これより、諸方を測量し、宇内知らざる所なし。文化四年四月死す。著す所、國郡晝夜時刻對數表、紀源術、并に用法、求割圓八線法、割圓八線表、紀源法、地球測量術問答等あり。歩は日本に於ける最初の地理學者なり。後芝公園に銅碑を建て、其功を頌す。 ●文化元年ブンカノトシ 皇紀二四六四年。 ●浪花ナニワ 大阪のこと。 ●翹楚セウソ ゲウツ、抜け出で、すぐれたるもの。翹は高き貌、翹々は秀起の貌。翹楚は叢木なり、翹楚といふは楚の秀で、高起するをいふ。曰、楚木中之獨高起者、以況人之出類拔萃也。詩經周南漢廣章に翹々錯薪、斯取其楚とあり。

(二五) 孫女に與ふる文

●物見遊山モノミユクヤマ 貝原益軒の女大學にはい

はく、又茶酒など多く呑むべからず。歌舞妓、小唄、淨瑠璃などの淫オシレたる事を見聴くべからず。宮寺など、都ミヤて人の多く集る所へ、四十歳より内は餘りに行く可からず。云々。 ●月にむら雲、花に風ツキニムラウモ、ハナニカゼ 日月欲明、浮雲蓋之、叢蘭欲發、秋風敗之、(文子)此等よりやいひ出したりけん。此の外、此に類せる詩句甚だ多し。好事魔多きをいへるなり。 ●耻ハジかしきも

のいやう』原文は、さることながら、人の前に病をいふは、禮を失ふことなり。病を得るは、多くは不道徳の致す所なり。自身に對する徳を壞りたるによる。豈に耻づべき限にあらすや。聞く支那歐米にては、人の前に病を語るを以て、甚しき失體とす。君命すれば、病を以て辭せずともいへるにあらすや。然るを、今の青年士女、病を飾り得々として相語る。そもく耻を知らざるによるか。●服膺』フクヨウ。心に占めて忘れぬやうにするをいふ。膺は胸なり。常に胸にかけたるやうに忘れず思へとなり。

（一六）甲冑堂

●奥州』初めは、五畿七道の奥といふ意にて、みちのおくのくにといひ、その後、音のつまりによりて、みちのくのくにとなり、更に、みちのくといひて、くにをはぶき、又つまりて、むつとなる。陸奥は漢字をかりて充てたるなり。それより轉して、奥州といふに至りぬ。初めは今の國名磐城、岩代以北を總稱せしが、時の變遷と共に、行政上其他の變化に伴ひ、磐城、岩代と、出羽と奥州とに分ち、更に分れて、陸前、陸中、陸奥、羽前、羽後となりぬ。此の奥州といふるは、出羽を除きての五ヶ國をさすなり。此頃既に、五國に分れたれども、舊稱によりて、ただ奥州と云ふ。●白石』盤城國刈田郡白石町。徳川氏の時代には、伊達侯の臣片倉小十郎の城下なりき。明治元年閏四月、伊達慶

邦、上杉齊憲等の、奥羽諸藩主此地に會して、會津を援けんことを謀りき。●才川』サイカハ、今は齊川と書く。●凶作』穀物豊熟せざるをいふ。主に稻作を指す。●住持』一寺の主管者となり、そこに住して、維持するもの、謂。今は住職といふ。寺の住職となれる僧をも住持といふ。●あき寺』人もすまぬ空寺。●本尊』寺の本堂、又はその他の堂に安置せられたる、畫又は像をいふ。●狐島のみすみ家』廢堂廢祠には、狐狸よく出入し、又鳥などよく巢を作る。白氏文集凶宅の詩に、鳥鳴松桂、狐遊蘭菊籬、云々とあるによれるにや。●甲冑堂』甲は鎧、冑は兜なり。カツウとよむ。●佐藤繼信忠信』繼信、嗣信ともかく、兄なり。忠信は其弟なり。信夫の莊司元治の子、母は藤原清衡の孫。義經の臣となり、鎌田盛政、同光政と共に、四天王と稱せらる。嗣信、死する時年廿八。忠信は二十六。●義經』義朝の第九子、頼朝の弟、九郎判官と稱せられ、伊豫守となる。●鎌倉殿』頼朝を指す。頼朝を相摸鎌倉に開きて、天下に號令せしかば、世之を鎌倉殿と稱しき。●秀衡』藤原秀衡は、陸奥の押領使基衡の子、鎮守府將軍たり。初め義經、秀衡によりて、平家を圖らんとせしが、兄、頼朝の兵を擧ぐるを聞きて、これに従ふ。義經再び投歸するに及びて、大に禮遇し、以て頼朝に抗せむと圖れり。文治三年、病みて死す。皇紀一八四七年。●一の谷屋島』一の谷は、攝津國八部郡にあり。西須磨の西三丁計りの

所。●屋島』は八島ともかけり、讃岐國木田郡にあり。●龜井』六郎重清、義經に仕へ、一の谷、屋島、壇浦等に勇名あり。義經奥州に逃るゝに及び、又從ふ。花園觀音堂にして、義經修驗者を蹴たるは、此人なり。後遂に従ひて、蝦夷に渡るといふ。●片岡』鷲尾三郎經春のことなり。義經、一の谷を襲はんとして、途に一壯夫を得、以て嚮導とし、嶋越の險より下る。義經、それに名を命ず。經春これなり。時に年十七。後、從ひて奥の秀衡により、衣川の役に死す。年二十二。或は蝦夷に入りきともいふ。●能登殿』能登守平、教經、清盛の弟の教盛の子、源義仲の兵を備中水島に破り、淡路の廳を屠り、河野氏を四國に討ち、緒方維義を筑紫に走らせ、屋島の戰に繼信を殺す。壇の浦の役、死戰して、義經に薄りしが、之を逸し、敵一人を蹴りて、海に墜し、二人を左右に挟みて、海に没す。年二十六。●凱陣』ガイオン凱旋に同じ。●係』おもかけ、様子、風體。●希代』キマイ、世に稀なる意。●賽物』賽物、賽は返り詣でとよむ。即ち願はどきに、物を神に献つることなれども、たゞ神に物を上るをも賽といふ。賽錢、賽物、など捧げ物の意。

(二七) 金華山

●金華山』陸前國牡鹿郡の東端、牡鹿半島の東にある島なり。こゝに燈臺の設あり。●こがね花さく』萬葉集大伴家持が陸奥國より金を出し

詔書を賀する歌に、あしはらのみづはの國を、天降りしらしめしける、すめろぎの神のみことの、御世かさね天の日嗣と、しらしくる君の御代と、しきませる四方の國には、山川を廣みあつみと、たてまつる、貢きたからは、かぞへえずつくしもかねつ、しかれども我大君の、諸人をいざなひたまひ、よきことを初めたまひて、くがねかもたのしけくあらむと、おもほしてしたなやますに、鳥がなく東の國の、みちのくのをたなる山に、くかねありと申したまへれ、御心をあきらめたまひ、すめろぎのみたまたすけて、遠き世にかゝりしことを、わが御代にあらはしてあれば、みをすくには榮えむものと、神ながらおもほしめして、ものふのやそともををまつるへのむけのまに、く、老いひとも女のわらはは子も、しかねがふ心だらひに、撫でたまひ治めたまへば、こゝをしもあやにたふとみ、嬉しけくいよ、思ひて、大伴の遠つ神祖の、その名をば大來目主と、思ひもちて、仕へしつかさ、海ゆかばみづくかばね、山ゆかば草むすかばね、大君のへにこそ死なめ、かへり見はせじとことだて、ますらをの清きその名を、いにしへよ今のをつゝ、にながさへるおやの子どもぞ、大伴と佐伯のうちは、人とおやのたつることたて、人の子は親の名たゝす、大君にまつるふものと、いひつげることのつかさぞ、梓弓手にとりもちて、劍大刀腰にとりはき、朝守り夕の守りに、大君の御門の守り、我をおきて、又人は

あらしといやたて思ひしまさる大君のみことのさきを聞けばたふとみ。反歌三首  
 ますらをの心おもほゆ大君のみ事のさきを聞けばたふとみ、大伴の遠つ神祖の  
 おくつきはしるくしめたて人の知るべく、すめろぎの御世榮えむとあづまなるみ  
 ちのく山にくがね花咲く。●つきたち』朔日なり、月の初めの日なるゆゑ、月立とい  
 ひ、音便にてついたちといふ。●山どり』不明 ●別當の坊』別當とは、本官ありて  
 別にかぬる職を、此詞の起りとす。その後、藏人所、内膳所などの長官、又政所侍所などの  
 長官、又東大寺、興福寺などの法務を總ふるもの、又神社の社務を司るもの、終に神主の  
 異名坊はその居る所、昔は神佛相混合せし故、神社も寺の如くにてありしなり。●か  
 れいひ』餉の字をあつ、枯飯即ち干したる飯にて、行厨に用ふ。●とめつ』跡をと  
 めつ、は、跡を尋ね追ひつゝなり。従ふ意なく鹿の聲をとめつ、秋萩のさけるをのへ  
 にわれはきにけり。貫之 ●ぬさ』すべて、神に奉るものをいふ。古は旅人の山などに  
 至る毎に、幣をたむけて、旅路の恙なからんことを祈る風ありしなり。ぬさは、絹布など  
 の、細片なりしなり。故に之を袋に入れて、携へたりといふ。それよりして、凡て神に奉る  
 ものを、ぬさといふ。●五つゑ』五丈なり。十さかを以て、一つゑとす。●煙うちふさ』  
 烟草を吸ひ、煙を吹くなり。●まひろかれど』まは廣の冠頭語、廣きなり。

### (二八) 水晶宮

●水晶宮』Crystal palace ●サイテナム』Sylvan ●盤  
 桓』パンクッ、樂み遊ぶこと、逍遙行樂。●西暦一八五一年』我紀元三五一年、嘉永  
 四年なり。この時、第一回萬國博覽會、倫敦に開かる。●サイ、シヨセフ、バックス、トン』Sir  
 Joseph Paxton ●ハイドパーク』Hydepark ●回祿』クイロク、回祿は火神なり。故に  
 火災に罹るを、回祿の災といふ。左傳には、鄭、穰、火子元冥、回祿とあり。元冥は水神なり。  
 ●埃及』Egypt 地中海中の南岸、ナイル河の下流にあり。紀元前二千八百年頃より、開  
 明に趣けり。七百三十年頃、イシオピア人に征服せられたり。●希臘』Greek 小  
 亞細亞の西方、イシオリアン海を隔て、希臘の半島あり。其の正史は、端を第一回オリ  
 ムピア祭、即紀元前七百七十六年に發せり。其已前を、ホメロス時代といふ。唯イリア  
 ド、オデシの二大詩篇に依て、其一端を知るのみ。●羅馬』羅馬は、元、市名なりし  
 が、歐亞を併呑して、大帝國となれり。其建國は、紀元前七百五十三年にして、ロミウルス  
 其祖王なり。三百九十五年、テオドシウス帝の歿後、東西羅馬の二國と分れたり。西羅馬  
 の滅亡は、四百七十六年、東羅馬の滅亡は、千四百五十三年なり。アウグスツス帝時代は  
 技術最盛なりき。●アルハムブラ』Alhambra 十五世紀頃、グラナダ回教徒最後の根

據地に於て、サラセンの優秀なる建築物の展覽會を催したる、ムーリシユ家の王宮なり。●ビザンチウム』 Byzantium 紀元三百年頃、ビザンチン帝(コンスタンチヌス帝)なり。當時最建築術發達せり。其主要なる型式は、半圓形門、圓背屋、圓形、方形、及柱頭の種々の變形等なり。彼コンスタンチノープルなるセントソヒアの殿堂、及ヴェユスなるセントマルリスの寺院の如きは、ビザンチウム式の顯著なる模範なり。ビザンチウムは今のコンスタンチノープルなり。●中世期』 フランクのカール大帝ノ帝國建設(西紀八百年、皇紀千四百六十年、延暦十九年)より、ルソ一の宗教改革(西紀一千五百十七年、皇紀二千百七十七年、永正十四年)の時、又コロンブスの亞米利加發見(千四百九十二年、皇紀二千百五十二年、明應元年)の時、復コンスタンチノポリスの陥落(千四百五十三年、皇紀二千百十三年、寛正四年)の時迄等、即十五世紀の後半より、十六世紀の始迄なり。●復古期』 Renaissance 第十四五世紀の交、フマニストの輩出せるによりて、古學再び勃興せり。之に伴うて、古代美術の復興盛に、彼ゴチック風盛に行はれしが、十五世紀に至りては、益盛となれり。十五世紀の後半には、繪畫に、レオナルド、ダビンチ、ラファエレ、サンチヨ、チチアノ、エチニリオ等の大畫伯彫刻には、ドナテロー、ミケランヂェロ、ブオナローチ等の妙手輩出せり。●伊太利』 歐羅巴の地中海に瀕せる、長靴形なる所なり。彼中

世羅馬法王の權力強盛なりし當時の中心點たる、羅馬府の所在地なり。故に羅馬寺院の莊飾は美術に大關係あるなり。●ボムペー』彼の羅馬の三頭政治の一人なり。紀元前百六年に生れ、四十八年に死せり。●クリケット』 Cricket 闘球戯なり。●フットボール』 Football 蹴鞠戯なり。

(一九) ナイヤガラ瀑布

●ナイヤガラ』 北米ニユーヨーク州ナ

イヤガラ邑にありて、英領カナダとの分界をなす。●膾炙』 クワイセキ、又はクワイシヤ膾は魚鳥の肉のなます、炙は焼肉なり。膾は炙も共に、味よきものなる故、忘られず、口のはに上ることを、膾炙せらるるといふ。孟子盡心篇に、公孫丑問曰、膾炙與羊棗孰美、孟子曰、膾炙哉とある。此等よりや、此の語は出でにけん。●五大湖』 Lake Superior シニーパーリオル L. Michigan ミシガン L. Huron ヒューロン L. Erie エリー L. Ontario オンタリオ、此内、オンタリオを除きて、他の四湖の水と、シントクリヤ湖の水とを合して、オンタリオ湖に入り、セントローレンス川となりて、大西洋に入る。その口をセントローレンス灣とス。●St. Lawrence ●シントゥリヤ』 L. St. Clair ●イッイ』 L. Erie ●デトロイト』 R. Detroit ●ナイアガラ』 Fall Niagara ●シランドマイラン』 Grand

Israel. 馬蹄瀑』 Horse-shoe Fall. ● 亞米利加瀑』 American Fall. ● 六百ヤード』 Yard は我曲尺三尺一分一厘に當れば六百ヤードは千八百〇六尺六寸に當る。即ち三百〇壹間餘なり。 ● 百五十ヒート』 Foot は我曲尺の一尺なれば百五十ヒートは、二十五間餘なり。百六十四ヒートは、三十三間に、少し足らぬ位なり。 ● 一億噸』 Ton 容積にては、一万九千四百四十四坪に當り、一坪は六尺立方貫目にては、二百七十二億〇三百八十四萬貫に方る。一噸の目方は、二百七十貫九百四十七匁なり。 ● 虹霓』 虹霓ならむ。雄曰虹、雌曰霓。舊説、虹常双見、鮮成者雄、其闇者雌也。一曰、赤白色謂之虹、青白色謂之霓と、字書にあり。 ● 螺階』 ラカイ、螺旋狀に、回轉して上下せらるる階級なり。 ● 疑是銀河』 李伯が廬山の瀑布に題せる詩に、いはく、日照香鑪生紫烟、遙看瀑布挂長川、飛流直下三千尺、疑是銀河落九天と。瀑布の奇麗さは、殆天の河か天から流れ落つるかと思はるとなり。

(二〇) 飛鳥山

● 飛鳥山』 一の岡陵なり。東京府下北豊島郡王子村にあり。

東は遙に葛飾の千町田を望み、西は畑つゞき、南は岡つゞきに道灌山、谷中、上野に至る。其北東の山麓に、王子停車場あり、王子権現の社あり。櫻花を以て、東京に名高し。公園の

一にして、亦都人一日の行樂地なり。 ● 一小神社』 飛鳥山の岡つゞきにて、王子村西ヶ原といふ處、北隣に農事試験場あり。 ● 義家』 伊豫守頼義の子、小字は源太、初め頼義、八幡神劔を賜ふと夢み、之を異とす。既にして其妻妊むことあり、義家を生む。年甫めて七歳、石清水宮に元服す。故に入幡太郎と稱す。人と爲り、勇武明決、最も騎射に長す。永承中、父頼義に従ひ、安部貞任を、陸奥に討ち、鳥海柵に戦ひて、大に之を敗る。向ふ所皆披靡す。賊稱して神とす。康平五年、衣川の關を攻めて、大に之を敗る。貞任誅に伏す。東陞兵を用ふることに十餘年。陸奥の平定せるは、義家の功多きに居る。六年、從五位下に叙せられ、出羽守となる。大江匡房に兵法を學ぶ。承暦三年、勅を受けて源重宗を誅し、永保元年亦園城寺の僧徒を逮捕す。三年、陸奥守鎮守府將軍となる。藤原清衡、家衡、清原貞衡と兵を交ふ。義家急に陸奥に赴き、眞衡を助けて家衡を攻む。利あらずして還る。家衡の叔父武衡、義家の敗を聞き、兵を起して家衡に應じ、謀を合せて金澤柵に據る。寛治元年九月、義家又自ら數萬騎に將として、之を伐つ。義家雁行を見て伏を、知り、之を殲し、進みて柵を圍む。會義光京師より來る。遂に力を戮せて、之を攻め、武衡家衡を獲て、之を斬る。陸奥出羽悉く平く。皇紀一七五一年、義家、左近衛將監、檢非違使、左衛門尉、左兵衛權頭、河内、相摸、武藏、信濃、下野、伊豫等の守に歴任し、正四位下に叙せらる。嘉承元年、病を以て薨。髮し

天仁元年卒す。年六十八(皇紀一七六八)義家又和歌を善くす。吹く風をなこそその關と思へども道もせにちる山さくらかなの歌、人口に膾炙す。●義綱●元服を賀茂の社に加ふ。因りて賀茂二郎と稱す。父に従ひ、貞任を討ちし功を以て、左衛門少尉に任せられ陸奥、伊勢、甲斐、信濃等の守に歴任す。天仁二年、其子の冤を蒙れるを怒り、終に罪を得て佐渡に流さる。長承三年再ひ譴責を蒙る。遂に自殺す。(皇紀一七九四年) ●義光●元服を新羅明神社に加ふ。因りて新羅三郎と稱し、又館三郎と稱す。左兵衛佐となり、京師に宿衛す。兄義家、武衡を討ちて利あらずと聞き、奏して之を援けんと請ふ。許されず。遂に官を辭して陸奥に入る。義家見て悦び、泣きて曰はく、今日汝を見る、なほ大人を見るが如しと。遂に共に金澤柵を陥る。京に歸りて、刑部丞に任せられ、常陸介、甲斐守を経て、從五位上、刑部少輔に至る。大治二年卒す。(皇紀一七八七年)義光幼より、音律を好み、竟に其妙に至る。かつて笙を豊原時元に學ぶ。時元卒する時、其子時秋尙幼にして、祕曲を傳ふるを得ず。乃ち義光に、大食入調を授く。義光陸奥に赴くに及ひて、時秋追ひて、近江鏡驛に至り、乃ち與に俱にせんと請ふ。義光之を止むること數次、可かず。行いて足柄山に至る。義光轡を駐めて謂ひて曰はく、吾深く子の志に感ず。然れども、此の關濫りに踰ゆべからず。吾已に死を期す。破りて去るべし。子の殉せんは無益なり。宜しく速に歸り去るべしと。時秋猶從はんと請ふ。義光稍其意を曉る。乃ち馬より下り、二楯を布きて、俱に坐す。因て胡籀中より、時元傳ふる所の大食入調の譜を出して之を示し、問ふ。笙を齎したりや否と。時秋乃ち笙を出す。義光曰く、子の吾に従ふ所以は、想ふに必ず此事ならん。我今戰に赴く。生還を期せず。子は官守あり。宜しく歸りて其業を全うすべしと。乃ち悉く祕曲を傳へて去りきといふ。(以上諸將の事蹟、大日本史等に委し) ●此文の話は、蓋し傳説なるべし。歴史には事蹟明ならず。又勅使下向の事もいかにや。なほ義家に關係の神社、此の附近に少からず。小石川公園、白山神社の白旗櫻は、義家が旗を建てたるなりといひ傳ふ。

べしと。時秋猶從はんと請ふ。義光稍其意を曉る。乃ち馬より下り、二楯を布きて、俱に坐す。因て胡籀中より、時元傳ふる所の大食入調の譜を出して之を示し、問ふ。笙を齎したりや否と。時秋乃ち笙を出す。義光曰く、子の吾に従ふ所以は、想ふに必ず此事ならん。我今戰に赴く。生還を期せず。子は官守あり。宜しく歸りて其業を全うすべしと。乃ち悉く祕曲を傳へて去りきといふ。(以上諸將の事蹟、大日本史等に委し) ●此文の話は、蓋し傳説なるべし。歴史には事蹟明ならず。又勅使下向の事もいかにや。なほ義家に關係の神社、此の附近に少からず。小石川公園、白山神社の白旗櫻は、義家が旗を建てたるなりといひ傳ふ。

### (二二) 名畫

●千利休●千宗易(ソウエキ)泉州堺の茶人、初の名は與、四郎。其先室町幕府に仕へ、千阿彌と名く。子孫因りて、その舊族姓田中を改めて千といふ。十七にして、茶道を學ぶ。初め信長に事へ、後秀吉に仕ふ。又大徳寺の古溪に師事して、禪を學ぶ。天正十九年、秀吉の意に忤ひ、死を賜り、一條戻橋に葬せらる。歳七十一。(紀元二二五一年) ●古法眼●元信●狩野家第二世、初め四郎次と稱し、後大炊助と改む。剃髮して、永仙、又玉川と號す。幼にして、畫を父正信に學び、周文を慕ひ、又小栗宗丹を師とす。天性畫を好み、巧に

人物鳥龜草木を畫く、時人稱して、奇童とす。年五十、畫所預となり、越前守に任せらる。元信、文明八年八月九日を以て生れ、永祿二年十月六日を以て歿す。年八十四。京師妙覺寺に葬る。(紀元二一三六年—二二一九年) ●京 今の京都を指す。 ●禪師 『センマ、朝庭より賜はる僧侶の尊號にて、終には、一般に僧を尊稱していふに至り、法師、大徳などと、同じやうに用ふ。特に禪天臺の僧に多く用ふ。

(三二) 柴田是眞

●柴田市五郎 宮彫工なり。 ●江戸兩國橋町 日本橋區橋町。 ●古満寛哉 重兵衛寛哉の子にして、又重兵衛と稱す。天保六年四月廿日根岸に死す。年六十九。(紀元二四九五年) ●鈴木南嶺 圓山派の畫家、名は順、字は子信、南嶺は其號、又觀水軒と號す。通稱猪三郎。江戸の人、弘化元年十月十二日死す。年七十。(皇紀二五〇四年) ●岡本豊彦 四條派の畫家、字は子彦、紅村、鯉喬、澄水軒等と號し、主馬と稱す。備前の人、京師に住す。初め松村月溪の門に入り、遂に一家を成す。弘化二年七月十一日歿す。歳六十八。 ●頼山陽 前に見ゆ。 ●香川景樹 歌人、因幡鳥取の人、荒井氏、明和五年に生れ、姨婿奥村氏の養子となり、名を純徳、字を眞十郎と改む。小字は銀之助。七歳、和歌を清水貞固に學び、十八歳、京師に行き、一縉紳の家に仕へ、終に香川景柄の

養子となる。寛政八年、從六位下に叙せられ、陸奥介に任せられ、後長門介に改め、今の名に改む。桂園又東塙亭と號す。天保十二年、從五位下に叙せられ、尋で肥後守に遷り、十四年三月廿七日卒す。七十六。著す所、新學異見、中空日記、桂園一枝、話言秀、古今集正義、土佐日記創見、萬葉集抄解等あり。その歌輕妙を以て賞せらる。 ●東福寺 京都東山の南にあり、塔頭は、その境内にある寺院を塔中といひ、その塔中の首を塔頭といふ。 ●李龍眼 支那の畫工、字公麟。 ●十六羅漢 十六人の羅漢といふことなり。羅漢は、梵語にて、委しくは阿羅漢といふ。不還果と譯す。佛教にて、佛果を得るまでに、諸種の階級をたつ。その一階級にて、一度悟を開きし上は、再び俗界に還來せざるものをいふ。 ●穂井日忠友 歌人なり。標助又鞞負と稱す。號は蓼莪といふ。參河の人、江戸に出て、平田篤胤に學び、後京に入りて、香川景樹に従ふ。天保四年九月歿す。年五十六。 ●海禪寺 淺草松山町にあり。 ●勝林寺 駒込。 ●福田行誠 東京芝増上寺の僧、武藏國豊島の人、明治維新の際、大教院の教頭となり、大教正となる。二十年三月、淨土宗總本山智恩院門跡(門主)となり。明治廿一年三月廿五日寂す。世壽八十三。近代教界の一偉人なり。 ●狩野勝川院 木挽町狩野八世の畫人なり。名は雅信、素尙齋と號す。江戸の人。法印に敘せられ、勝川院と號す。明治十三年八月九日死す。年五十八。 ●中山胡民 文政年間の



蒔繪師、原羊遊齊の門人なり。其他不詳。 ●明宮』ハルノミヤ、今の皇太子殿下の御殿  
●青海波』セイガイハ、もとは舞樂の曲の名、衣服の模様の名となる。又蒔繪の模様の  
名ともなる。

### (二二三) 古代の織物と刺繡

●推古天皇の時代』 紀元一二五三

年より、一二八九年まで御在位。なほ、舒明、京極、孝德、齊明の四帝の時代。 ●奈良の朝』  
元明天皇の三年(紀元一三七〇年)平城に遷都す。これより元正、聖武、孝謙、淳仁、稱徳諸帝  
を経て、孝仁天皇の御代終り、桓武天皇即位し、(二四四二)山城長岡(平安城)に御遷都まで、  
(二四四四)の中間を、奈良朝時代といふ。またこれより奈良を南都といふ。 ●南都東大  
寺』東大寺、興福寺、西大寺、元興寺、大安寺、薬師寺、法隆寺、これを南都七大寺といふ。東大  
寺は、奈良市の東北大字雜司にあり。聖武帝、佛法興隆の願を發し、諸國に國分寺を造り  
又僧行基に勅して、天下の衆庶を勸進せしめ、盧舍那大佛の像を、平城京の東山に鑄し  
ひ。九年を経て、天平勝寶四年、成るに及び、封五千戸水田一萬町を施入し、總國分寺とし  
國家鎮護の寶刹と稱す。其後幾多の變遷を経たり、現今の堂宇は、徳川綱吉の修補する  
所といふ。 ●正倉院』東大寺大佛殿の西南にあり、天平勝寶八年、孝謙天皇、先帝聖武

天皇の遺物を東大寺に納付し、校倉を建て、之を藏めらる。之を正倉院といふ。千有餘  
年の長さ、一回も火災に罹りたることなく、奈良盛世の美術を今日に遺す。蓋し東西稀  
有の寶庫なり。 ●法隆寺』斑鳩寺、伊河留我本寺、鶴僧寺ともいふ。大和國生駒郡法隆  
寺村にあり。推古天皇の十五年建立、天智天皇の時焼失す。元明帝和銅年中再興す。金堂、  
講堂、五重塔、東院、尊殿等、大小の建築、一千有餘年の典型を存して、寺中存する所の佛像  
其他、當年の文化を輝すに足るもの多し。 ●蒲縷』らふがのこ、鹿の子しぼりの一種。  
●夾縷』くゝし、くゝりぞめのこと。 ●山布波多』しすはた、縷ををる、千縷高縷など、  
又は、たをりべなど、(服部)其起り古し、ゆふはた、ゆひはた、ゆはた、などいへるは、くゝりぞ  
め、しぼりぞめのことなり。 ●神功皇后』紀元八五三年、仲哀天皇の三年、氣長足媛を  
立て、皇后とす。此年帝親ら熊襲を征す。紀元八六〇年、神功皇后三韓を征伏して、凱旋  
す。八六一年より九二九年まで、神功皇后の攝政時代。攝政の六九年、紀元二九年崩す。壽  
一百歳。 ●中宮尼寺』法隆寺の境内。 ●橘大夫』檀林皇后と同じ。 ●天壽國曼  
陀羅』法隆寺の中宮尼寺に藏する所のもの、極樂國の繡圖なり。推古帝の三十年、聖徳  
太子薨せられし時、太子の妃橘大女(橘)の請により、太子の往生せられたりといふ。天壽  
國の狀を見んとて、その想像圖を造らせ給ひしものなり。畫は、東漢末賢、高麗加西溢漢

奴加己利に命じ、刺繡は諸采女(宮中に奉仕する女)に命じて造らせらる。曼陀羅は佛畫の意。●采女』古郡の少領(官名)すけ、次官に方る以上の姉妹の、形容端正なるものを朝廷に貢せしめ、宮中にて御膳のことをつかさどらしめたるものなり。これを亦うねべともいふ。●當麻寺』大和國葛上郡にあり。●中將姫』藤原豐成の女、三歳にして母を失ひ、九歳にして禁中に入り、筆を奏づ。孝謙帝大に之れを賞す。十五歳帝復召して奏せしめ、愈奇として三位に叙し、中將の名を賜ふ。繼母屢これ害せんとして成らず。終に人をして山中に誘殺せしむ。この人之を殺すに恐びず、共に雲雀山に潛む。寶龜元年、姫遂に大和當麻寺に入り、善心尼と號し、後に妙法尼と號す。翌年、蓮絲を作りて、曼茶羅を織る。圖は極樂圖なり。天應元年没す。年二十九(紀元一四四一年孝仁帝の御宇)●檀林皇后』橘嘉智子、内舍人清友の女、嵯峨帝の皇后なり。仁明、淳和二帝の母、嘉祥三年(紀元一五一〇)仁明帝不豫なり。后憂慮し、剃髮して尼となり、以て冥助を求む。帝崩じ尋いで后崩す。年六十五。紀元一五一〇年)后篤く佛を信じ、檀林寺を建て、比丘尼の律を持するものをおく。世に檀林皇后といふ。又かつて弟右大臣氏公と議して、學館院を建て、諸子弟に學業を修めしむ。●寶旛』佛前の柱壁などに懸くる旗の一種。印度の風俗の轉來せるものなり。旗幟などとは、その作りを異にす。古き寺には屢之を用ふる

を見る。●袈裟』梵語、迦羅沙曳の轉訛。僧の着るもの、法服の一、其制種々あり。大小亦同じからず。當時多くは、その畧式のものを用ふ。今の僧侶の輪袈裟の如くにして、頸にかけたるものこれなり。●沙門』これも梵語なり。譯して勤息といふ。止惡修善の義、出家して佛道を修行し、又、人を教化するもの、意、僧といふに同じ。僧も梵語にて、僧伽といふの畧、淨侶と譯し、和合相とも譯す。●慧學』齊衡(年號)中、橘太後の旨を奉し、幣を齋して唐に入り、遂に杭州鹽官縣の靈池寺に至り、齊安國師に謁して、太后の旨を通じ、義空禪師を聘して歸り、大に禪席を起す。後重ねて支那に入り、五臺に登り、觀音の像を得。大中十二年歸國せんとす。船、補陀の海濱を過ぎて、石上に附着し、行く能はず。衆以て載貨の重き爲めとし、悉く之を海に投ず。船尙動かす。像の出づるに及びて、即ち行く、慧學思へらく、補陀は天下の勝境にして、菩薩靈を此に顯さんと欲するならんと。因て像を奉じて、其地に止り、遂に寺觀を成し、補陀落山寺といふ。今に至りて四方の拜者なは絶えずといふ。

## (二四) 簪のはじめ

●柳原紀光卿』姓は藤原、童名綱丸、初の名は光房

字は藤蔓、紀光と改む。後櫻町、後桃園、光格の三帝に歷仕し、權大納言正二位に至る。寛政

九年八月落飾し、法名を曉寂といふ。續史愚抄八十一冊を著す。寛政十二年正月薨す。年五十四。紫野に葬る。紀元二四六〇年。●享保のはじめ。享保元年は、紀元二三七六年なり。●髮搔。かみかき、笄の類。古は腰にさしたりといふ。冠して頭の痒き時、取出して搔く。●御厨子預。御厨子所は、後涼殿の西庇にあり。書物文具樂器などを置く所。そこの預り役をいふ。

### (二二五) 孝道

●從順。從順を婦人の徳とせること。支那にも日本にも、甚だ多き思想なり。●世故。種々なる世事世能をいふ。●古人も。論語曰、葉公語孔子曰、吾黨有直躬者、其父攘羊、而子證之、孔子曰、吾黨之直者、異於是、父爲子隱、子爲父隱、直在其中矣。(子路篇) ●忠言。忠とは誠を竭すなり。忠言とは誠實の言語なり。●傾聽。心を傾けて専念に聽從するをいふ。●父母は我を生み。孝經にいはく、子曰、父子之道、天性也、君臣之誼也、父母生之、續莫大焉、君親臨之、厚莫重焉。論語にいはく、孟武伯問孝、子曰、父母唯其疾之憂。●其意に忤ふべからず。小學の内則に、子婦孝者、敬者、父母舅姑之命、勿逆、勿怠とあり。又曾子の言に、父母有過、諫而不逆、などあるによれるか。●父母の恩に報ゆる。孝經に曰はく、子曰、子之事親也、居則致其敬、養則致其樂、疾則致其憂、喪

則致其哀、祭則致其嚴、云云と。●孝。孝經にいはく、子曰、夫孝、徳之本也、教之所由生也、身體髮膚、受之父母、不敢毀傷、孝之始也、立身行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也、夫孝、始於事親、中於事君、終於立身、と。世人或は事親の道、唯、勞に服し、養を奉ずるのみを以て、至れりとす。抑また誤れり。論語曰、子夏問孝、子曰、色難、有事弟子服其勞、有酒食、先生饌、曾是以爲孝乎と。色難とは、父母の色に承順するを難しとなすとなり。子游問孝、子曰、今之孝者、是謂能養、至於犬馬、皆能有養、不敬何以別乎と。これその不敬の罪をいひて、深く之を警めたるものなり。孟懿子問孝、子曰、無違、樊遲御、子告之曰、孟孫問孝於我、我對曰、無違、樊遲曰、何謂也、子曰、生事之以禮、死葬之以禮、祭之以禮、と。嗚呼、當時の人、遂に孝を如何せんとする。●大牢。天子の祭に、神に供ふるもの。天子はその社稷を祭るに、大牢を用ひ、諸侯は小牢を用ふ。大牢は牛羊豕の肉を供ふるをいふ。後世その意を轉化して、佳肴美味を稱するに用ふ。●婉容、愉色。曾子曰、孝子有深愛者、必有和氣、有和氣者、必有愉色、有愉色者、必有婉容、孝子如執玉、如奉盈、洞々屬々然、如弗勝、如將失之、嚴威嚴恪、非所以事親也、成人之道也。婉容は柔順の貌、愉色は和悦の貌。●養毓。養育なり、毓は育の古字。●樹靜ならむとすれば。韓詩外傳にいはく、夫樹欲靜而風不止、子欲養而親不待、往而不可返者、年也、逝而不可追者、親也。

(二六) 兄弟

●司馬牛『司馬牛憂曰、人皆有兄弟、我獨亡、子夏曰、商聞之矣、死生有命、富貴在天、君子敬而無失、與人恭而有禮、四海之內、皆兄弟也、君子何患乎無兄弟也、(論語、顏淵第十二) ●俗諺にも『毛利元就の十矢の話をすべし、詩に曰はく、兄弟鬩牆、外禦其侮、●その附添の人』馬谿田の詩にいはく、小憩莫聽黃鸝語、踏落荊花滿院飛。

(二七) 秀忠の乳母

●台廟『二代將軍秀忠の廟、台徳院と諡せられたるによりていふ。 ●山中源左工門』幕府に仕へて、錄五百石を食み、大番組たり、人となり豪邁にして、頗る任侠の風あり、然れども常に人の厭忌するを見て、快とする癖あり、嘗て病と稱して、醫師を招き、依て醫を恐れしめたる話あり、正保中法を犯し死を趨町眞法寺に賜はる、辭世の歌にいはく、わんざくれ、踏んぞるべいか、今日計り、明日は鳥がかつかじるべしと。 ●六尺』男の輿夫。 ●中間』武家にて召使ふ下僕、士と小者との間にあり。 ●木多佐渡守正信』初の名は正保、又正行ともいふ、彌八郎と稱す、三河の人、幼にして家康に仕ふ、永祿六年、一向の亂、弟政重と共に、家康に畔く、亂平ぎて、松永久秀の門客となり、又去りて、一向徒の謀主となり、その勢衰ふるに至り、諸國を浮遊

す。天正十年、大久保忠世の勸奨により、遂に復家康に仕ふ。性活潑聰敏、能く機變に應ず。然れども、又忌刻にして、蛙岸なり。寵遇日に渥く、常に帷幄に侍し、機密に參じ、竟に智謀を以て、開國功臣の列に入る、長鉄の役、策を獻じて功あり、十七年五月、從五位下に叙せられ、佐渡守と稱す。遂に封邑三萬石に終る。元和二年六月七日卒す、歳七十九、(紀元二二七六年) ●權現様』家康のことなり。 ●御條目』元和元年七月七日、家康諸侯を伏見に會し、武家十三條を頒つ。曰はく、(一)文武の道修めざることを勿れ、(二)佚遊群飲禁せざることなかれ、(三)法を犯すものを舍すこと勿れ、(四)反を謀り、若くは人を殺すものを告げざること勿れ、(五)諸國の民其所を移すこと勿れ、(六)私に城郭を築くこと勿れ、(七)異を立て、黨を結ぶもの告げざること勿れ、(八)私に婚姻を結ぶなかれ、(九)侯伯會同衛從節に過ぐる勿れ、(十)衣服の差紊す勿れ、(十一)爵位なきもの輿に乗る勿れ、(十二)諸將士儉約を厭ふ勿れ、(十三)國主人を任ずる其器を擇ばざる勿れと。これを御法度十三條といふ。家康又禁裏御條目十七條を定め、同年七月十七日に之を頒つ。されど今用なければ、擧げず。 ●よみぢの障』「よみ」は黃泉、即ち冥土にて、人の死後、至るべき國と思はれたる所をいふ、「ぢ」は路にて、よみぢは冥土の路といふことなり。即ち死にゆくをいふ。其事其物のいたく、心にかかりて、何となくよみに往きがたき意味にて、よみぢの障といふ。俗語